

るゆゑに其靈魂は彼等の眼中に塵芥視せらるゝなり。されど他の知識は其に相應して自負す。何となれば暗中を往來し其有する所のものを地上にあるものと比して之に價を附し更に極めて美なるものゝあるを知らざるによる。人皆高慢に引入らる。何となれば彼等は地上にありて其生涯を肉體を以て秤り自己の行動に依頼して人智の及ばざるものを心に考へざればなり。されば彼等は此の波間に漂ふ間は之が爲に壓せらるゝなり。しかれども聖人は光榮神聖なる道徳に大に進歩して其活動は上方に向ひ其思は發明の事と空しさものゝ處りに離れ去らす。何となれば彼等は光の中を行きて迷ふ。あたはざればなり。ゆゑにすべて神の子を認識する光に遠ざかりて眞實より離れたる者は此狭路に由りて來往す。これを知識の第一の級にして之により人は肉體の慾に従ふ。ゆゑに我等は此知識を非難し之を以て信仰に反するものとするのみならず道徳の何等の働にも反するものと爲す。

第二十七 説教

知識の第二階級

人が第一の級を棄て、眞實なる思慮と願望とに占有せらるゝときは靈性の光により身體の官能を以ても靈魂の智的想像を以ても豫め經畫せる左の卓越なる行爲を成さん。即禁食なり、祈禱なり、矜恤なり、神聖なる書を讀むなり、道徳上の生活なり、慾と闘ふなり云々。げだしすべて善なる行爲と靈中に發見せらるべきすべての美なる特質と、ハリストスの庭に於て奉事に充てらるゝ神妙なる方法とは、此の知識の第二の級に於て其力の活動により、聖神は之を成就せしむるなり。此知識は我等を信仰にみちびく徑路を心に指示して來世の爲に旅裝を支度せしめん。さりながら此に於ても知識は尙外形的なり、複雜的なり。彼はたゞ我等をみちびきて信仰に送致する途なるのみ。之に反して知識の更に高上なる階級のあるあり。もし誰か大に發達し、默想を以て人々に遠ざかると、聖書を讀むと、祈禱と、其他すべて第二の知識に關するものゝ成就せらるべき善なる行爲とに其活動の基を据ゑるときは、

ハリストスの助により彼の階級にも昇せらるべき力を発見せんすべての秀美なるものは此知識により行はるべくして彼は亦行爲の知識とも名づけらる何となれば身體の官能に頼り感性的作用を以て其行爲を外部の階級に於て成せばなり「アミン」。

第二十八 説教

知識の第三階級即完全の階級。

聴くべし人はいよく錬修し神に屬するものを受けて其生涯を見えざる天軍と匹似し得ることをけだし天軍の勤を行ふは感覺上に行はるゝ行爲を以てするに非ずして智慮により成る所のものに於てするなり知識が地に屬するものと地に屬する行爲の慮より高く昇せられ内部に隠れて眼目の達せざるものを思念するを試み、慾の放蕩の起るべきものを或る方法により輕んじて天に向ひ信仰に従つて來世を慮り我等に約束せられしものを願望して不可思議なる奧義を尋ぬる時は信仰其ものは此知識を呑み之を變化して新に之を生まん因りて其知識は全く神となるを致す。

其時知識は思想に屬すると感覺に屬する本體の性を統治する神妙不可思議なる働を智力にて想像しつゝ、無形なる者の範圍に羽翼を以て高翔し觸るゝ能はざる洋海の深きに關係するを得て單純にして幾微なる智力を以て曉り得らるべき靈界の奧義を探らん其時は内部の感覺は彼の不死不朽の生命に存する所の秩序にしたがひて靈的活動の爲に覺醒せられん何となれば猶此處に於ても思想上の復活を奧密に受るものゝ如く之を以て一般の復新の眞證となせばなり。視よ是れ知識の三の方法にして體と靈と神とに於る人の一切の經過は之と結合せらるゝを人が惡を善より別ち始むる時より此世を出づるに至る迄人の靈魂の知識は此の三の程度に存す既に述べたる如く三の程度に於る一の知識はすべての不義不法の充滿をも義の充滿をも精神のすべての秘密の深きに關するものをも生ずべくして或は善に昇るべく或は惡に降るべく或は善と惡との中間にある智力の悉くの活動は此中に在るなり此等の程度を諸神父は名づけて自然的反自然的及び超自然的といふこれ三の方針にして聰明なる靈魂の記憶は之により或は昇るべく或は降るべくして既に述べたる如く人は或は自然により義を爲すべ

く、或は其記憶を以て自然より高く取去られて自然以外に神を直覺すべく、或は出で、豚を牧すること彼の魔鬼の群と共に働きて思慮分別の富を費したる者の如くならん。

三の知識に就て述べたる事の要畧

知識の第一の級は神に進行する行為の爲に靈魂を冷にせん第二の級は信仰の階段にあるものに速に進行するが爲に靈魂を暖めん第三の級は活動を休止して、これ未來の状態なり未來の奥義を樂む智力の獨一練習なりさりながら性は死者の如くなる状態と肉體の重きとより高擧せられて他の乖離する知識より一層上なる彼の靈的知識を以て成全せらるゝことは未だ全く能はざる如く此知識も缺點を有せざる完全の爲に勤むること世の爲に死することも肉體の性を全く棄つること能はざるなりしかして人は肉體に居る間は此より彼に移る過渡の状態にあり或は人の靈魂は貧にして一物なき者の如く性中に賦されたる道德の第二の級なる中間の級に於て勤を行ふを俄に始め身體の性の助によりて爲すあるべく、或は子なるの神を受けし者の如く自由の奥義に止り價値に循ひて與ふる者の靈的恩寵を樂みて、其行為の謙遜に新に歸らんこれ身體の助によりて行はるゝ行

爲なり而して靈魂が此等を守るは敵をして此惡世に於て得る所の餌を以ても同く亦錯亂せる偏頗の思を以ても、靈魂を捕へしめざらん爲なり蓋し人は肉體の戸の帷幕の中に閉籠めらるゝ間は、希望を有せざるなりけだし不完全なる世に完全の自由あるなしすべて知識の爲す所は活動と連絡として已まざる研修とにあれども信仰の爲す所は動作を以て行はるゝには非ずして純ら心靈上の活動により心神の智的想像を以て實行せらるゝなりゆゑに彼は感覺よりは極めて高しけだし信仰は知識より精微なること知識は感覺に屬する物より精微なる如し此の行為(即ち神に大悦すること)を得るを賜はりし諸聖人は信仰の力により彼の超自然なる行為の樂みに居るなり。

知るべし信仰とは崇拜せらるべき神聖なる實在と神體其者のすべてに超絶する特別なる性と我等が性を受けて肉體となれる不可思議なる攝理此信仰は極めて高しといへどもとの差別に關して人の有するものを言ふにはあらず却て恩寵の光により靈底に輝き、智力の證明により心を堅めて何等の疑念にも遠ざかる希望の確實を以て動搖せざる信念を言ふなり而して此信仰は耳に聞くことの増加により顯はるゝには非ずして靈底に隱るゝ奧秘を見ると肉體の子の目には隠るれ

ごも、ハリストスの法を學びて、ハリストスの晚餐により養はるゝ者には神を以て
 默示せらるゝ不可見神妙なる富を見る心神の目に顯はるゝなり、主の言ひし如し、
 もし我が誠を守らば汝等に撫恤者眞實の神を遣はさん、世は彼を接くる能はず、彼
 は凡の眞理を汝等に教へん、イオアン十四の十七、二十六、彼は何れの時にも人に居
 る此聖なる力、常に人を庇ふ此庇蔭とす、すべての有害なるものを人より反拒して、
 靈魂にも身體にも之を近づかしめざる此思想の堅きを人に指示す、清明にして
 靈妙なる智は、信仰の目を以て、此力を冥々に感知すべくして、此力は諸聖人に於て
 は殊に之を實驗上に領けて認識するなり。

しかれども此方は信念の強きを以て靈魂の諸部を焼くに火を以てする如くなる
 撫恤者自からなりゆゑに靈魂は神を望み突進して如何なる危難をも輕んじ、信仰
 の翼に乗り有形造物の上に高く擧げられて常に酩酊する者の如くなり、智は神の
 測る可らざるものを學ぶに謹慎注意するものとならんことを習ひつゝ、神の照看
 に驚愕し、神の性を悟る純然なる直覺と冥々なる觀察とをなさんげだし、機密を成
 す者の來りて顯然と之を啓示するを賜ふに至る迄は、信仰は神と聖者との間に言
 ふ可らざる機密の執行を務むべく、ハリストスの恩寵により我等も此處に於て之
 を賜はること聘質の如くならん、しかれども其眞正現實に至ては、彼處にハリスト
 スを愛する者と共に天國に於て之を賜はらん、アミン。

第二十九 説教

知識の他の方法と其種々なる意味

有形なるものを學び或は有形なるものより傳へらるゝを五官にて受る知識は、自
 然的知識と名づけらるゝなり、然して思想する者の力を以て無形なる靈物の性を
 内部に於て學ぶ知識は靈的知識と名づけらるべし、何となれば精神を以て感受し
 て五官を以てせざればなり、而して此二種類は其の觀察の時に際し外より靈中に
 來るなり、之に反して神聖なる力を以て與へらるゝ知識は超自然的と名づけられ、
 殊に不可思議なるものにして、知識よりは一層上にあり、而して此知識の直覺を靈
 魂の受るは初め二知識に於る如く、靈魂の外にある物體より之を受るにあらず、却
 て此直覺は自己の内部に於て物體に拘はらず、忽然迅速且は望外に其内面より顯
 はれ來るなり、何となればハリストスの言ふ如く、天國は汝等の裏にあり、ルカ十七

の二十二前表を以て希望を養ふによるに非ず、顯然として來るにあらす神祕なる智力に印せられたる形象の内部に於て思ふことなく自然に顯はるゝなり、何となれば智は彼に於て物體を尋ぬるに非ざればなり。

第一の知識は不斷の研究と勉焉たる學習の結果なり、第二は良善なる生涯と合理的信仰の結果なり、然して第三は唯一の信仰に圖を以て與へらる、何となれば信仰を以て知識は空うせられ、活動は終を告げ、五感は贅物となりて不用に屬すればなり、ゆゑに此界限より降れば降る程知識は尊ばるべくして、いよく降ればいよく尊ばるべし、而して地と地に屬するものに達する時は、知識は悉くを管理し、知識なくんばすべての行爲は悪しく且不充分なるべし、しかれども靈魂が其直覺を高く擧げ、其概念を上天の事に及ぼして、有形の目に見えざるものと肉體の權にあらざるものとを考ふる時は、すべては信仰により組織せらるべくして、世々に讚美せらるゝ、(ロマ九の五)王イイススハリストスは此信仰を我等に賜ふべし、アミン。

第三十 説教

祈禱の狀態の事及び其他讀者が小心に守るならば、不斷の記憶の爲に必要にして、多くの關係に有益なる者の事。

人が祈禱を以て請願する時に當り神に依頼するに確立するは信仰の恩寵の極めて好き部分なり、しかれども神を信する信仰の確立は健全なる表信其ものをいふには非ず、(彼も信仰の母なりとはいへども)反つて靈魂は行狀の力に依て神の眞理を見ん、聖なる書に於て行爲と合したる信仰を見る時は、其事の斷定を以て正しき表信のこの斷定とし、視る勿れ何となれば望む所に疑なきに至らしむる信仰は未洗者或は眞理の爲に心の腐敗したる者等に於ては決して達し得られざればなり、けだし心の高尚なる人々に於る信仰の確實無疑は其品性が主の誠命に循ひて行狀に注意するの尺度により顯はるゝなり。

防するが爲及び神を愛して祈禱の淨潔に止まるが爲に有益なる記憶を靈魂に指し併て聖者の迹に従ひて進行する平安なる路を我等の前に畫すればなりさりながら祈禱の時或は毎時の誦經に於て強き感動と連續として已まざる悔悟の心の之に従て起らざる時も我等が聖詠を唱ふ祈禱の方に疑を容るゝなかれ。實驗によりて述る所の言は其言ひし者は無學の人たりとも緊要に受けよ何となれば天國の寶は地上すべてのものより大なればなり貧者の捉へたる小蟲を受けて之を身に加ふるを輕んずるなかれ川は細流より漲りて其流は大なるものとなる。

記憶を守る事

善行の記憶は自から其事を思惟するときは我等に徳行を新にするならば放蕩の事の記憶も之を想起するときには我等の意中に耻づべき欲望を新にすること顯然なり何となれば彼と此との記憶は想起する其物の差別を我等の念頭に顯はして之を畫示すること恰も指を以て我等に指示す如く或は我等が思念の耻づべきを示し或は我等が行狀の高さを示して思念と感動の右なるものをも左なるものをも我等に堅むればなり我等は之を以て智力を窃に占領せらるべくして此の心中

の占領に於て我等が生涯の運命は顯はるゝなり因て我等は不斷自己を視察せざるを得ざるなり終りにたい此の一の占領のみ之を有する者を害するにあらず之と併て現象も又此現象を自から補充する記憶も同く之を害せん且道德の一の行為のみ此行為を練習する者を強く助くるにあらずして道德に奮闘したる人々を想起するにより形作らるゝ心中の想像も彼に助くるなり。さて此事は清潔の階段に達したる多くの者が常に夜間の現象に於て或る聖人等に面會するを賜はるによりて明白なり而して彼等が靈底に印せられたる此の諸聖人の現象は日中には智力の練習に於て彼等の爲に毎時喜びの泉となるなりゆゑに彼等は道德の行為に熱心に着手すべくして之を渴望する焰は餘り有る程彼等に降らん或人言へり聖なる天使は或る尊敬すべき善良なる聖人の形を自から装ひ夢中の幻像に於て其思の高超する時此同形を靈魂にあらはして之を喜ばし之を富まして喜びに堪へざらしめん然して日中靈魂が其思念を省察するときには常に彼等を感動せしむゆゑに靈魂の活動は聖者を喜ぶが爲に緩和せらるべくして之により彼等は其進行に於て大に發達するなり戦の長く続く時に於てもかくの如くなるべし其思を惡事に占領せしむる習慣を有する者には魔鬼の助により

此を同形に於て顯はさるゝなり魔鬼等は同形を自から装ふて靈魂を恐怖せしむる幻像を彼にあらはすのみならず更に晝間の記憶を以て之が紹介者たらしむるなり或時は靈魂を恐怖せしむる此の驚くべき現像を以て速に靈魂を衰弱に至らしむれども又或時は黙想と獨居の生涯の困苦と其他の事をも彼に顯はす故に兄弟よ我等も己の記憶に注意し之により我が靈魂の状態を歸結することに關しては我等を占領する記憶に就て今後常に區別するを始めん此等の記憶の中如何なるものは我等の注意を止むべきか如何なるものは我等の思に近づくや直に之を我等より逐出すべきかこは我等に於て慾に此食物を投ずる汚鬼の陰謀に出るものなるか或は願望と刺激とより起るものなるか或は聖なる天使等より來りて我等に喜びと認識の記號を與ふるものなるか即聖なる天使等が我等に近く時我等の意思を奮起せしむる記憶なるか或は五感を以て預め受けたる印象により我等に起るものにして之が爲に或る一事に引誘する思念を心中に喚起せらるゝか此等を區別するを始めん然して此區別を認めたる後我等は左の二者に於て實驗を求め即記憶を観察すること此記憶を以て想起せしめらるゝ事を行ふに於て實驗を求め得て一定の祈禱を彼此の後に隨はしむるを勉めん

愛の種々なる階級

或る事の爲に喚起せらるゝ愛は油を吸ふ小燈の如し其光は之が爲に保たる或は雨の爲に漲る涓流の如し之を成立する雨水の減ずると共に其流は止まんしかれども神を以て原因者とする愛は地より空出づる泉と同じ其流勢は決して絶えず(けだし神は獨り愛の泉なればはり此愛を養ふ者も衰へざるなり

汝は思の旋轉なくして祈禱すべし

奉事の時に當りて聖歌を歌ふを樂み汝の唱ふる神の言の旨趣に通せんと欲するか歌ふことの多少は全く措て問ふなかれ句法韻律を諳んせんと欲ふなかれ之を唱ふることを祈禱を唱ふる如くして通常の大聲を罷めよ我が汝に言ふ所のものを會得し神を以て導かるゝ或人の書に言ふ如く談話的に之を述べよ汝の靈魂が攝理に驚嘆して其高上なる理會の爲に喚起せられ之によりて或は頌讚に或は有益なる哀みに進めらるゝに至る迄は神の言を學ぶに汝の心意を潜むべし而して祈禱の爲になるものは之を以て己の有とせよ汝の心意が此に確立する時は擾亂は位地を譲りて遠ざからんけだし僕の所爲には心に平安なく子の自由には騒がしき擾亂あらず擾亂は常に才智と明悟とより趣味を奪ひ思想を竊み去ること譬へ

ば水蛭が人の身體より血と共に生命を吸取る如し。擾亂はもし名づけ得べくんば
 魔鬼の車輪と言はんこと當然なり何となれば「サタナ」は騎士の如く才智を馭し、怨
 の堆積を自から取集め、此等と共に不幸なる靈魂に入りて、靈魂を煩悶の中に葬む
 るに常に慣るればなり。しかれども亦左の事をも思慮して、理會せよ。汝の聖歌を歌
 ふに當り、他より言を借る者の如くなるなかれ。教訓の事を増して已まざる如く思
 はしめざらん爲なり。句中より汲む所の感嘆と喜悅とより全く遠ざからざらん爲
 なり。之に反して汝の願の言は感動と思慮ある理會と共に自己の中より發する如
 くすべく、其行爲を實に理會する者の如くすべし。

煩悶は何の爲に心に起り、心意の高超は何より生ずるを認むべし。
 煩悶は心意の高超より生じ、心意の高超は閑散と讀んで徒らに談ずることより生じ、
 或は又腹を過分に満たしむるより生ずるなり。

悪念に逆はずして神の前に己を捧ぐべき事。
 もし誰か敵が種く所の思念に逆はず、反て神に祈禱して之と通話するを絶つなら
 ば、是れ其心意は恩寵により睿智を得たること、其眞實なる知識は彼を多くの事より
 自由ならしめたること、達すべき捷徑を發見して、長き旅路に於る長き間の心意の高

超を切斷したることの徴候となるべし。何となれば我等は凡て反對の思念に逆ふて
 之を絶滅する程の力を何れの時にも有するあるにあらざりて、反つて長く踞すべ
 からざるの疵を之より受ること度々なればなり。汝は最早六千年程経たる者を出
 で、咒咀せんとす。然れども此は汝の全く賢なること、汝の全く善智なることに拘はら
 ず、彼等の爲に汝を撃敗し得る武器とならん。さりながらたとひ汝は彼等を征服す
 とも、其時にも思念の不潔は汝の心意を汚して、厭ふべき臭氣は長き間汝の嗅官に
 残らん。されば如上の方法を用ひて、此のすべてを其恐れとより免るべし。何となれ
 ば神の外に他の助なければなり。

涙の事

祈禱の時に於る涙は靈魂が悔改を以て神の憐れを賜はりし徴候なり。即祈禱が受け
 られて涙を以て淨潔の田中に入るを始めたる徴候なり。けだし人々に於て暫時な
 るものと思ふ思念を除去す。此世の望を自から抛棄せず。世を輕んずる心は彼等
 に起らずして、彼等は出發の爲に善良なる旅装を預備するを始めず。彼處に在る所
 のものを思ふ思念は心中に復活し始めずんば、目は涙を注ぐ能はざるべし。何とな
 れば涙は純然無雜にして高く飛ばざる沈思と頻りに起りて退かず止まる多くの

思念と心中に行はるゝ或る機微なるものに於る記憶と此記憶を以て心を哀ましむるの結果なればなり此により涙は増加して、いよく大ならん。

操作と食銀の事

汝が黙想を務むる時に於て操作に轉ずる時は父の職命を以て己の貪心を包む被覆となすなかれ憂鬱を避くる爲に汝には心を擾さざる程の繁多ならざる用事あるべし。しかれども矜恤の爲に多く事を執らんを願ふとも順序に於て祈禱は矜恤より上なるを知るべし之に反して身體の要求の爲ならばたとひ汝の爲に飽かざるありども汝の必要を充たす爲に神が汝に分與するものを以て汝の爲に足れりぞせよ。けだし神は決して其當事者を棄てゝ暫時なるものに乏しきを忍ばしめざるなり。主は言へり先づ神の國と其義とを求めよ。然らば此等の者は皆汝等に加はり「マテフエイ六の三十三」で汝等の願に先だゝん。

或る聖人は言へり曰く飢る者を飽かしむることと外來者の爲に汝の精舎を旅館に充つることとは汝の生涯の順序にあらず。是れ俗人の行爲なり。此行爲は彼等には特に適當にして美なる行爲なり。然れども有形上の慮より自由を得て其心意を祈禱に於て守る所の遁世者には不適當なり。

第三十一 説教

遁世的生活の事及び我等は畏れず驚かず神に依頼して心を堅むべく、確たる信仰を以て勇氣なるべし、何となれば神を看守者として爲し守護者として爲せばなり。

自由の國に於て輕き輓を有する遁世的生活に堪ふる者となるときは畏の念慮は汝をして通常の如く意思を種々様々に變じて其意思の爲に占有せらるゝを免れしむるのみならず却て汝の守護者の汝と共にするを殊に確信せしむべし。而して汝の智慧も全く確實に汝に保證して汝もすべての獨一主宰の下に居ると主宰が一指塵を以て萬物を動かし且振はし且鎮め且建つることを信せしむべし。すべての人の爲に慮りすべての人を統治する者の許可なくんば、一僕も其の或る同僚に害を加ふる能はざるなり。ゆゑに汝は直に起ちて勇氣なるべし。自由は或者等に與へらるゝも如何なる事に於ても與へらるゝにあらす。けだし魔鬼も有害なる野獸も邪なる人々も統治者の意の允許あるなく、一定の量を以て位地を與へられずんば

彼等は其害せんと欲する望を遂ぐる能はざるべし統治者は自由にも其自由を全く働かすを許さざるなりもし此事の無かりせば生物に一片の肉も存せざりしならん主は魔鬼と人々の權が其受造物に近づき彼に於て其望を遂ぐるを許可せざるなりゆゑに常に靈魂に告げて言ふべしわれを護る守護者は我にあり上より命せらるゝにあらざるば一の受造物も我が前に現はる能はざるべしと而して彼等が汝の目前に現はれ汝をして其の威嚇の言を汝の耳に聞かしむるを敢てせざるを確信すべしけだし天より至上者を以て許可せらるゝならば言を待たずして事は其の望に隨はん

之と同一自己に告げて言ふべしもし悪者をして造物に占據せしむるは我が主宰の旨ならば主の旨の成らずして存せんことを願はざるにより悲ますして之を受けんとかくの如くならば汝の誘惑に於ては主宰たる指麾の汝を統治し且管理するを既に探知して確に之を自覺したる者の如く喜に満たされん終に主に依頼するを以て其心を堅めよ夜の震蕩と晝の流矢とを懼るゝなかれ聖詠九十の五げだし録して言へり神を信する義人の信仰は野獸をも羊の如く溫柔ならしめんと汝は言はん予は主に依頼する程の義人に非ずとしかれども汝は實に義を行ふが

爲に患難を満たさるゝ野に來り之によりて神の旨に順ふ者となれり人間の勞苦はたゞ其哀みを神に愛の祭壇に献る時は神に望ありもし然らずして此勞苦を任するならば徒らに勞するなりすて神を愛する者と神を愛するにより己を憂患に投する者とは此思慮分別を示すけだしハリストスイイスによりて生くるを喜ぶ者は神を敬畏するにより己の爲に患難を選び窘逐を忍ばんゆゑにハリストスは彼等を以て奥密に藏する寶の領有者と爲すなり

感謝と勇氣とを以て誘惑を忍耐する者に與へらるゝ利益

或る聖人の言へるあり曰く遁世者たる一の貴き老人あり一日彼を訪ひけるが予は誘惑の爲に自から哀めりき彼は病に寝たり余は彼に問安し其側に在りて左の如く彼に告げたり父よ我が爲に祈禱し給へ何となれば魔鬼の誘惑は我を甚だ哀ましむればなり云々其時彼は目を開き我を熱視して言ひけるは子よ汝は幼稚なり神は汝に誘惑を遣すを止めざらんと言ふ諾すは甚だ幼稚にして力の強き人の誘惑を忍受す彼續て言ふ神は汝を最早智ならしめんを欲す予反論して言ふ如何ぞ我を智ならしめん予は日々死を嘗む彼答て言ふ神は汝を愛す黙せよ神は汝に其恩寵を與へんと其後之に加へて言ひけるは知るべし子よ予は魔鬼と三十

年の間戦ひたりしが二十年を過る間は己の爲に絶て助を見ざりき而して後の十年の中第五年も將に終らんとする時始めて慰安を見たり然るに時を経るに隨ひ慰安は増々加はり第七年を過ぎて第八年の將に至らんとするや慰安は更に大なる量に達せり三十年の間の進行に於て最早其年も終に近づかんとするや慰安は如何に大になりしか其量を知るべからざるに至りきと彼は更に之に加へて言へり神の奉事を行ふが爲に起たんと欲するや予は尙一の讃美「カフイマ」の三分の二を成すを得たりきされども其餘に至ては如何なるか三日立つも驚愕して神と共に居り少しも勞を感せずと視よ多く勞すると長き間の行爲は如何に飽く能はざる慰安を生ずるを。

舌を守るは心を奮起して神に向はしむるのみならず節制にも助成す。一週間に二度食事をなせる一の老人ありけるが我等に告ぐること左の如し予は或人と暫く談話するや其日に於ては予が爲に禁食の規則を通常の如く守る能はざるのみならず禁食を解くことをも餘儀なくせらるるを。それ舌を守るは心を奮起して神に向はしむるのみならず身體の助により行はるゝ顯然たる行爲にも之を

成すが爲に大なる力を寄に得しめ之と同く奥密なる活動にも光を受けしむること諸神父の言ひし如くなるを我等は了解せり何となればもし誰か知識を以て沈黙を監守するならば口の守りは良心を奮起して神に向はしむるによる此聖者は夜を不眠に送る大なる習慣を有しぬけだし言へり朝に至る迄立つ其夜に於て余は聖詠を歌ふと共に徹睡みけるが眠の覺めし後其日に於ては恰も此世に屬せざる人の如く地上何等の念慮も予の心に生せず又一定の規則にも要あらずして是日は終日驚愕の中にありきかくて是より先何も食はずして四日を過ぎし後予は一日食をなさんを欲せり予は晩の奉事の後に食せんと欲し庵の戸の前に祈禱に立ちけるが其時日は猶高かりき既にして奉事を始め唯第一讃美の間に於ては自覺と共に行ひしが其後予は何處に在るをも知らずして之に止まり翌日太陽の更に昇りて予が面を煖むるに至る迄は依然として此状態にありき而して太陽が強く予の安を破り予の面を焼き始むるや其時予の心は我に歸りてこゝに予は最早翌日になれるを識り神の恩寵の人に注ぐこと幾ばく大なると神は其跡に従ふ者にいかなる大事を賜ふことを熟思して神に感謝し始めたりき此後光榮と美麗とは獨り彼に世々に歸することは當然なりアミン。

第三十二 說教

心中内部の奥密なる徹醒は如何して守らるゝか、嗜
眠と冷淡は何處より心中に來りて、聖なる熱愛を靈
底に消し、靈界天上の事に熱心する精神を奪ふて、神
に向ふを滅殺するか。

反對は善なる願望を有する者に之を實行するを妨ぐる能はず、たゞ惡者は善なる
ものを願ふ者の缺點を捜して悪しき口實を設くるのみならん。これ左の理由によ
る。すべて善なる願望の意思には其活動の始に當り、或る熱心の之に伴ふありて、其
熱切なること熱炭の如し、ゆるぎに其の熱心は居常此意思を保護して、いかなる反對
妨礙及び阻滯の近づくをも許さざるなり、何となれば此熱心は種々の困難なる事
情の傾注するに當り、靈魂を衰弱或は畏怖より保護する大なる堅固と言ふ可らざ
る力を受ればなり。それ第一の意思其ものは靈魂の性に天然に植付けられたる
聖なる願望の力なる如く、此の熱心も心中刺戟の力を以て感動せらるゝ意思にし

て、天然の界限を守る爲にも心中に存する天然の願望を實行して己が自由に對す
る概念を顯はす爲にも神より我等に與へられて、我等を益するものなり。是れ即道
徳なり、之なくんば善なるものは生ぜざるべくして、之を名づけて熱心といふなり。
何となれば彼は始終人を活動振起せしめ、奮熱堅固ならしめて、患難に於ても其遇
ふ所の恐るべき誘惑に於ても肉體を輕んじ、其生命を不斷死に付して、靈魂が強く
願望する所の行爲を遂成すが爲に出で、背棄者の勢力を迎へしむればなり。
ゆるにハリストスを衣たる、或者は此熱心を自語にて名づけて神の法の犬といへ
り、即道徳の犬又は番人といへり、けだし道徳は神の法と名づけらるゝなり。此の熱
心の力は家を守るが爲に二つの方法を以て堅固にせらるべく、覺醒せらるべく、又
鼓舞せらるべくして、之と同一の方法を以て衰弱と惰眠と怠慢とにみちびかる
ゝなり。即覺醒と鼓舞とは人をして其得たる所或は得んと欲する所の善の爲に、
み去られんを恐れしめ、或は何等の機會により、又は終局に至りて滅されんを恐れ
しむる、或る畏懼の念の人に生ずる時に起るものにして、此は神の照管により人に
喚起せらるゝなり、知るべしすべて堪能なる道徳の當事者に於る此畏懼の念は靈
魂を覺醒し且奮熱せしめて嗜眠に陥らざらしめんために心中に存在するものな

しかれども此畏懼の念の性中に喚起せらるゝ時は我等が犬と名づけたる熱心は、
 猛烈なる火爐の如く、日夜熾に燃えて性を覺醒せん。されば人はヘルワムの如く覺
 醒して、窃み去らんとするものに時々刻々注意するが故に、前述或者の言へる如く、
 もし鳥が其傍を過ぐるあれば最敏捷と得も言はれざる性急を以て動きて吠え
 ん。然るに此畏懼の念が身體の爲に起る時は、サタナ的畏懼とならん。何となれば人
 は神の照管に對する信念に動搖を來し、神が時々刻々監視して道徳の爲に苦闘す
 る者の爲に照慮し給ふを忘るればなり。此事を聖神は預言者の口を以て左の如く
 いへり、曰く、主の目は義人を顧みる云々〔聖詠三十三の十六〕又いふ、主の與義は彼を
 畏るゝ者に屬す〔同上二十四の十四〕又主を畏るゝ者に主は面り自ら告げていへり
 曰く、惡は汝に臨まず、疫癘は爾の住所に近づかざらん〔聖詠九十の七〕
 さりながら道徳が遭遇するもの、或は道徳に伴ふ所のものに因り、靈魂の爲に畏懼
 の念の生ずる時、即ち窃み去られざらん爲及び何の理由によりてか毀損をうけざ
 らん爲に、畏懼の念の生ずる時は、此念は神聖なり、其慮は善良にして憂愁と疲勞と
 は神の照管により生ずるなり、而して又他の方法あり、即道徳の願望が靈中に大に

成長するとき、犬の勢力と奮起の顯はるゝもの、是なり、けだし願望が靈中に成長す
 れば成長する程、此犬も、即道徳に對する熱心も奮起せらるればなり。然るに之を冷
 却ならしむる第一の緣由は、此願望が靈中に減少し、且は灰滅するの時なるべく、第
 二の緣由は、信任と大膽の或る念慮が靈魂に入りて之に占據するの時なるべし、而
 して人は自負して何等の力よりも害をうくるを恐るゝの故無しと思ふて、其思を
 把持せんとす、故に熱心の武器を自から排斥して、番人なき家の如くなり、犬は長眠
 して、永く看守を棄てん。
 心中の家は、此念慮の爲に竊み去らるゝこと甚だ多し、而してこは彼の聖なる認識
 を以て輝ける、淨潔が靈中に暗くなる時に之あるべし、何によりて彼は暗くなるか、
 けだし最機微なる驕傲の或る念頭が靈中に入りて、彼處に巢を作るによるべく、或
 は人は暫時なるものを慮る憂慮に沈み、又は人の爲に誘惑的なる世の交際に屢々
 耽るによるべし、或はこは一切の惡の腹なる此主婦の腹より生出づべし、苦行者は
 世と交際するならば、其都度靈魂は直に衰弱すべく、多くの人々と會合する時も亦
 同く然らん、彼等は浮誇によりて彼の靈魂を必ず挫折すべし、之を畧言すれば、敗走
 する苦行者の智は、もし世と交際するならば、之を譬ふるに彼の船長が安然と海に

航して俄に海底暗礁の中心に觸れ破壊の難を被むると同じかるべし。我等が神に光榮權柄尊敬及び美麗は世々に歸すアミン。

第三十三 説教

心中に續生し、祈禱を以て試みらるゝ多くの變化の事。

善なる願望を採取するは願ふ者の事なり、然れども善なる願望の選擇を全うせしむるは神の事なり、之が爲に人は必ず神の助けに必要あり、ゆゑに我等に現はれし善なる願は、之に屢々祈禱を伴はしめて、我等に助をあらはさんことを願ふのみならず、此願が神の旨に適ふや否を我等に識別せしむることをも願はんげだし、神によりて心に入るものはすべての善願に非ずして、たゞ有益なるものなり、時として人は善なるものを願へども、神の之に助けざるごとあり、何となれば之に類する或る願が魔鬼よりも入りて助となるものゝ如く思はるれど、人に相應せざるごと屢々之あればなり、魔鬼は自から人に害をなさん謀り、人をして其願ふ所のものに

適當する生涯に未だ達せざるごときに強て之を尋ねしむるなり、或は其願は人の自から擔任したる方法と違さることあり、或は之を實行し、又は其實行を始むるを能くすべき時の未だ來らざるごとあり、或は人は其行爲の爲に充分なる知識も力も有せざるごとあり、或は時の事情が我等に其事に助けざるごとあり、然るに魔鬼は種々なる手段を以て此の善なる行爲の假面を被りて、或は人を亂し、或は人體に害を被らしめ、或は其心中に網を伏せんとす、さりながら予の既に言ひし如く、我等に善なる願のあらはるゝ時は、勉勵して屢々祈禱を行ふべく、我等おのゝ自己に告げて言ふべし、此の我が遂げんと欲する善なる行爲は、汝の意に適するならば、之を成就するに至る迄、汝の旨は行はれんげだし、此の行爲は我が爲に好都合なり、然れども汝より遣はさるゝ賜なくんば、之を遂ぐる能はざるべし、彼も此も望む事も爲す事も、フィリップの十三汝よりするに拘はらず、之を遂ぐる能はざるべし、何となれば汝の恩寵なくんば、我に起る此願を採用することさへ予は決せざりしなるべく、或は之を恐れしならん、げだし、善なるものを願望する者の爲に慣例は左の如し、即ち行爲の爲にも、聰慧を獲て眞なるものを偽なるものより分つが爲にも、智慮により祈禱を用ひて助となすこと、是なり、それ善なるものは多くの祈禱と行

爲と保護と不斷の服従とにより又連々たる涕泣と謙遜と天の助けとにより選擇するを得べし矧や之と反對なる驕傲の念慮の人に存する時に於てをやけだし此念慮は神の助の吾人に至るをゆるさず即此の念慮を祈禱により不活動ならしむるを許さざるなり。

第三十四 説教

神に近づきて生存し認識の生活にて日を送る事。

一の老人あり其庵の壁上に數語を題して種々なる思想を書付けるを人々問ひて「是れ何の謂ぞや」といひしかば彼左の如く答へき是れ即我と共に居る天使より來れる義の思想と我に生ずる天然の正しき思考なり此等の現はるゝ時之を書留むるは予が暗くなれるとき之を用ひて我を迷より救ひ出さしめん爲なりと。又他の老人あり暫時の世に代へて不滅なる希望を賜はれりとて其思想を讚美せられければ老人は答ていへり我尙道中にあり我を讚するは無益なり我未だ路を終へざるなりと。

美なる道徳に拮据勉勵して之により樂を味ふを感せずんば驚くなかれ。人は謙遜にならざる間は爲す所のものゝ爲に賞を受けざるなり賞は爲す所のものゝ爲に與へらるゝにあらすして謙遜の爲に與へらる。後者を輕んずる者は前者をも失ふ先づ謙遜になりて善なる行の爲に既に賞を受けたる者は道徳の行爲を有する者に卓越す道徳は哀みの母なり哀みにより謙遜生じて謙遜に恩寵は與へらるゝなりされば報酬は道徳の爲に來るに非ず又之に勞したるが爲に來るに非ずして此等によりて生ずる謙遜の爲に來るなり謙遜を失ふときは前者は無益ならん。

道徳を鍊修するは主の誠命を守るにあり鍊修の富は視よ心意の善良なる預備是なり而して其預備は謙遜と之を守るに存す前者の力の衰ふるや之に代ふるに誠命を以てすさればハリストスの要求するは誠命の行爲にあるにあらす心の匡正にありて其匡正の爲に法下の者を誠命に則らしめたりき身體は右にも左にも一様に働けども智は欲する所の如何により或は義とせらるべく或は罪に陥るべし。或者は左なる行爲を以ても神の睿智により生活を爲せども或者は神聖なるものゝ假面を被りて罪を販賣す。

己を保護する者の爲には缺點も義の守護者とならん試惑の無き賜は受くる者等の爲に不幸なりもし神の前に善行を爲して神は汝に賜を與へんとするならば自から謙遜すること或は汝の爲に其賜に監守を附すると或は之を汝より取上ることが汝の爲に幾ばく適當なるを認むるの認識を汝に與へ給はんことを神に祈願すべし其賜が汝の爲に滅亡の因とならざらん爲なりけだし富を守るは何等の人の爲にも無害なるに非ず。

道徳の爲の慮を自から任ふて嚴重と敬神とに生活する靈魂は日々衰みなくして存する能はざるべし何となれば道徳は哀みと結合すればなり患難を避くる者は必ず道徳とも別るゝこと無論なり道徳を願望するならばもろくの患難に己を付せよけだし患難は謙遜を生めばなり神は靈魂の憂慮なからんことを欲し給はず憂慮を有せざらんと欲する者の念ふ所は神の旨の外にあり憂慮とは肉體に屬するものゝ爲に慮るを言ふにあらす善行に従ふ者を困しむる者の爲に慮るをいふ眞實の認識に達せざる間即與義を看破するに達せざる間は試惑に頼りて謙遜に近づかん患難なくして道徳に居る者の爲に驕傲の門は開かるゝなり。

誰か其思に悲哀無らんことを願ふか凌辱なくんば心は謙遜に居る能はざるべし、

然して謙遜の徳なくんば神に祈禱するに純ら従事する能はざるべし先づ人は其思を以て當然なる憂慮より遠ざかるべくして次で驕傲の神は人に近づかん人が驕傲に居る時は人の近きに在りて正義の慮を人に喚起するを職とする天使は人より遠ざからん人が此天使を輕んじて天使も人に遠ざかる時は他者あり人に近づくべくして其時よりは正義に於る何等の慮も最早人にあらざるべし。

智者言ふ驕傲は破壊に先だち箴言十八の二謙遜は恩賜に先だつと心中にあらはるゝ驕傲の尺度に随ひ神が靈魂を瞭解せしむる破壊の尺度も之と相準するなりしかれども驕傲とは其念頭が智覺にあらはれ或は此念頭に暫時勝たるゝ時の謂には非ずして人に常に留在する高慢をいふ高慢なる思念には破壊隨ひ然して人が高慢を愛する時は最早破壊を知らず。

我等の神に光榮と美麗は世々に歸すアミン

第三十五 説教

世に服従する事

主の言は眞實なり言へらく人は世に服従すると共に神に對する愛を受る能はず

世に交ると共に神に交り、世の爲に慮ると共に神の爲に慮る能はずとも、浮誇の爲或は身體に必要なるものを屢缺くが爲に神に属するものを棄つるならば多くの者は直ちに我等を離れて他方に去らん或は天國の爲に勞するに既に同意を表して主の言ひ給へる左の約束を了會せざる者あり主は言へりもし汝等のすべてを汝等より奪はざるべく其他のものと共にすべては汝等に來らんけだし汝等が自己の爲に慮るを許さず主は不慮なる物の爲に造られたる鳥の爲にさへ慮りて我等の爲に慮らざるか是れ能はざるなり誰か靈に属するものと靈に属するものに資くるものゝ爲に慮るならば體に属するものは幾ばく何時入用なるを慮るなくして之を其者に與へらるゝなり之に反して體に属するものを必要以外に慮る者は料らず神より離れんもし我等は主の名の爲に要用なるものを勉めて慮るならば主は其の爲にも又他の爲にも我等が苦行に準じて之を慮らざるなりながら我等はわが心靈上の行爲に換ふるに身體に属するものを以てして神を試みるを方めず自己のすべての行爲を未來の幸福を望むに向はしめん靈魂を愛するにより一たび己を道徳に付して其爲す所の業を遂げんと欲する者は此後

身體に属するものは有無に拘はらず之を心に掛けざるべし此事に關しては神は屢々徳行家を或る事の爲に試みらるゝに放任し彼等に向つて八方より誘惑の起るを許容し彼等が身體を撃つとイオフの如くし彼等を極貧に陥れ人々を彼等より遠ざけ彼等が獲得したるものを以て彼等を撃たんと其靈魂には害は近づくざるべしけだし義の路を行くや道徳に生活するを愛するならば悲哀の我と遭遇せざらんことも身體が疾病勞苦の爲に弱らざらんことも憂らずして存在せんことも能はざるべしされどもし人は或は嫉妬に任じ或は其靈魂を害ひ或は靈魂の爲に他の有害なる事を爲して我意のままに生活を送るならば定罪に服せん之に反して人は義の路を行き最早神に向ひ進行して之に相當なるものを多く受け或は之と相類する事に遭遇するや其路より離るゝは彼の爲に不適當なり彼は喜んで好奇の心なく之を受け神が此恩寵をつかはして神の爲に誘惑に陥りしを感謝すべく豫言者使徒及び此道の爲に患難を忍耐したる多くの聖者と苦難に於て同伴者となるを賜はりしを感謝すべし誘惑の人に臨むは或は人々よりすると或は魔鬼よりすると或は肉體よりすると論なく神の指麾なくんば誘惑の來ることも之を許さるゝこともある能はず彼の爲に義に赴くの端緒となるべしけだし神

と共に居らんことを願ひ始めたる者に、神は眞理の爲に試惑をつかはさずして、別に恩恵を施すことは能はざるべく、人も此大事を受けるに當る者となることはハリ、ストスの恩寵なくんば能はざるべし、即此の神聖なる勞苦の爲に誘惑を受けて、大に喜ぶに當る者となることは能はざるべし、聖パウエルは此事を證す、けだし此事の大なるは人が神に依頼するにより、苦を受るに準備せらるゝや、使徒は明に之を名づけて賜といへる程大なり、パウエル言ふ、神によりて我等に賜はりしは、たゞ彼を信することのみならず、彼の爲に苦を受くることなりと、(フィリッピ一の二十九) 聖ペトルも之と同く其書に於て言へり、義の爲に苦を受るときは福なりと、(ペトル前一の十三終) 汝は自由に生活するときは喜べども、患難に於ては憂鬱し、之を以て神の路に遠ざかれりと思ふべからず、けだし彼の路は世々代々十字架と死とを以て啓かるゝなり、しかるにかくの如き思は、汝に何處より來るか、汝が神の路の外に在りて之より遠ざかり、聖者の路に從て行くを欲せざるとき、或は己の爲に他の特別なる路を作り、之に由り苦ますして行かんを欲することは、此により審知すべし、神の路は日々の十字架なり、爽快に生活して天に昇りし者は、あらず、爽快なる路のことにつきては、其路の何處に終るを知るべし、全心を以て己を神に任したる者の

憂慮無き者とならんことは、神の旨に適せざるなり、然れども、其憂慮は眞理の爲ならんことを要す、此によりて知るべし、神が彼に哀みを不斷遣すときは、彼は神の照管の下にあることを、誘惑に居る者等が魔鬼の手中に落ちんことを、照管は決して許さざるなり、例や彼等は兄弟の足を接吻し、其疵を掩ひ、且匿すこと、自己の疵の如くするに於てをや、此世に於て憂慮無らんを欲し、切に之を願ひつゝ、更に道德をも練修せんと欲する者は、道德の途に在るに非ず、けだし義人等は己の願に依て善行に奮闘するのみならず、意に反するも誘惑と烈しき戦闘を持續して、己の忍耐を試みるなり、神を敬畏する心を自己に有する靈魂は、有形上に害を加へんとする何物をも畏れざるべし、何となれば、今より神を頼みて、世々に至ればなり。

第三十六 説教

或る顯然なる奇徴を己の手には有せんことを必要なくして願ひ且求むべからざる事。

主は其聖者に接近して彼等に助くるや何れの時にも或る行為と物體的奇徴とにより其力を必要なくして顯然とあらはさざるは其施す所の助の無益とならざらん爲及び如何なる害にもならざらん爲なり而して此の如く爲すは聖人の爲に照管しつゝ、其奥密なる處を片時も止めざるを彼等に示さんと欲するものにして如何なる事に於ても力に應じて其苦行をあらはし祈禱に勉苦するを彼等に委任するなりされどもし事が困難にして彼等に勝ち彼等衰弱して其天性も之が爲に十分なるにより成弱する能はざる時は其權威の大なるにより主は自から之を成就せしめんされば彼等は主の自から知る如く緊要なる助を受くべくして力を以て其患難に抵抗するに至る迄は出來る天主は奥密に彼等を堅むるなりけだし彼等が艱難のすべての路は彼等に賜ふ所の知識を以て解決するを爲さしめ其直覺

により彼等を覺醒して彼と此との場合に有益なる讚美を献げしむるなりされどもし事が顯然とあらはるるを要するならば主は緊要に之をも願はずといへども其方法は缺乏と必要とを充たすに十分なる最睿智なる方法にして或る偶然に選擇せられし方法には非ざるなり。誰か必要なくして敢て此を試み或は神に祈禱して奇蹟異術を其手に有せんことを願ふならば其智は罵詈雑言たる魔鬼の爲に試みらるべく其良心は自負するもの且は爾劣なるものと認められんげだし艱難に於ては我等に神の助を求むること肝要なりしかれども必要なくして神を試むるは危し之を願ふ者は實に義なるに非ざるなり主の恵み給ひしに非ずして爲しものも多くの聖者の爲に得らるることありさりながら必要なくして己が意のままに之を願ひ之を渴望する者は保護を奪はれて陥るべく真理の知識に失脚せんげだし神に求むる者が其求むるを敢てせし如く聽納らるゝならば惡者は彼に於て其願ひ得たる所のものを見て更に大なるものを願はしめん之に反して眞の義人はたゞ之を渴望せざるのみならず與へらるゝときは之を辭すべく人々の目前に於て願はざるのみならず奥密にも己の爲に之を願はざるなり。

けだし、視よ、聖神の一人は其淨潔の爲恩寵に依りて彼に來る所の者等を預知する賜を受けたりしが、其賜を取上げ給はんことを神に祈りぬ。老人の爲に請はれたる他の聖者も彼と共に祈りき。然して彼等の中或は此賜を受けし者あるは、是れ其の必要に依り、或は其の正直に依りて之を受け、他の人々を神の指麾を受けるに獎勵するものにして、之が特別の理由無くんばあらざること論を俟たざるなり。

聖にして福なるアンムンは聖大アントニイの安を問はんが爲に行きて路に迷ひしことあり、視よ、其時彼は神に何を言ひて、神も彼に何を爲し、か父マカリイの事及び其他の人々の事をも想起せよ。眞實の義人は常に自から己を以て神に不相應なる者と思惟す。然れども彼等が眞の義人たることは、彼等己を廢れたる者と爲し、神の配慮を受くるに當らざる者と爲し、陰にも陽にも此事を承認めて、之が爲に聖神を以て智慧附らるゝにより確知せらるゝなり。是れ彼等は適當なる心配を有たざる者とならずして、此生命の存する間は勞苦せんが爲にして、其の安息の時を神は彼等の爲に來世に於て守りぬ。ゆるに生活する主を自己に有する者等は、靈界の事に於る奥密なる慰藉の時々與へらるゝに拘はらず、安心せずして、患難より免かるゝを願はざるは、之が爲なり。

道徳に到り達するや、其人が憂慮と勞苦とを有せずんば、最早道徳には非るなり。視よ、神の里は安然にして、事を遂ぐべき方法のあるにも、拘らず、不斷己を強て、從順ならしむるにあり、何となれば、神の旨はかくの如きものにして、神の居る所の者等を、懶惰に習はしめざるにあり、反て神は彼等をして、安然を尋ねしめざるのみならず、特に活動と大なる憂慮とに従はしむるなり。神は誘惑を以て彼等を堅めて、彼等を聰慧に近づかしむ。其愛する所の者等の勞苦に止まらんことは、是れ神の旨なり。

安然に生活する者に、神の神が居らずして、魔鬼の靈の住むことは、神を愛する者との言ひし如し、曰く、余は如何なる日にも死せんを誓へりと、神の子と他の者との差異は、彼は憂患に居れども、世は奢侈と安然を以て誇るにあり。けだし、其愛する所の者等が此體を有する間は、自から安息せんことを神は善みんじ給はず、却て彼等世に居る間は、憂愁と患難と勞苦、缺乏、裸體、獨居、貧窮、疾病、卑賤、辱に居り、心を傷ましめ、身を勞し、親族に嫌はれ、哀しき思を爲さんことは、殊に其欲する所にして、彼等は一切の造物に對して、他と異なる意見を有し、通常人間の住所と同じからざる住所と寂寞として、人々の目に陋視せらるゝ。遁世的居住を有して、此處に人を樂ましむべき如何なるものをも有せざるなり。修道士は哀めども、世は笑ひ、彼等は嘆息すれ

ども世は樂み彼等は禁食すれども世は華美を盡す彼等は晝は働きて夜は困迫と
 勉強を以て苦行を專にす彼等の或者は隨意的憂患に居れども他者は慾と戦ひ
 つゝ勞苦に居り或者は人々に叱責せらるれども或者は慾の爲に魔鬼の爲及び其他
 の爲に苦む甲は放逐せらるれども乙は殺され或者は綿羊の衣を衣る云々(エウレ
 イ十一の三十七)世に在て患難をうけん然れども我が爲に勇めよ(イオアン十六の
 三十三)言へる主の言を彼等は實行せり主は肉體の安きに居る者の主を愛する
 に止まる能はざるを知る故に安きと安きを樂むとを彼等に禁せり。
 願くは我等が救世主ハリストス愛を以て肉體の死に勝つ者は我等に其愛の堅き
 を現はさんことを。

第三十七 説教

神は何故神を愛する者に誘惑を放任するか。

諸聖人が神の名の爲に苦を受けて其愛を神にあらはしたるにより神は彼等を困
 難に留置くも其愛する所の者より離れざるときは諸聖人の心は露面を以て神を

見るの勇氣を受け希望を以て神に求めん勇氣あり祈禱の力は大きなり故に神の放
 任するは其聖者が種々の哀みを以て試みられん爲にして之と同く彼等は神の助
 と神が彼等を幾ばく照管することを實驗を以て試みせん爲なり何となれば試惑に
 困り聰慧を受るによる之を放任するは彼等は無學にして存すれど彼と此とに習
 ふを奪はれずして經驗によりすべの爲に知識を得て魔鬼より笑はれざらん爲
 なり何となればもし彼等をたゞ善良なるものを以て試みたらんには他の部分に
 於て學習することが彼等に缺乏し戦闘に於て彼等は盲目なるべきによる。
 もし神は彼等に之を識らしめずして彼等を之に習はすと云ふならば是れ即ち神
 は彼等を牛馬と同視して何等の自由をも有せざる者と爲さん欲すと云ふを意
 味するなり人は先づ悪なるものゝ實驗を以て試みられずんば善なるものに趣味
 を有せずして善なるものに遇ふときは認識と自由とを以て之を益用すること自
 己の所有の如くせざるべし經驗と練習とにより實際に借來れる知識は如何に愉
 快にして久しき經驗を以て之を自己に得たる者に如何なる力を與ふるか此事は
 知識の助をも同く又天性の劣弱と神の力の助けをも經驗して之を確信したる
 者は之を認識するなりけだし神は先づ其力を止めて彼等を助けず彼等をして天

性の無力と試惑の困難と敵の悪謀と彼等が何者と戦ひて天性に如何なるものを
 衣ると神の力を以て如何に保護せらるゝと其路を幾何進行すると神の力は彼等
 を幾何高うすると又此力が彼等に遠ざかるならば怒と戦ふに幾何無力なることを
 自覚せしむるならばたゞ其時に於て彼等は之を認識せん因りて彼等は此すべて
 により謙遜を受けて神に近づき其助を待ちて祈禱を専ら務むるを始むるなりも
 し神意により多くの悪に陥りて之が爲に經驗を求得ずんば此のすべてを何處よ
 り借り來るべきか使徒の言ふ如し曰く「默示の至大なるによりて我が高ぶらざら
 ん爲に一の刺は我が肉體に與へられたり即サタナの使なり」(コリントフ十二の七)さ
 りながら人は試惑に於て神の助を幾回か實驗して堅き信仰を求め得べく之によ
 り恐れざるものとなるべく其得たる練習により試惑に勇敢なることをも求め得
 べし。

試惑は凡の人に益ありけだし試惑はパウエルに益あるときは凡の口塞がり世は皆
 神の前に罪あるを致す「ローマ三の十九」苦行者の試みらるゝは彼等に其富を増さん
 爲なり衰弱者の試みらるゝは彼等己を有害なるものより保護せん爲なり睡眠に
 耽者の試みらるゝは覺醒に準備せん爲なり遠く離れし者の試みらるゝは神に近

づかん爲なり神に親しき者の試らるゝは勇氣を以て樂まん爲なり凡て學ばざる
 子の父の家より富を受るは己の助とならざらん此により神は先づ試み先づ疲ら
 して其後賜を施す苦き藥を以て我等に健康を樂むを得べからしむる主宰に光榮
 は歸す。

學習の時に當りて憂へざらん人はあらし試惑の毒を飲む時苦しき意はざる人も
 あらず此等なくんば堅固なる體格を受る能はざるべしさりながら試惑を忍耐す
 るは我等の力にあるに非ずけだし神聖なる火を以て固めずんば如何して土器よ
 り水の漏るゝを止めんやもし断えざる願と共に謙遜して求め忍耐して神に順ふ
 ならば我等が主ハリストスイイスによりすべてを受けん「アミン」。

第三十八 説教

人に起る所の念頭により如何なる階級にあるを察
 知すへし。

人は怠慢にある間は死期を畏れ神に接近する時は審判を迎へんを畏るしかれど

も殿門に全く入るときは、彼と此との畏れは愛にて吞まるゝなり。是れ何故なるか。けだし誰か肉體の知識と其生涯に止まる時は、死を懼るれども、靈的知識と善良なる生涯に居るときは、其心は如何なる時にも、來世審判の記憶に占有せられざるなし。何となれば、彼は其天性に循ひて正しく立ち、心靈上の秩序により行動し、其知識と其行為との爲に占有せられて、神に接近する爲に宜しく整備せらるゝによる。さりながら、人に神の奧義の感が起りて、來世の望の確立するにより、彼の眞理の知識に達する時は、動物の如く屠られんことを恐るゝ、肉體的の人も、神の審判を恐るゝ、靈智的の人も、愛にて吞まるゝなり。然して既に子となりし者は、愛にて飾らるれども、畏れざる者は、腰にて論ざるゝなり。我とわが父の家は、主に事へん。ナウイン二十四の十五。

神を愛するに得達したる者は、更に此世に留まらんことを最早願はざるべし。何となれば、愛は畏を滅せばなり。至愛者よ、予は愚に陥りしにより、秘密を守りて黙する能はず。兄弟を益せんが爲に無智となりぬ。何となれば、眞實なる愛は此の如きものにして、此愛は其愛する所の者の爲に、或事を窃に秘する能はざればなり。予が此事を書する時は、予の指は紙に隨ふの間も、あらざることをたゞ一回のみにあらずして、

予の心に突進し、予をして感覺を黙せしめたる愉快の爲に、予は忍耐を守る能はざりき。さりながら、常に神の事を思ひ、すべて世に屬するものを、禁じ、獨り神と共に止まりて、其認識の談を爲す者は、福なり。若し彼に忍耐の足るあるも、結果を見るを長くは猶豫せざらん。

神の爲の喜は、此世の生命の喜より強くして、此喜を得たる者は、たゞ苦難を見ざるのみならず、此生命をさへ顧みざるなり。もし實に此喜を有するならば、彼處に他の感覺は起らざるべし。愛は生命より甘くして、愛の由りて生ずる神に於るの通曉は、蜜よりも美なり。愛は其愛する所の者の爲に、苦しき死を受くるも、哀まず。愛は認識の所産にして、認識は心靈健全の所産なり。而して心靈の健全は、長く續く忍耐より生じたる力なり。

問 認識とは何ぞや。

答 不死なる生命の感觸なり。

問 不死なる生命とは何ぞや。

答 神に於るの感觸なり。けだし愛は通曉より生じて、神に依る認識は、悉くの願望の王なり。而して之を受くる心には、地上何等の甘美も、聲ならざるなし。けだし神の

認識の如くなる甘美は一もあらざればなり。
主よ我が心に永遠の生命を満たしめ給へ。
永遠の生命は神に於る慰藉なり而して神に於る慰藉を得たる者は此世の慰藉を
費視す。

問 神より聰慧を受けたるを人は何により確知するか。

答 人に其の秘密に於ても又感覺に於ても謙遜なる品性を教ふる聰慧其ものに
より確知せん而して謙遜の如何に受けらるゝは人に其智に於てあらはるゝなり。

問 謙遜に到達したるを人は何により確知するか。

答 世と交際し或は言論により世に媚るを以て己の爲に醜なりとするにより確
知すべし而して此世の榮譽は彼の眼中に嫌はしかるべし。

問 慾とは何ぞや。

答 身體の最欠くべからざる要求を満足せしめんとして此世の事物の爲に起る
所の打撃なり此打撃は此世の存在する間は熄まざらんさりながら神聖なる恩寵
を賜はりて更に高上なるものを味ひ且之を感じたる人は此打撃を心に入らしめ
ざるなり何となれば彼には他の極めて美なる願望の之に代り主となるありて此

打撃も又之によりて生ずる所のものも彼の心に近づかずして此等は無動作にし
て存するに由る是れ慾なる打撃の最早有らざる爲には非ずして其心に何等の動
亂もなく其意識は或る他の物を樂み之を以て飽足するに由るなり。
靈界の感觸と來世の直覺とを充分に受けたる心は慾の記憶に對して自覺するこ
と恰も高價なる食物に飽ける人の之と同じからざる他の食物を供へられたるに
對する如くなるべし之に其注意を全く向けず又は之を願はざるのみならず殊に
之を輕んじ之を嫌はんこれ其食物の穢はしく且は嫌はしき爲には非ずして人が
第一上等の食に飽かしめられ之を以て養はるゝこと彼の父の富を豫め消費し自
己の分前を既に蕩盡して其後豆莢を願ひ始めたる者の如くなるにはあらざるに
よる。それ實を委託せられし者は睡らざるべし。
もし謙遜の法と思慮ある行爲とを認識により守りて其結果は生命ならば格闘と
慾なる打撃とは全く心に近づかずらんしかれども此打撃の心に入るを妨ぐるは
格闘の結果には非ずして自覺と認識とが大に飽き足り之を以て靈魂を満たさる
ゝと心中に起る所の神妙なる直覺を願ふとに因るこれぞ此打撃の心に近づくと
妨ぐるものなるこれ予が既に言ひし如く真理の認識と靈魂の光を保護する思慮

の守りと其行爲により退去したる爲には非ずして上述の理由により智が格闘を爲さざるによるなりけだし貧者の食物は富者の爲には穢はしかるべく病人の食物の健康者に於るも亦之と同様なるべくして富と健康とは謹慎と配慮によりて成るなり人の生存する間は謹慎と配慮と不眠と必要を有す其資を護せん爲なりさりながらもし之が爲に定められたる界限を撤するならば病者となるべく其資は糶み去られん當然に働くを要する時はたゞ結果を見る迄にはあらずして死する迄なるべしけだし成熟の果も白雨の爲に忽ち害を被むること度々あればなり浮世の事に立入り談話に耽る者が之により健康を守らるゝことは未だ保證する能はざるなり。

祈禱する時は左の祈願を發すべし主よ此世と交る爲には實に死者とならんことを我に與へ給へと而して汝はあらゆる願求を此中に籠めたるを知りこれを身に實行せんことを努むべしけだし祈禱に伴ふに實行を以てするときは實に汝はハリストスの自由に立たん然れども世の爲に己を殺すはたゞ人が世にある所のものご交通談話するより遠ざかるのみにあるには非ずして心中の談話に於ても世の幸福を願はざるにあり。

もし善良なる沈思と黙想に己を習はすときは慾と會するや直ちに之を耻ぢん自から實験を以て試みたる者等は之を知るさりながら慾は罪なるに因るも之に近づくとを耻ぢん神を愛するにより或事を遂行せんと欲する時は死を以て其願の界限と爲すべしかくの如くならば各種の慾と闘ふに於て致命の階段に上るを實際に賜はるべく終に至る迄忍耐して弱らずんば此の限内に於て汝と相會する所のものより何等の害も受けざらん薄弱なる理性の思想は忍耐の力を弱むれども堅固なる智は其思想に隨ふ者に天性の有せざる力と與ふるなり。

主よ汝に於る生命の爲に自己の生命を惡むことを我に與へ給へ。

此世の生涯は表中に書せる文字の中よりたゞ或る文字を引出す者に似たるあり、誰か欲するあり又は願ふあらば之を増し或は之を減じて文字を變更するを得ん之に反して未來の生命は王印を押したる清き巻軸に寫取れる文書の如し之を増補すること又は減削することも決して許されざるなり故に我等は變化の中に在る間に自から己に注意すべく自己の手を以て記せる自己の生命の文書に權を有する間に善良なる生涯を以て之が増補を爲すに盡力すべし之によりて以前の生涯の疵を消滅せんけだし我等の此世に居る間は神は善なる者にも惡なる者に

是印を押さす、以て我等が生國に事を仕終へて他の方面に向ひ去るの時に至らん
 聖エフレムの言ひし如し、曰く我等が靈魂は艦装する大艦に似たるあり、之に向つ
 て逆風の起るは何の時なるを知らず、又軍隊に似たるあり、戦の喇叭の吹散するは
 何の時なるを知らず、かくの如く考ふるは我等に當然なり、といへり、其意謂へらく、
 再歸の望なきに非ざる場合に於て小なるものを得んが爲にさへかくの如くなら
 ば彼の畏るべき日に先だち、此の橋の前に於て此の新世界の門の前に於て我等が
 豫備し且具装するは如何に肝要なるか、我等が生命の代保者なるハリストスは此
 の期望を確として表示するの準備を我等に賜ふべし、彼に光榮と叩拜と感謝は世
 々に歸すアミン。

第三十九 説教

靈に屬する人々は身體の肥滿に準じ、他の靈界に屬
 するものを知識により幾許看破すべきか、如何して
 智は其肥滿より上に高めらるべきか、之より自由な

るを得ざるは何故なるか、智は何時如何なる方法に
 より、祈禱の時、妄想なくして止まるを得べきか。

我等が前に門を開き給へる主の榮光は頌讚せらる願はくは彼に向ふ願望の外、他
 の願求は我等にあらざらん、げだし此の場合に我等は一切を棄て、靈魂は彼獨を追
 ふて突進す、ゆゑに靈魂の爲に主を直覺するを阻礙せんとする慮はあらず、至愛者
 よ、智は此の有形物の爲に慮るを棄て、肉體の爲に慮ると、此慮の爲に思念することよ
 り、高まるに準じ、未來の望の爲に費心する程は益々精微になりて、祈禱に於て照
 せられん、而して肉體が有形的鍵鎖より免れて自由を得るに隨ひ、智も自由なるを
 得ん、而して智は其慮の鍵鎖より自由を得るに隨ひ、照明せられ、照明せらるゝに隨
 ひいよ、精微になりて、粗大なる有様を有する此世の概念より高うせられん、其
 時智は神を神の如く直覺するを學ぶべくして、我等が觀察する如くなるには、非
 べし、もし人は先づ默示を受けるに堪ふるものとならずんば、之を觀察する能はざる
 べく、淨潔に達せずんば、其の概念は神秘なるものを觀察する程、照明せらるゝを得
 る能はざるべし、而してすべて有形造物に於て見る所の有形なるものより免れて、

自由を得るに至る迄は有形なるものに對する概念よりも自由を得ざるべくして、暗まされたる思念より潔めらるゝ者とはならざるべし。思念の暗黒と惑亂の有る處は、怨の有る處なり。もし人は我等が言ひし如く此怨と其原因とより免れて自由を得ずんば、智は神秘なるものを洞察せざるべし。故に主は先づ第一に無慾になるべきこと、世の擾亂より遠ざかりて衆人に一般なる配慮より脱すべきことを命ぜり言へらく、凡て至人間とすべし。己れに屬するものこそを辭せず、又己をも捨てざる者は我が門徒となるを得ず。ルカ十四の三十三。

智を凡てのものより害を受けざらしめん爲視ると、聴くと物體の爲に慮ると、其滅却と其の増殖とより且は人よりも害を受けずして神に對する獨一の希望と之を結合せしめん爲に主は他の百般の慮を我等より遠ざけしめたるは我等之によりて獨一の神と交通するを願ひ始めん爲なり。さりながら祈禱は更に練修に必要を有す。之を長く務むるによりて智を増さん爲なり。祈禱は我等の思を鐵鎖より脱する無慾の後練修に専らんを要求す。何となれば時の久しきと共に智は練修に習慣を得て、思念を反拒すべき所以を識り、他の泉より借る能はざるものを長き實験を以て學ぶによる。けだし凡て現在の生涯は其成長を之に先だつ生涯より借る

べく先だつものを要求するは後に來るものを得んが爲なり。祈禱に先だつものは、遁世的生涯にして、遁世的生涯は祈禱の爲に必要なり。然して祈禱其ものは神を愛するの愛を我等に得んが爲に必要なり。けだし我等が神を愛するの原因は祈禱に因り求め得らるべきによる。

至愛者よ我等はすべて奥密に行はるゝ交通とすべし。神の事に於る善良なる才智の慮と、すべて靈神上のこと、冥想とは祈禱の爲に立てられ祈禱の名を以て稱せらるゝことをも知らんを要す。例へば或は種々の誦經を言はんか、或は神を讚榮するの調なるか、或は主の爲に掛念するの哀みなるか、或は身の叩拜なるか、或は聖詠を唱ふことか、或はすべて其外眞實なる祈禱のすべての式の組織せらるゝものと、之よりして神を愛する愛の生ずるものと、此名の下に纏めて一所にせらるゝこととの如き是なり。けだし愛は祈禱より生じて祈禱は遁世的生涯に止まるより生ずるなり。ゆゑに神と相對して談話することを得んが爲に我等は遁世生涯に必要を有す。さりながら遁世生涯に先だつものは世を捨つるなり。けだし人は先づ世を捨てずして世に屬するすべてのものより閑を得ずんば、退隱する能はざるべし。かくの如くなれば世を捨つるに先だつものは更に忍耐にして、忍耐に先だつものは世

を厭ふなり而して世を厭ふに先だつものは畏と愛となり。けだし地獄の畏の心を驚かすことなく愛も幸福の願にみちびかすんば此世を厭ふ念慮は心に起らざるべし。然れども世を厭はずんば世の安息の外に在るに耐へ得ざるべくして心に忍耐の先だつあらずんば荒涼を充ち満て、誰も住する能はざる地を選択する能はざるべし。もし遁世生涯を自から選擇せずんば祈禱に専なる能はざらん。もし神と談話するなく祈禱と合せらるゝ此冥想と我等が述べたる祈禱の式の凡ての種類とに止らずんば愛を感ぜざらん。

終に神を愛するは神と對談するより生ずれども祈禱的冥想と教訓とは沈黙を以て得らるべく沈黙は無慾を以て得らるべく無慾は忍耐と貪心を憎むを以て得らるべくして貪心を憎むは地獄の畏と福樂の望とを以て得らるゝなり。貪心の結果と貪心は人に何を備ふるも貪心の爲に人は如何なる福樂にも入るを許されざることを知る者は貪心を憎まんか。かくの如く凡の行爲は其先んずるものと結合せられ其成長を之より借りて他の最高上なるものに移らん。然るにもし一者は自己より下からは彼の後に來る所のものも堅く立ちて顯然たるものとなる能はざるべし。何となればすべては破壊し且絶滅すればなり。是より以上は言に定限あり。故

算すべからず。

第四十 説教

叩拜及び其他の事

誇大ならずして集中したる長き祈禱の續くは之により汝は聖詠を歌ふを能むるにより無用の時を送ると謂ふなかれ。之に反して聖詠を歌ふを練習せんよりは祈禱に於て叩拜するを愛せよ。祈禱が汝に手を貸すときは之を以て神の奉事を補はん。而して其の奉事の時に當りて涙の賜を汝に與へらるゝならば之を樂むを以て祈禱に於て無用の時を送ると謂ふなかれ。何となれば涙の恩寵は祈禱の充滿なればなり。

汝の心の散する時は祈禱よりも讀經に従事せよ。さりながら既に言ひし如く何等の書も益あるにはあらず。動作よりも黙想を愛せよ。もし能するならば祈禱に立つよりも讀經を重んぜよ。けだし讀經は淨き祈禱の泉なればなり。何等の口實を以ても怠慢に従ふなかれ。然して心意の高超を自から制せよ。けだし聖詠を歌ふは行爲

の根本なり。さりながら身體の動作は、心意の高超と共、聖詠を歌ふよりは多く益ありと知るべし。之に反して、心意の衰みは身體の勞苦に超越す。怠慢の時に於ては、自から謹肅して、漸次に熱心を惹起すべし。何とならば熱心は心を醒覺して、心中の思を煖むればなり。怠慢の時に當り、刺激は肉慾に反對して、天性を助けん。けだし、心霊の冷淡を止むればなり。或は腹の苦しきにより、或は事の多端なるにより、常に怠慢の生ずるは、此の冷淡に源因す。

行爲に於るの齊整は、思想の有様に於る光なり。是れ知識に外ならざるなり。夜間に行はるゝ凡の祈禱は、日中のあらゆる動作よりも、汝の目に尊かるべし。腹を苦むるなかれ、汝の智の曇らすして、夜間に起る時思の高超の爲に、擾されざらん爲なり。汝の肢體の弱らすして、汝自ら婦人の如く、孱弱ならざらん爲なり。然のみならず、汝の靈魂の暗まされずして、汝の明悟の昏昧ならざらん爲、且其昏昧の故に、此等を一に集中して、聖詠を歌ふに、全く無力なるを來さざらん爲なり。又すべてに對する趣味は、汝に傷はれずして、聖詠を歌ふは、汝を樂ましめて、已まざらん爲なり。之と同時に、智は思の輕易なるを清明なるにより、聖詠の殊異多様なるを常に愉快に玩味せん爲なり。けだし、夜間の齊整が亂さるゝ時は、日中の行爲に於ても、智は擾され、暗中

を彷徨し、通常の如く、讀經を樂まざるべし。何となれば、智は祈禱に向ひ、或は何の業務に向ふも、思は暴風の如く、狂へばなり。苦行者に、日中與へらるゝ愉快は、夜間の行爲の光によりて、淨智に溢れん。凡て長く、續く默想を實踐により、試みざる人は、たとひ大なるも、賢明なるも、善く教訓するも、功德を多く有するも、苦行の幸福の大なるを、自から確知せんことは、期すべからざるなり。

戒愼せよ。汝の身體の餘り、薄弱にならざらん爲なり。其薄弱の爲に、怠慢の増々加はらざらん爲なり。其怠慢の舉動を、味ひて、汝の靈魂の冷にならざらん爲なり。己の行爲を秤ること、秤量に掛る如くするは、すべての人に肝要なり。飽く時は、小なる事にも自由を許すを、自から警めよ。需用を充たしたる時に、汝の坐するは、樽節なるべし。殊に睡眠の時は、樽節にして、清潔なるべく、たゞに思念のみならず、肢體にも、嚴に注目せよ。汝に善良なる變化の起る時は、自負より己を守るべし。此自負の幾微なるに關して、自己の無力と、自己の無智とを、祈禱に於て、主に懇懇に、打明すべし。汝は棄てられたる者とならざらん爲、或る耻づべき事に、試みられざらん爲なり。何となれば、驕傲は迷亂を伴ひ、自負は誘惑を伴へばなり。

自己の必要に應じて、操作に従事せよ。確言すれば、操作が汝の爲に、默想の鍵鎖とな

らん爲之に従事せよ。照管者に依頼するに無力なるなかれ、何となれば忠實なる者に於る照管者の攝理は奇異なればなり。けだし照管者は其照管に依頼して生存する者等の業を立てしむるに人の任せざる野に於てして、人手を假らざればなり。もし汝が靈魂の爲に慮りて奮闘する時に當り、主は汝の勞を待たずして有形上の物を恵むならば、殺人者たる魔鬼の狡計に依り、此の照管の源因はすべて疑なく、汝自己にありとの思を汝に生せしめん。然る時は汝に於る神の照管は此思と共に中止せらるべくして、之と同時に或は汝を慮る照管者の配慮の中止するにより、或は汝の體中に生ずる勞苦と疾病の再起するにより、最多の誘惑は汝に向つて突進し來らん。神が其慮を中止するは、たゞ此思の生じたる爲には非ずして、此思の爲に智の礙へうるゝによる。けだし此思と一時は同意するも、己れに由らざる感動の爲に神は人を罰せず、又鞫鞠かざるなり。若慾の突貫し來るや、之と同時に我等に悔心の現はるゝあらば、此の如き怠慢の爲に主は我等を嚴責せず、たゞ其心意が實に怠慢に陥り、之を見て感ずるなく、之を以て當然有益なるものと爲して、之を己の爲に危険なるものと思はざるが爲に嚴責するなり。

常に左の如く主に祈るべし、ハリストスよ、汝の眞理と眞理の充滿を我等の心に光

り始めしめ給へ、如何して汝の旨に従ひ、汝の路を行くべきを識らしめ給へ。

或は遠くより來るものよりする、或は先に汝に占據したるものよりする、或は問はず、或る惡なる思想を汝の中に撒かれて屢々汝の智に現はるゝときは、確に認むべし。彼は汝の爲に網を伏るを、汝は適時に自から覺醒せよ。肅謹せよ。之に反しもし思想は右方なる善良なるものゝ部分よりするならば、知るべし。神は汝に生命の或る状態を與へんと欲するを、故に此思想は例外に汝に起るなり。しかれどももし思想は曖昧にして、汝之に疑を容るゝも、彼は自己に屬するものなるか、或は儼兒なるか、助力者なるか、或は善良なる假面を装ふて、其裏面に隠るゝ奸計者なるか、分明に之を曉るあたはざるときは、之に對し懇切にして、最迅速なる祈禱と大なる覺醒とを以て、晝も夜も武装すべし。汝は彼を己より遠ざくるなかれ、又彼と同意も爲すなかれ。乃ち懇懇と熱切とを以て、之が爲に祈禱を行ひ、主を呼んで黙するなかれ。主は此思想の何れよりするを、汝にあらはさん。

第四十一 説教

沈黙の事

沈黙を殊に愛せよ、何となれば汝を結果に近づかしむればなり、されど舌は此事を言ひ顯すに無力なり、先づ沈黙に己を強ひん、其時は沈黙によりて眞の沈黙に至らしむべきものを我等の爲に生せん、沈黙によりて生ずるものを神は汝に感知せしめん、されど此生涯を始むるならば此より光は幾何汝に輝くべきか、予は之を言ふことも能はざるなり、兄弟よ奇異なるアルセニイの事を記するを視よ、諸父兄弟等彼を見んが爲に來り訪ひけるに、彼は默然として一言も發せず、彼等と共に坐し沈黙を以て彼等を去らしめたり、汝は之を見て、此すべてを彼は全く意のままに行ひ、最初より己を之に強ひしに非ずと思ふなかれ、此行爲に練習するにより、逐次或る愉快が生じ、強て身體を沈黙を守るにみちびかん、而して此生涯に於て我等に多くの涙は生じて、奇異なる直覺により、心は何故か別々に感せん、或時は辛うじて感ずれども、或時は驚くべく感せん、何となれば心は和げられて小兒の如くなればなり、

故に祈禱を始むるや直に涙は流るゝなり、其身體の忍耐により、此奇異なる習慣を己の心中内部に得たる人は大なり、一方には此生涯の悉くの行爲を置き、又一方には沈黙を置く時は秤量に於て沈黙の愈れるを見ん、人々には多くの教訓あり、然れどももし誰か沈黙を親しむならば、此等の教訓を守るの行爲は其者の爲に贅物となるべく、是より先の行爲も贅視せらるべくして、彼は自から此等の行爲より抽んずる者としてあらはるゝなり、何となれば完全に近づきしによる沈黙は默想に助くるなり、何ぞや我等は多人共住の院に居らば、何人にも遇はざらん、是は能はざるべくして、默想を大に愛すること、天使の如くなりしアルセニイさへも之を逃る能はざりき、けだし我等と共に居る諸父兄弟に遇はざらんことは、能はざるべくして、此遇ふことは期せずして之のあるべし、聖堂或は其他の所に行くは、人に免る能はざればなり、彼の福樂を受るに堪へたる人は、此すべてを知れり、即人間の住所の近くに居る間は、彼の爲に之を逃るゝ能はざるを知れり、而して其居る所の位置に依り、同所に居る人々又は修道士等に面接するを避くる能はざることを屢々之あるや、彼は其時恩寵によりて、此方法を教へられたり、即不斷の沈黙を教へられたり、きゆるにもし、或者等の爲に己むを得ず、戸を開く時あるや、彼等はたゞ其面會を自か

ら樂むのみにて言談も要事も彼等は無用視したりき。多くの神父は此面會により自己を保護するを得福者の面會は彼等の爲に教訓となるを利用して靈神上の富を増すを得たりき。然るに或神父は人々に行かんと欲する望の起るや己を石に繋ぎ或は繩にて縛り或は飢渴を以て己を疲らしたりき。けだし飢餓は感覺を鎮むるに多く助くれはなり。

兄弟よ、予は大にして奇異なる多くの神父等を見るに、彼等は行爲よりも感覺の齊整と身體の習慣とを多く慮れり、けだし思慮の齊整は是より生ずればなり。多くの事故は不意に人と遇會して其自由の界限を脱せしめんゆゑに人は豫め求めたる弱らざる習慣により、其感覺を保護せらるゝなくんば、長く自から己を省察せざるべくして、己が原始の平安なる状態を見ざるべければなり。

心の大なる進歩は自己の希望のことを思念するにあり、行爲の大なる進歩は一切の解脫にあり。死の記憶は外部の肢體の爲に善良なる連鎖となるべし。靈魂の香餌は心中に咲く希望によりて生ぜらるゝ喜にあり。知識の成長は不斷の實驗にありて、之により智は二様の變化の爲に内部に於て日々、に實驗に附せらるゝなり。けだし寂寥の爲に時として我等に煩悶の起るあらば、是れ或は神の照覽によりて遣

はさるゝならん。最優越なる希望の慰藉を有す。即我等が心中にある信仰の言を有するなり。捧神者の一人は善く言へり、信する者の爲に神を愛するは、其生命の亡ぶる時にも充分の慰めなりと。其意言へらく、未來の幸福の爲に現在の快樂と其安寧とを輕んずる者に患難は何の毀損をか被らしむべきと。

兄弟よ、予は汝に左の誠命を與へんとす。汝は世に對して憐憫の心を有するを自己に感ずるに至る迄は、矜恤の重擔を常に執るべしといふものはなり。我等が慈悲心は神の性と神の實體とに存する所の同形と其眞實なる状態とを我等自己の中に見るが爲に鏡となるべし。我等は光明なる意願を以て神に於ける生涯に進むが爲に、此等のものを以て照明せられん。残忍にして無慈悲なる心は決して淨潔ならざらん。憐み深き人は自己の靈魂の醫なり。何となれば、彼は慾の暗黒を内部より一掃すること、恰も烈風の如くなればなり。福音的生命の言に依るに、こは吾人が神に貸與する善良なる債なり。

臥榻に就く時は告げて言ふべし、曰く、臥榻よ、恐らくは汝は是夜に於て予が爲に楮とならん。暫時の眠に代へて永遠なる未來の眠の是夜に於て予に來る無きや否を知らずと。故に汝に足のある間に、練修を追逐して、最早脱し得べからざる鐵鎖の爲

に縛らるゝに先だつべし汝に手のある間に己を祈禱に釘して死の來るに先だつべし汝に目の有る間に涙をこれに満たして塵埃に暗まざるゝに先だつべし蕭薇は僅に之に向つて風の吹くあらば凋まんかくの如く汝の内部に於て汝の組織に入り來る元行の一に向つて風の吹くあらば汝は死せん人よ死は臨んで汝の前に在り汝之を其心に思ひ不斷自己に告げて言ふべし曰く視よ子が爲に來れる使者は最早戸の側にあり如何して子は坐すべきか子の移るは永遠にして復た歸るあらずと。

ハリストスと對談するを愛する者は、通世者となるを愛さん之に反して衆人と共に居るを愛する者は、此世の友なりもし悔改を愛するならば黙想をも愛すべし。けだし悔改は黙想以外に完全を遂ぐる能はざればなりもし誰か之に抗言するならば、彼と争ふなかれもし黙想即悔改の母を愛するならば黙想の爲に汝に傾注する身の小害も詰責も侮辱も欣然として之を愛すべし此預備なくんば亂されずして自由に黙想を守るあたはざるべし然れども如上のものを輕んずるならば神の旨に依り黙想に分を有するものとなりて神の意に適する丈黙想を守るを得ん黙想に固着するは不斷に死を待つなり此の慮なくして黙想に就く者は悉くの方法を

用ひて我等の堪忍忍耐するを要するものを擔ふ能はざるべし。思慮ある者よ己が靈魂の爲に幽靜なる居住と黙想と籠居とを撰擇するは常規の外に出づる行爲の爲に非ず又之を遂げんとにも非ざるを知るべし。けだし衆人と實際するは身の勉勵の爲に多く助くる所あるは人々の知る所なりされどもし此事が緊要なりしならば、或る神父等は人々と共に居り之と交るを棄てざりしなるべく然して或者は墓畔に生活せざりしなるべく又或者は幽靜の家に籠居するを自から撰擇せざりしならん然るに彼等は彼處に於て肉體を大に弱らし之を其課せられたる規則を遂行する能はざるに放棄してすべて出來得る丈の薄弱と身體の疲勞と共に彼等を捕ふる重き病を更に喜んで生涯忍耐し之が爲に彼等は己の足にて立つことも或は通常の祈禱を爲すことも或は其口にて讚榮することも能はざるのみならず聖詠或は其他身體にて行ふ所のものを遂行せざりしも彼等は悉くの規則に換へて一の身體の薄弱と黙想とを以て己の爲に充分となしたりきかくの如くして彼等は其生命の日をすべて自ら送りぬ而して此事の全く無益なるものゝ如く見ゆるに拘はらず彼等の中一人も其處を棄つるを願はざりしのみならず其規則を執行せざるが故に何の處にか外に行き或は聖堂に行きて他の聲

音と奉事とを以て己を樂ましむることを願はざりき。己の罪を感じ始めたる者は、人衆稠密の中に居を有し、祈禱を以て死者を復活せしむる者より高し。己が靈魂の爲に歎息して、一時間を送る者は、面會を以て全社會に益を與ふる者より高し。自から己を見るを賜はりし者は、天使を見るを賜はりし者より高し。けだし後者は身體の目を以て接すれども、前者は心靈の眼を以て見ればなり。獨居的哀泣を以てハリストムに従ふ者は、集會の中に在りて己を頌讚せらるる者より愈れり。何人も左の使徒の言を此間に提出するなかれ曰く「我はハリストムより絶たれんことをも亦或は願ふなり」と。ローマ九の三、パウルの力を受けし者は此を爲すをも命せられんしかれども、パウエルが世を益する爲に、パウエルに居る所の神を以て攝取せられたることは、彼の自から證せし如く、自己の意のまゝに之を爲したるにあらざりき。けだし彼れ言ふ「我が分の爲すべき所なればなり。若し福音を傳へずば我は禍なる哉」。コリント前九の十六、さればパウエルを選びしは、彼に悔改の方法を示さんが爲に非ずして、人間に福音を傳へしめんためなり。之が爲に彼は天に餘ある能力を受けたりき。

さりながら兄弟よ、我等の心に世が死する迄は、我等は黙想を愛せん。常に死の事を

記憶し、此を思ふて其心は神に近づき、世の虚しきを輕んせん。さらば世の快樂は我等が眼中に賤んせらるべく、黙想の不斷の寂寥を病體に於て喜んで忍耐せん。巖穴と地窟と「エウレノイ」の三十三に居りて、我等が主の光榮なる默示の天より來るを待つ者等と共に樂みを享けん爲なり。

彼と彼の父と彼の聖神とに光榮、尊敬、權柄及び威嚴は世々に歸す「アミン」。

第四十二 説教

是れイサクが愛する所の一人に與ふる書にして、彼は此中に「ア」黙想の奧義に關する教訓を著し、多くの者が此奧義を知らざるに依り、此の神妙なる練修を等閑にし、往々修道士の間に行はるる傳説により、庵中に留まることを述ぶ「カ」黙想のことに關する訓話の摘要

兄弟よ余は書すべきものに就ては之を書さるべからざる義務を餘儀なくせられしにより汝に與へし約の如く此書を以て汝の愛を試みんげだし予は汝が身を持するの嚴を以て自から準備し行て黙想を務めんとするを見ればなり故にすべて此の練修のことにつき思慮深き人々より聞きし所のものと其後予が近く實地に得たる經驗を以て彼等の諭言を予の智に如何に適用したるを簡短にあらはして汝の記憶に印せんごすた願ふ汝は自らも此書を注意細讀したる後汝に常なる勉勵を以て自己の助となさんことをけだし汝は予が此書中に收めたる言を通常讀む所のものと同視せず聰明なる通曉力を以て讀むに着手し此中に隠れたる大なる力によりて他の書を読む際にも之を受ること或る光の如くせんことを要す其時は汝の黙想を守るは何の謂なるか其練習は如何なるか如何なる奥義は此練習に隠るゝかを審知し或者等が公生涯に於る公道の價値を殺ぎて黙想を守り修道士の生涯の患難と苦行とを選取るの何の故なるかを審知せん兄弟よ短日月の間に不朽なる生命を得んを願はば深く慮りて黙想に就くべし其爲す所を深く研究すべくたゞ名のみによりて此途に就くなかれ乃ち之を推究すべく深思すべく奮闘すべし此生涯の如何に深くして且高きに達せんことを諸聖者と共

に勉勵すべしけだしすべて人間の業事は此を爲す始に其終を考へ之を成就すべき或る方法と其希望とを預め料るべしこれ心意を勵まして事業に基を置くなり而して此の預め料りたる目的は心意を事業の難きを任ずるに堅むべくして此目的を翹望するにより心は其業事に於て或る慰藉を自から借り來らんそれ或者は其事業の終に至る迄弱らず智力を緊張する如く黙想の尊敬すべき行爲も熱慮を経たる目的により奥義の港となるべし之によりて智は長くして且重き勞苦を悉く注意監察するなりたごへば船長の目は星に向ふが如く遊世に生活する者も其進行のすべての繼續の間に於て内心の看望は其目的に向ふ即眞珠を發見せざる間は黙想の海の恐るべき旅行をさなんと最初に決心したる其日より最早其行かんことを心に決したる目的に向ふべくして此目的の爲に觸るゝ能はざる黙想の海の深きに入るべしされば希望に満たされたる注意は其爲す所の業の難きと其進行中に遇會する危きとを輕減するなり之に反し其黙想の始に於て前途爲す所の業の爲に此目的を自から預め料らざる者は空氣と戦ふ者と同じく無分別に舉動するなりかくの如き者は生涯決して精神の煩悶を免れずして彼の爲に左の二者の一は必ず生せん或は彼は堪へ難き困難を持続する能はず之が爲に勝たれて

黙想を全く棄つるに至るべく、或は忍耐して黙想到に止まるも、彼の爲に庵は獄舎となりて、彼は其中に焼かれん、何となれば黙想の練修によりて生ずる慰安に依頼するを知らざればなり、故に此慰安を願ふも、中心より哀んで之を求めず、祈禱の時に泣く能はざるなり、憐憫に充ち満て、其子を愛する我等が神父等は、其書を以て我等が生命の要求に對する此のすべての爲に訓示を我等に遺しぬ。

神父等の一人は言へり、曰く、居る所の家より遠ざかるときは、我が智は戦闘準備より休するを得て極めて善なる練修に向ふ、是れ我が爲に黙想より生ずる利益なり、之と同じ他の神父も言へり、曰く、我が黙想到に於て奮闘するは、讀經と祈禱の時に句々予が爲に樂しからん爲なり、而して之に通曉して悦ばせるにより、予が舌の黙する時は、恰も夢中にあるもの、如く予の感覺と思想を壓縮する性狀を得來らん、而して之と同じ此黙想を續くるにより、予が心を記憶の動亂より鎮むる時は、予の心を樂ましむる爲に忽然として俄に生ずる内部の思念により、欣喜の波を斷えず、我に遺はざる、となり、而して此波が予の靈魂の船に近づく時は、靈魂を世の說話と肉身的生活とより脱して、神に存する所の眞實なる奇蹟と黙想到に埋没せしめん。

されど他の神父は此に對して次の如くいへり、曰く、黙想は新なる思念に於る口實

と其原因を截斷して、我に預告したるもの、記憶を其壁内に灰滅衰萎せしむるなり、而して意中に舊見が衰ふる時は、智は此等を矯正して其秩序に復せしめん。

又他の神父は言へり、爾の思念の差別によりて、汝の中に隠れたるもの、尺度を悟るべし、我が之を言ふは易らざる思念のことにして、偶然に起り一時に過去るものを言ふにあらず、身體を有する者にして善なる或は惡なる二の變化と別を告げずして、自家に歸り來らん者は、決してあらず、もし彼は勉勵者ならば、些細なるもの、變化より別れて、本性の助の下にあるべし、父は生る、者の父なればなり、されどもし彼は怠慢者ならば、大なるもの、變化より別れて、彼の我が性中に隠れたる恩寵の爵の助けの下にあらん。

或る神父は言へり、樂しき練修と夜間の斷えざる徹醒とを自から選ぶべし、是時すべての神父は舊人を脱して、心意の更新を賜はりぬ、此の時靈魂は彼の不死なる生命を感じて、其感應により、暗黒の衣を脱ぎて、聖神を己れに受けん。

又他の神父も言へり、曰く、誰か種々なる人物を見て、靈的練修と相合せざる種々様々なる聲を聴き、かくの如き者等と共に會談し、共に相交る時は、彼は智の爲に閑暇の時を得ずして、苟に己を省察することも、自から己の罪を記憶することも、己の思

を潔むることも、其目前に顯はるゝものに注意することも祈禱に於て奥密に談話すること、能はざるべし。

又言へり、此等の感覺を靈魂の權下に屬せしむることは、默想と人々に遠ざかることなくんば能はざるべし、何となれば聰明なる靈魂は、此等の感覺と實に連接結合するによるゆゑにもし人は神秘なる祈禱に於て、徹醒するあらずんば、其意思を圖らず誘ひ去られん。

又言へり曰く、徹醒は幾ばく樂みを興へ如何に愉快欣喜ならしめて、其覺醒と共に、する祈禱と讀經とを以て靈魂を如何に潔むるか、其生命が何の時にも此事の爲に占有せられて最嚴重なる苦行的生活に居る者は、殊に之を知らん故に人よ默想を愛する者よ、汝も此等の神父の言の命令的指示を己の前に置て、或る目標の如くし、其爲す所の進行を之と接近するに向はしむべし、しかれども汝の爲す所を目標と調和せしむるを殊に要するは何故なるか、之を確知せんことを思ふべし、けだし此なくんば真理の知識を得る能はざればなり、ゆゑに此事に於て其忍耐をあらはせんことを大に勉勵すべし。

沈黙は來世の奥義にして、言論は此世の器械なり、禁食者たる人は沈黙と不斷の禁

食を以て、其靈魂を神的本性に擬せんを試みるなり、人は其神聖なる練修により、神秘なるものを守るが爲に、己を分離する時は、此奥義に献げらるべくして、其勤めは神聖なる機密に満たさるべく、之に由りて見えざる力と萬物に主たる權の聖なるとに満たされん、而してもし、或者は神聖なる奥義に入るが爲に、一時己を分離するならば、此印を以て己を表せん、而して其中の、或者には中間の階級に在る者を新にするが爲に知るべからざる主の沈黙に隠るゝ奥義を顯はすことを委任せらるべし、何となればかくの如きの奥義に勤むることは、腹を満たして、不節制の爲に心を亂されたる人には、不適當なるによる。

さりながら、諸聖人も飢餓を愛すると沈黙なる心意とにより、肢體は無力になり、顔色は蒼白になりて、地上のあらゆる念慮を絶し、時の外は神と談話するを敢てせずして、奥義の秘密迄は昇せられざりき、けだし汝は長き時日の間、其庵に於て、勞苦と神秘なるものを守る行爲の中に居り、感覺を制して、何等の會見をも避くるにより、默想の方が汝を底ふ時は、先づ汝は故なくして、汝の靈魂を時々占領するの喜を迎ふべくして、其後汝の清潔の度に、隨ひ神の造物の堅きと、造成の美とを觀るが爲に、汝の目は開かれん、而して智が此の現象の奇跡を以て導かるゝ時は、晝も夜も神の

造成の光榮なる奇跡と一になるべし然らば是時より慈の感覺は其靈底に於て此現象の愉快の爲に奪ひ去らるべくして之に従ふ順序に於ては清潔より始まりて愈々高まり智は更に心中の默示の二の級に登らん。願くは神は我等にも之を恵み給はん「アミン」。

第四十三 說教

種々なる豫想の事及び各豫想の爲に必要なる者の事。

直覺する力を自から攝取する性質の靈的感覚は感じ易き光を自己に有する身體の目の瞳子に似たるあり思想の直覺は天然の狀態と連合する天然の知識にして、彼は天然の光とも名づけらるゝなり聖なる力は光と直覺との間に立てらるゝ思慮の太陽の賜なり自然は思慮する者の光により直観し得らるゝ中間なるものなり然は或る堅き實體の如し彼は光と直覺との中間に占據して萬物の殊異多様な

るを光により辨別するを碍ぐるなり清潔は即心中の空氣の透明ともいふべきものにして我等が内部の性は其中に高く飛揚すもし智は天然に不健康ならば知識は彼に於て無能なること身體の官能が何を以てか傷はるゝや視力を失ふが如しされど智は健康なれば彼に知識なくんば知識なくして智は靈界に屬するものを辨別せざることたとへば完全の組織を有する健康なる目も感じ易き視力に關して毎々弱きことあるが如しされど此のすべてに固有なるものは守らるれども思龍の之に近づかざるべきは此すべては辨別の作用に於て無能にして存すること、たとへば夜間太陽のあらざるにより目は其目的物を採取する能はざるが如し而してすべて目も視力も強壯にして自から完全なれども或る物を辨別意識し得られざるあるときは主の光に於て光を見ん「聖詠三十五の十」といへる言は是に於て驗すべしされどもし心中の太陽の恩寵が近づきて願望を喚起し獎勵して不眠ならしむるも智に清潔なくんば智は恰も現象の愉快を以て我等を樂ましむる太陽の光の爲に容易く起る濃密なる雲と暗黒なる物體により不透明になれる空氣に似たるあるなり。

けだし視力が辨別に於て不確實なるときは性も活動に於て薄弱なるべしすべて

を照さるる無き第二の太陽の愉快を感ずるを靈魂の爲に碍ぐるものは靈魂が衣被する身體に屬するものにして彼は自から眞理の煌々光輝を掩ふて我等に到達せざらしむるなり。さりながら我が言ふ所の此すべてのものは之を査識せんこと必用なり。何となれば此のすべてのものを總合して缺くる所なく、問然する所なく一人に於て之を發見することは難くして、一の或る靈的知識に於る完全に選ずることは、多くの者之を能くせざるによる。此の缺點は左の理由によりて生ず。即靈智の缺乏にもより、意志の不順序にもより、師と誘導者を有せざるにもより、恩寵を遮るにもより、録して言ふあり、吝嗇なる人の爲に富と大なるものを領するは善からずと、シラフ十四の三又境遇の爲位置の爲及ひ品性の爲に妨げらるるもによるなり。

眞理は靈的智覺の感によりてのみ人の自から味ふべき神に依るの感覺なり。愛は祈禱の結果なり。さればもし智は煩悶なくして祈禱に止まるならば、其直覺により、智力を飽く能はざる願望に昇すべくして、人は智力を以て默識心通するによりてのみ熱心と切愛とを以て祈禱せん。祈禱は肉體的生活の望に屬する概念を殺すなり。けれどし勉勵して祈禱する者は世の爲に死せし者と同様なるべくして、忍耐して

祈禱に止まるは、是れ即人は自から己を棄つるなり。心の克己により神の愛は終に得らるべし。

貞潔の穂は禁食の汗の種子より芽を出す如く、放蕩は飽食により生じ、不潔は過度に満腹するにより生ずるなり。腹の飢ゑて空しきときは耻づべき思念は如何しても靈魂に凭らざるべし。凡て嚙下す所の食物は之を以て液汁を増し、我等に於て天然の勢力となるべし。而して有機的肢體は其製造せられたる全身の膨脹力により充實して之により或る有形なるものを偶然に見るあり。或は心中に於て悶々思念と共に何か喚起せらるゝある時は、思念により何故か愉快なる感動の俄に起るありて、全身に潮溼せん。貞潔にして思念に玷なき者の智は、強固なりといへども、肢體に生じたる感觸により、其理性は直に擾亂せらるべくして、其居る所の位地より下ること、或る高處より落ちる如くならん。而して其思念の聖なるは動搖せらるべく、光明なる貞潔は肢體の焼くがために心中に入りたる慾の擾亂を以て汚さるゝなり。其時は彼の力は半は衰弱す。故に彼は其希望の第一の目的をさへ失念すべくして、戦に入るに先だち戦はずして捕虜となり、敵の努力を待たずして薄弱なる肉體の意に従ふものとならん。不斷に飽食せんと欲する強き嗜好は善良なる人の意

志を此のすべてに強て従はしむるなり。たゞは貞潔の漢に堅固に止まることいへども、過度の飽食は彼をして其心に容るゝを決して願はざる所のものに従はしむるなり。而して一の思念の死するや、空しくして耻づべき妄想を包含する思念の集合は直ちに彼を圍みて、此の淨潔なる彼の臥床をば以て淫所となし、觀場となさん、されば思念の酣醉に乘じ、此等と共に談話を爲して、女人の近づくを待たず、其聖なる肢體を汚す時は、腹を過度に飽かしめたるにより、肉體の海に起る所の波の勢力に自から投ずる智は、恰も海の暴風により、激動洶湧する如く、如何に動亂するか。貞潔よ、汝の美は赤地に偃臥するにより、汝の睡眠を奪ふ飢餓の苦みにより、食物を節する爲に、肋骨と腹との間が深溝の如くなれる肉體の苦難により、如何に清明になるか。すべて我等が内部に受る所の食物と凡ての安息とは、我等に於て穢はしき形像と醜陋なる幻像とを形作るなり。而して此等の形像は生れて外に出づべく、我等が智の神秘なる範圍に現然とあらはれ、我等を激して耻づべき行爲と竊に相交らしむるなり。之に反して腹の空虚は、我等が思想をも寂寥たる國と爲し、思念の爲に擾されずして、すべて動亂なる思念より沈黙するものとならしめん。しかれども過度の飽食の爲に、充滿したる腹は、是即幻像の國にして、其過度の飽食は人をして

庵中に獨居するに拘はらず、愚なる妄想の爲に四門を開かしむるなり。けだし言ふあり、過度の飽食は多くのものを渴望せしめんと。神聖なる恩寵と眞實なる無慾を賜はる時は、知るべし。こは醜陋なる思念の汝に生ぜざるがために、非ず或は肉體の思念の起らざるがために、非ず。是等の思念なくして日を送らんことは、誰にも能はざるなり。又汝の爲に思念の易く打勝たるゝが爲にも、非ず。けだし、意思是如何に高きを極むといへども、思念の爲に往々汚し亂さるゝなり。之に反して、意思の働よりも更に善なる思念の爲に、智は此等と戦つて之を滅さざる可らざる緊要に置かれざるに因る。されど、思念の一方に偏するあるや、早くも意志の外にある或る力を以て之を他の思念と引近せしむるにより、盜賊の如く奪はれん。けだし、意志は智の住所たる心の内部に於て習慣により、又は恩寵によりて、其發酵を止むるなり。苦行者の智は別にして、神品の位は又別なり。天の憐により、世の爲に死したる智は、たゞ或る事件に對してのみ、戰と苦行となしに、靜正なる思念を有せん。肉と血とに配合したる完全は、肉と血とより流れ出る思念を主宰すれども、人を生活せしむる思想が、元行的生活の爲に打たるゝを、未だ免れざる間は、此等の思念をも、又他の天

性に固有なる思念をもすべて無動作なる迄に至らしめざるべくして、其智の根本はすべて活動と傾向とに於て變化を四液より借らん、我等が神に世々光榮あるべし、アミン。

第四十四 説教

黙想を務むるは思慮ある者に肝要なる事

愛する所の者よ、恐くべし、汝の行の無益とならず、汝の日を徒らに過ぎずして、思慮ある者が黙想により希望する益を奪はれざらんと欲せば、汝は之に着手するに思慮を以てすべく、依頼する所あるべからず、汝多くの者と相似ざらんが爲なり、之に反して、汝の意中に目標を置て、其生命の行を之に向はしむべく、此事を以て汝より練達なる者且は實驗により練達なる者に質すべし、而して黙想の行のすべての路に於て實驗を顯すに至る迄は、此を爲すを罷むるなかれ、歩一步進む毎に、汝は路に由て行くか、或は之を離れ、真正の道路の外、或る小徑に由りて行くかを審問せよ、而して、一の顯然たる行爲により、默想的生涯が汝に於て確實に成就せらるゝと信

するなかれ、或物を得んを願ひ、己が實驗を以て之を捉へんと欲せば、歩一步進む毎に、汝は苟に其心中に記號と目標を置くべし、之によりて、父等の眞實と敵の誑惑とを確知するを得ん、然して途上に於て智慧附られざる間は、此の些少のものも、汝の助となるべし、黙想の時に當りて、汝の意思が右なる思念を以て自由に働くを得て、或る思念に對する權に於ても、強制をうくるなきを心中に認むる時は、知るべし、汝の黙想は正しきを。

又奉事を行ふや、種々の勤めの時に、出来る丈心意の高超に遠ざかり、汝の舌上に句の概に絶るゝあり、汝の自由の關係なくして、汝の靈魂に沈黙の楯を置かれんに、黙想に長く止まりし後、此事の生するあらば、知るべし、汝は其黙想に前進展開して、溫柔は汝に二倍し、始まりしを、けだし、單純なる黙想は、實に非難すべきものこそ、哲學者と思慮者等に於る、單純なる生涯は、他の肢體の協力より離されたる、單獨なる肢體と同視せらるべし。

又心中に起る各思念の爲各想起の爲及び、汝の黙想により生ずる直覺の時に於て、汝の目が涙に満たされ、強ひずして、汝の頬に涙の流るゝを、其心中に認むるあらば、

知るべし敵を破るが爲に要塞に坑を鑿つこの目前に成就しかゝれるを、又時として汝の意思は尋常の秩序の外預め考ふる所あるに非ずして汝の内部に深く沈潜し約一時間或は數時間此状態に在るを自から發見し其後汝の肢體の大に疲勞する如くなるを認め平安は汝の思念を支配して汝に於て同事を常に繰返すときは知るべし雲は汝の行堂を庇ひかゝりしを、しかれども默想に充分の時を送るや靈魂を種々に分割して之を占領する思念を心中に發見せんに靈魂は此等の思念に時々強て奪ひ去らるゝ如く其意思は何れの時にも既往に屬するものに持去られ或は無益なる穿鑿に屈託せんとするときは知るべし汝は徒に默想に勞し汝の靈魂は心意の高超の爲に時を費すを而して之が原因は當然に務むべきものに關し殊に儆醒と讀經とに關して起る所の外部或は内部の怠慢なり汝は速に其行爲を修整すべし、もし汝は是日に入り汝を攪亂する慾の爲に平安を得ざるときは怪むなかれ宇宙の内部は太陽の光線の遠ざかりし後も久しく溫暖なるべく又空中に漲る藥物の香氣と香油の煙は散じて消失するに先だち多時存するならば矧や慾は肉店に血を甃るに慣れたる犬の如く通常の如く之に食物を與へずんば先なる習慣の力の

挫けざる間は戸の側に在りて吠ん、

怠慢が汝の心に盜の如く入りて靈魂は暗中を彷徨し家は殆ど暗黒に満たさるゝや左の徴候は近づかん汝は信念の衰ふるを窃に自から感すべく外見上のことに卓越すれども汝の希望は減少すべく汝に近きものを失ふを忍ぶべく汝の靈魂は思念を以ても感覺を以ても接するすべての人とすべての物の對し且は至上者に對してさへ口と心に詰責を滿たしめん而して身體の害を畏れて之が爲に小膽は毎時毎刻汝を占領すべく時としては汝の靈魂も己の影に惹きて逃奔する程恐怖を惹起されん何となれば汝は不信を以て信を暗ましたればなり知るべしこゝに信といふは衆人に一般なる信認の根本を指すには非して思想の力を言ふ即智の光を以て心を固め良心の證明を以て神に對する大なる希望を靈中に喚起し靈魂自から己の爲に慮らすして其配慮をすべて安然として神に負はしむる所のものを言ふなり、されば汝が前進展開する時は左の明白なる徴候を近く其心に見るあらん即汝はすべてに希望を以て堅めらるべく祈禱を以て富まさるべく凡て人々と會見して人性の弱きを感じる毎に汝を益する所のものは汝の心に何時も衰へずしてかく

の如き機會は其都度汝を驕傲より保護せん。而して又一方には近者の如何なる缺點も汝の眼中に注意に値せざるものとなるべし。かくの如くして來世に留まらざるの希望を以て此體より出づるを渴望せん。凡て我等が爲に哀むべき事變の陽にも陰にも汝と遇會するものに關しては汝はすべての警戒を以て自負より遠ざかりしにより此のすべてのものゝ汝に近づくは當然にして且は審判に依るものと思ふさればすべての爲に告解と感謝とを献げん。これを謹慎警戒して黙想を守り行爲の嚴なるに達せんことを願ふ者の徵候なる。

然れども衰弱者は將に來らんとする墮落の幾微なる徵候には必要を有せざるべし。何となれば彼等は神秘なる道德より遠ざかれはなり。此等の徵候の一が汝の心に徹底し始まるならば汝は何れの方面に傾き始めつゝあるかを此時に察せよ。けだし汝は何の黨與なるを直に覺知せん神は我等に眞の認識を與へ給はん。アミン。

第四十五 説教

精細なる思慮の階級

愛する所の者よ汝は常に自から己に注意する者となれ。而して汝に生ずる憂愁と汝の居る所の寂寞と汝の智の幾微なると共に汝の知識の粗大なると汝の默想の愈々長く續くと共に多くの療法を其行爲の順序により視察せよ。即内部の人を康健にするが爲に眞實の醫を以て遣はさるゝ試惑は或時には魔鬼を以てし或時には疾病と身體の勞を以てし或時には汝の心の臆病なる念頭と後來に起るべきものを思出す恐ろしき想起とを以てすれども又或時には心中の温情と極めて愉快なる涙と心神の喜び及び其外すべて恩寵の連接と約束とを以てするものを視察せよ。此のすべてにより汝の傷は愈えかゝり其瘡口は塞がりしや否。即慾は衰へ始めたるや否。汝は全く認めん。目標を置き断えず己を深省して左の事項を檢せよ。即汝の認むる所に依れば如何なる慾は汝の前に衰へたるか如何なるものは消失し汝より全く離れて如何なるものは沈黙し始めたるかされどもこは汝の靈の

康健の爲にして汝を恐れしむるものゝ遠ざかりし爲には非るか汝は智を以て彼等に克つを學びたれど彼等の爲に縁由となるべきものを奪ひしには非ざるか此等のことを檢せよ之と同く汝の疵の腐敗中に活肉の生じかゝりたる即心の平安の生じかゝれるを確に見るや否此事にも注意せよ如何なる慾は漸々に烈しく逼り來りて幾ばくの時間を経るか此等は肉體に屬する慾なるか或は心靈に屬するものなるか或は複雑混合的のものなるか而して彼等は無力なるものゝ如く記憶の中に暗に惹起さるゝか或は力を以て靈魂に反抗するか且は權ある者の如くなるか或は盜の如くなるか感覺を管領するの王たる智力は此等のものに注意を如何に向くるか彼等が力を張りて戦ひ始むるや之と格闘するか己の強きを以て彼等を無力ならしむるか或は彼等を一顧するだもせずして彼等を空きに歸せしむるか彼等の中如何なるものは格闘の後に消滅して如何なるものは新に顯出するか慾の活動するは或る方法を以てするもあるべく或は方法なしに感覺を以てするもあるべく又熱心なる活動と思念となしに記憶を以てして刺激を起さるるもあるべし此のすべてに依り靈魂の如何なる程度にあることをも亦確知するを得るなり。

前者は齊整に至らざりき何となれば靈魂は彼等に對して其力を顯はすとはいへども苦行は尙其前に在ればなりしかれども後者は使用の如何に關係す聖書に言ふ如し曰く「タワイド其家に住みけるに神は其四邊の敵を滅して彼を安んせしめたり」とサムエル後七の二知るべしこは一の慾念に關するに非ずして天然の諸慾と欲望及び刺激にも又好名の慾にも關係す即人々想像し之を心に浮ばしめて肉慾と願望とを喚起するものにも關係すべく之と同く貪慾にも關係す即靈魂が物に之と相交るやたとひ之と同意して實際に攝受することばせざれども其形像を心中に畫き之によりて富を聚むる貪心を養ひ之により靈魂に此事を思念せしめて其他の物と共に此物をも併有せんとの願を生せしむるものにも關係するなり。慾は悉く進撃的に戦ふには非ずけだし靈魂に憂愁をのみあらはす慾あり怠慢と煩悶と哀愁とは進撃的に敢て襲ひ來るに非ずしてたゞ心上に重きを負はすのみなりしかれども心靈の剛毅は進撃的に戦ふ所の慾に克つに於て試みらるゝなり。ゆゑに此のすべてに關する精細なる報道を有して目標を知らんことは人に肝要なり其靈魂が歩一步進む毎に何處に達するか其足は何の地を踏むかハチアンの地なるか或はイオルダンの濱なるかを自覺せん爲なり。

さりながら左の事にも注意を向けよ。知識は眞實なる光に依りて之を識別するが爲に充分なるか。或は曖昧に之を識別するか。或は此のごとき才能を全く奪はれしか。思念の潔くなり始めしを確實に發見するか。心意の高超は祈禱の時に過ぎ去るか。祈禱に近づく時如何なる慾は心を亂すか。默想の力が習慣以外常に心中に生ずる溫柔と平安とを以て靈魂を庇ひしを自己に感知するか。感覺には説明することをも許されざる無形體なる者に對する概念の爲に、智は意志の關係なくして斷えず奪ひ去らるゝか。何物とも比する能はざる愉快を以て舌を沈黙せしむる歡喜は俄に汝に燃ゆるか。或る満足は斷えず心中より溢れ出で、智を全く引き去るか。時として或る樂みと或る喜びが知らず識らず全身に入るも、此記憶に由りすべて地上にあるものを塵芥視し、之を空うするに至る迄は肉體の舌は此を言顯はす能はざることあり。けだし心中より流れ出づる此の第一の樂みは、或は祈禱の時に起り、或は讀經の時に起り、或は又思念の不斷の練修と其繼續の爲に起りて、心意を暖むるなりしかれども、此の樂みは此のすべてを待たずして屢々起り、又は休暇の時にも幾回か起ることあるべくして、之と同く夜間には睡眠と覺醒との間にありて、眠るが如くして眠らず覺むるが如くして覺めざる時にも屢々起ることあるなり。

さりながら人の全身を鼓動する此樂みの人に起る時は人は其際思ふなるべし。天國は他にあらずして即是なりと。之と同く察すべし。靈魂は心を占領する希望の力を以て物體の記憶を滅すべき力を求め得て言ふべからざる無疑固信により内部の感情を堅むるや否やを而して心は地に屬するものゝ爲に捕へらるゝ虞あらずして我等が救世主の爲に爲す所の已まざる傳達と間斷なき心の練修とを以て覺醒せらるゝや否之をも察すべし。此事を聴くときは汝は練習と傳達とに召さるゝの差異に關する認識を得よ。連續として斷えざる默想は恒久にして易らざる練修を以て速に此事を味ひ得る力を心に得しむべし。けだし受る者の怠慢に依り、之を得たる後更に失ふて永く復た得られざることあるべし。されば誰か良心の證明に據り頼たるパウルの言ひしと同しく、此事を敢て言ひ得るか。曰く、蓋我れ爲く信す、死も生も現在も未來も……我をハリストスの愛より離す能はず。ローマ三十八、三十五、言意は身體に屬する患難も、心靈に屬する悲哀も、饑餓も、窘逐も、裸程も、孤獨も、閉戸も、災害も、劊も、サクナの使と、力と、其惡なる謀計も、人の攻撃によりて滅さるゝ名譽も、讒謗も、詰責も、故なくして徒に類を批たるゝことも、我を離すこと能はずと敢て言ひ得るか。

しかれども兄弟よもし汝は此の凡てのものが或は除あり或は足らざるあるを其
 必に發見し始めすんば汝の勞苦と憂愁とすべて汝の黙想は無益に己を疲らすな
 りもし奇跡は汝の手によりて行はれ死者を復活せしむるとも此とは比較にもな
 らざれば汝は直ちに其心靈を勵まし衆人を救ふ者に泣て黙願せよ願くは我が心
 の門の闕を取除き内部の天より怒の暴風晦冥を一掃して白日の光線を見るを賜
 はらんことを永く暗黒に居る死者と相似ざらんが爲なり。
 不斷の儆醒と共にする誦經と之に次で屢々行ふ叩拜とは勉勵者に此等の幸福を
 齎らすを遅延せざるなり之を得たる者は即此の方法を以て得たりき然るに之を
 新に得んと願ふ者は黙想を務むると共に我が己に述べたる所の練修に必要あり
 されど是に先だち自己の靈魂の外は何事の爲にも又一人の爲にも意思を束縛せ
 られずして道德の内部の練修に専ならんを要す然れども之が實行に關しては其
 他の事に就ても我等を保證する一定の感の特に近く自己に起る所のものを研究
 せんを要するなり、
 黙想を務め神の仁慈を實驗上に試みたる者は復た勸誘を要するあらず反つて彼
 の靈魂は眞理に動搖する者の如く不信の爲に苦むことは毫もあらざるべし何と

なれば其智の證明は彼の爲に實驗を以て確められざる言の無數の多きよりも己
 を保證するに充分なればなり、
 我等が神に光榮と美麗は世々に歸すアミン、

第四十六 説教

眞實なる知識の事、試惑の事、及び陋劣薄弱にして學
 ばざる人のみならず、一時無慾を賜はり、思想の有様
 に於ては完全に達して、死者の如くなれると共に、一
 分は淨潔に近づきし者等も、慾の上高く立ちし者
 等も、此世にある間は、其生命を慾なる肉體と結合す
 るにより、神意により、格闘の中に居りて肉體の故に
 慾より擾亂を受く故に、驕傲に陥りて滅ぶるが爲、憐
 みによりて彼等に試惑を遣はさるゝを確知するの
 緊要なる事。

或者等は日々法を犯し悔改を以て其靈魂を醫さんに恩寵は彼等を受ることたゞ一再のみならず何となれば凡て聰明なる性には限りなく變化の起るありて各人の爲に變化は時々生ずればなり思慮ある者は此を曉るの機會を多く發見するのみならず彼が日々自から試みる實驗も特に此事に於て彼の智を増さんもし彼は肅醒し其智を以て自己に注意するならば意思は其溫柔と其謙遜とに日々如何なる變化を受くると或る原因の避けられざるあるや俄に平安なる状態より擾亂に至ると人は大なる言ふべからざる危険に居る所以とを確知するを得ん。

聖なるマカリイが大なる先見と注意とにより此事を明白にあらはして兄弟に記憶せしめ教訓を爲したるは反對なるものに變じたる時失望に陥らざらんが爲なり何となれば淨潔の階段に立つ者にも自己に怠慢或は弛緩のあらざると同時に墮落は常に不意に起るあること猶空氣に寒冷の起る如くなるべく反つて彼等が己の秩序を守る時にさへも彼等自己の意志に反對なる墮落の彼等に生ずるあるによる而して確實なる實驗を以て之を試みたる福なるマルクも此事を證明し絶妙なる順序を以て之を其書に著したるは人をして聖なるマカリイが此を其書に述べたるは偶然にして眞實の經驗によりしには非る如く思はしめざらんが爲に

してかくの如き二の證明者により智は自から必要の時に慰藉を全く確實に受けん爲なり此により彼は如何に言ふか各人に變化あるは空氣に變化あるが如しといふ此の各人にといへる言を理會せよ何となれば性は一なるによる而して彼が之を言ひしは劣弱者と悪者との爲にて完全なる者に至ては變化を免るべくエウヒト等が證する如く慾念なくして一の階段に變らず立つを得んと汝の思ふなからんが爲なりゆゑに彼は各人にと言ひき。

福なる者よ是れ何ぞや汝は言ふ寒冷ありて其後幾くもなくして暑熱あり同く亦急霰ありて少しく過ぎて晴天あり我等が練習に於ても此の如く或は戦あり或は恩寵に依るの助あり或時には靈魂は動搖の中にありて激浪の之に向つて起るあれども再び變化は生せん何となれば恩寵降りて神に依る喜びと平安と眞潔にして安和なる思念とを人の心に満たしむるによるけだし彼が此處に是の眞潔の思念を指示すは是より先に禽獸の如く不潔なる思念のありしを了知せしむるものにして彼は訓諭を與へて言へりもし此の眞潔にして謙遜なる思念の後に劇變の生ずるあるも失望悲嘆するなかれ又恩寵の慰藉の時に同く誇るなかれ反て喜びの時には愛を待つべしと然して病の發作するある時は我等に悲まざらんこと

を勸諭するは是れ我等は之を引誘せざるを要するのみならず我等に天然固有なるもの、如く喜んで之を受くべきを示すなり我等は左の人の如く失望に陥らざらん即苦行の爲に何か期する所ある如く完全にして變らざる慰藉をさへ期すると共に苦勞をも悲哀をも或る反對者の行動の生ずることをも許さずして我等の主神も此世に於て此性に之を興ふるを適當のこととは思はざるべしと言ふ人の如くならざらん。

マカリイが此教訓を我等に興ふるは或者等が行爲を廢して全く閑散なる者となるを免れん爲なり又此事を思ふと共に失望により衰弱して其進行に不活動なる者となり了らざらん爲なり彼れ言へらく聖者はすべて此行爲を固く守りしを知るべし我等此世に居る間に此等の勞苦の後餘有る慰藉の我等に尙に生ずるあるはけだし試惑に對する戦と苦行とを以て我等が神に對する愛の實驗を毎日毎時我等より要求せらるるものにして是れ即我等が苦行に於て衰まざるべく憂へざるべきを示すなりかくの如くなれば我等の行路は幸に進歩せん之に反して此事を逃れ或は之に遠ざからんと欲する者は狼の獲物となるべし此の如き簡短の言を以て此意見を固め此意見の極めて合理なるを證して讀者の心中に疑團を全

く消滅したる此聖者に驚嘆するは實に當然なり彼又言へらく此より遠ざかりて狼の獲物となる者は路に由らずして行かんと欲する者にして彼は其心に之を強て求めんと欲するも父等が布設せしに非ざる己の小徑に由り行かんと欲するなりと彼は又喜びの時に哀みを待つべきことをも教ふ恩寵の働により俄に我等に大なる思想起りて聖なるマルクの言ひし如く最高上なる性の心中の直覺に愕然として驚き諸天使も我等に近づきて直覺を我等に満たしむる時はすべて反對なる者は遠ざかるべくしてすべて人が此の如き状態にある時に於ては平和と言ふべからざる安靜とは永く續きて絶えざらんさりながら恩寵は汝を庇ひ汝を保護する聖なる天使等は汝に近接し且此近接によりすべての誘惑者が退去する時も汝は自負するなかれ動搖せざる港に達し變らざる空氣を得て此の逆風の中より全く出でたれば最早復た敵あるなく悪なる偶會もあるなしと心中に思ふ勿れ何となれば多くの者は此を妄想して危きに陥りしこと福なるニルの言ひし如くなればなり或は又汝は衆人より高ければかくの如き状態にあるは適當なれども他の人々には其品行の缺乏の故に毫も適當にあらずと思ふなかれ或は彼等は充分に知識を有せざるによりかくの如き賜を奪はるれ汝は成聖と靈的階段と變ら

ざる喜びの完全に達したるにより、此事に權利を有すと思ふなかれ、之に反して不潔なる思念と不適當なる状態とを更に善く自から省察せよ、即是より少しく以前汝の昏蒙に對して起る所の思の錯雜と無秩序の爲に動搖する時、汝の心中に固められたるものを省察すべし、又汝は如何なる速力を以て慾に傾き、心の昏迷により之と談話して、汝が受けたる神聖なる知識と才能と、其賜に耻ぢず驚かざりしことを思ふべし、而して知るべし、此のすべては我等各人を慮りて、其有益なるものを建設し給ふ神の照管が我等の謙遜の爲に之を我等に遣したるものなるを、之に反してもし其才能に自負するならば、汝を棄てん、されば汝は獨り思念の爲に誘はれて全く墮落せん。

終りに知るべし、汝の堅く立つは汝に屬するに非ず、又汝の道德の行によるにも非ずして、汝を其掌上に持する恩寵が之を成し、汝をして恐れざらしむるを、汝は喜歡の時に此事を己の意中に收納れよ、聖神の言ひし如く、思念の高ぶらざらん爲なり、而して放任の時には、自己の罪に陥りしことを想起して泣くべく涙を流して俯伏すべし、汝は此を以て救を得、之によりて謙遜を求めんが爲なり、然れども失望するなかれ、思を遁りて己の罪を垂恩により赦さるべきものと爲すべし。

謙遜は行爲なくしても多くの罪を赦さるべきものと爲す、之に反して謙遜なくんば行爲も無益となるのみならず、我等が爲に多くの悪事を備ふるに至らん、予が已に述べし如く、謙遜を以て汝の無法を赦さるべきものとならしめよ、鹽は凡の食物の爲なる如く、謙遜は凡の道德の爲なり、彼は多くの罪の勢力を挫くを得べし、もし彼を求め得るならば、我等を神の子と爲し、善行なくして神の前に顯はさん、けたじ謙遜なくんば、我等が悉くの行爲と凡の道德と凡の練修は徒然なるなり。

終りに神は意思の變化を望み給ふ、意思は我等を極て善き者とも爲し、又放蕩なる者ども爲す、我等を神の前に無能力なるものとして立たしめんには、意思一つにて充分なるべく、意思は我等に代りて言はん、汝は箇程薄弱にして傾き易き性を受けたれど、恩寵の助けにより、時として幾ばく高められ、如何なる才能を受けて、天性より一層上に居るを感謝すべく、又放任せらるゝ時は、何れ迄下りて、禽獸の如き心を得るを默然として神に告白すべし、己の性の不幸なるを如何なる速力を以て變化が汝に生ずることを記憶せよ、或る聖なる長老の言ひし如く、曰く、汝に驕傲の念の生じ、汝に告げて、自己の德行を想起せよ、といふ時は、答ていふべし、老人よ、自己の迷を見せよと知るべし、迷とは放任の時に當り、思念に如何なる試を受けて、恩寵が我等

を或は戦に引入れ或は我等の爲に有益なれば我等に助を現しつゝ各人の爲に建設する所のものを言ふなり。

視よ此の奇異なる長老は此義を如何に輕快に言顯はしたるか言へらく汝の生涯の高きを思ふ驕傲の念の汝に生ずるときは言ふべし老人よ自己の迷を一旦見せよと長老が此を言ひしは高き生命の人に言ひしものなること此によりて明白なり。けだし賞賛せらるべき生涯を以て高き階段に立つ者の外常人はかくの如き思念の爲に援さるゝことある能はざるなり此慾は既に徳行を成就したる後其練修を靈魂より奪はんが爲靈底に起るものなること明なりもし欲するならば彼の聖なるマカリイの一文書により諸聖人が如何なる階段に立つと諸聖人を試みんが爲に何を放任せらるゝことを學び知るべし此書は大要下の如し。

父マカリイは其最愛の諸子に書して戦と恩寵の助の時彼等に如何なる神の攝理のあるを明に教ふ何となれば諸聖者が此世に居る間徳行の爲に罪と奮戦することとを彼等に教ふるは神の睿智に適するものにして何れの時も其目を神に舉げ不斷神に注目するによりて神の聖なる愛の彼等に増加せんが爲なり彼等擾亂と傾離の恐れを免れて不斷神に向ふときは信と望と神の愛とに確立せん。

今予が實に此事を述るは人々と共に居り何の處にも出入往來して常に耻づべき不潔の行爲と思念とに従ふ者等に告るに非ず又默想の外に在て行に義を守るも感覺の爲に時々廢にせられ何の時にも墮落の危きに臨みて何となれば全く彼等の望に依るに非ずして彼等と偶會する緊要事は彼等を心ならざる位置に立つるによるたゞ其思念のみならず其感覺をも全く保護する能はざる者等に告るにも非ずして其身體と思念とに注意するを能くし擾亂と人々に交際することよりすべて遠ざかり一切を捨て且其生命をさへ捨て祈禱により其智を保護するの便宜を發見し默想的生涯を棄てずして恩寵の照看の變化を受け主の管轄の臂下に居り默想に向ふ精神を以て世の事物に遠ざかり恩寵の助けによりて密に聰明に進む所の者等に告るなり願くは此恩寵は我等をも此境に於て守らんアミン。

第四十七 説教

此の章の意義及び祈禱の事

簡短に顯はせる此章の意は左の如し我等は此の二十四時間の中晝も夜も悔改に

必要を有するを時々記憶せんを要することは是なり悔改といふ言の意味は例へば我等は物を眞實の性質により確知する如く悔改も既往の罪を赦されん爲悔悟の念に充ち満てる祈禱を以て神に近づく弱らざる請願と將來を守るが爲の悲哀とにあり故に我等の主も我等が薄弱の爲に其支柱を祈禱に於て示し給へり曰く徹醒せよ祈禱せよ誘惑に入らざらんが爲なり「マトフニイ二十六の四十一」祈禱せよ怠慢なるなかれ如何なる時にも徹醒し且感謝せよ「コロサイ四の二三」求めよ然らば得ん尋ねよ然らば遇はん門を叩けよ然らば汝等の爲に啓かれん蓋凡そ求むる者は得ん尋ねる者は遇ひ門を叩く者には啓かれん「マトフニイ七の七八」然して殊に其言を證定するが爲に夜半來りて餅を求めたる友の喩を以て我等を大なる勉勵に進ましめ給へり主は言へり誠に汝等に語く彼は友なるが故に起きて彼に與へざるも其切迫に依りて需むる如く彼に與へん「ルカ十一の八」故に汝等祈禱せよ怠慢なるなかれと呼勇氣の爲に得も言はれざる何等の奨勵なるや施與者が我等を勉勵して求めしむるは神聖なる賜を我等に與へんが爲なりそれ彼は我等の爲に慈悲なるものをば其自から知る如くすべて攝理し給ふならば彼の此言は我等を勇氣と希望とに勵ます爲に大なる力を満たさるゝなりけだし主は背離の出來得可き

ことを死する以前に我等より存はずして德行より邪惡に移るべき此變化は我等に甚だ近くして人と人の性は反對なるものを自己に受け易きを知るにより不斷祈禱に勉勵して奮闘すべきを命じ給へりもしも此世に保證の國のあるあらば人の此國に達するや其性は是時直に要求より上にあるべく其爲す所も畏懼より上にあるべく而して神は其照管を以て之を遂げしめて祈禱に奮闘すべきことは命じ給はざりしならんげだし來世に於ては或事の請願を以て神に祈禱を獻げざるべければなり此の自由の郷に在ては我等が性は反對を恐るゝ畏懼の下にありて變化と背離とを受けざるべし何となればすべてに完全すればなり此故に主の命じ給ひしはた祈禱と自己を守るが爲のみにあらずして我等の爲に常々起る所のものゝ幾微にして思議す可らざるが故に何れの時にも不意に屢々發見するものゝ状態は我等の知識を以て曉る能はざるによるなりけだし我等の意は甚だ堅固にして善に膠着すといへども主の照管は我等を誘惑の境に乗て且投する一匹のみにあらざることは福なるパウルの言ひし如し曰く默示の至大なるによりて我が高ぶらざらん爲に一の刺は我が肉體に與へられたり即サタナの使なり我を撃たん爲我が高ぶらざらん爲なり我三次主に之を我より離さんことを求めたり

然れども主は我に謂へり、我の恩寵は汝に足れり、蓋我の力は弱き中に行はる「ヨリ
ン」後十二の七―九

主よ、是れ既に汝の旨ならば、我等の幼稚なるも、汝に導かれて自から覺醒せんが爲
に、此のすべてのものを要求す、矧んや人も我と同じく汝の愛に酔はしめられ、酩酊の
中に在りて世には目を全く注がざるにより、引誘せられて善なる者に追隨するに
於てをや、たゞに是のみに非ず、汝は我に肉體の舌にて説明する能はざる、默示と直
覺とを與へ、靈神上の勸を見、且其聲を聞かして、聖徳を充ち満てる汝の直覺を賜
はるに於てをや、しかれども此すべてに拘はらず、我れハリストスによりて成全せ
られたる人は、自己を保護するが爲に不充分なり、何となれば予はハリストスの心
を得たるに拘はらず、幾微にして予の力を以て悟る能はざるものあるによる、故に
主よ、予が弱きと、患難と、牢獄と、械繫と、窮乏とに於て喜ぶは之が爲なり、これ性によ
るか、性の子によるか、或は其敵によるか、今はたゞ予の弱きを喜んで忍受す、耶瑟
に於て予の弱きを忍受す、神の方の我に宿らん爲なり、もし此すべての後汝の住所
が予の中に膨脹展開して、予も汝に近づきて守られん爲、試惑の杖に必要を有する
ならば、予は知る、我より多く汝に愛せらるゝ者はあらずして、隨て汝は我を衆人よ

り高うしたるを、且汝は奇異にして光榮なる力を、誠るを予の同勞者たる使徒の一
人にも予に與へし如くには與へ給はずして、汝は予を選器と名づけ給へり、行實九
の十五、何となれば汝の愛の法を予は誠實に守るによる、此のすべての爲、特に傳道
の業の大に進歩して、將來益々擴張するが爲にも有益なりしならば、汝は予に自由
を賜ふべかりしを、予は幾分か理會するなり、しかれども汝は予が此世に患難と憂
慮となくして居らざらんことを嘉みし給へり、けだし汝の福音を世に傳ふる事業
の大に増加するは、予が試惑により益を得て、予の靈魂が汝によりて健全に守らる
程、汝の爲に重要なるには非ざるに因る。

終に思慮ある者よ、もし此すべては試惑の大なる賜にして、人が稱揚せられて、パウ
ルと同じく神に入る程は、更に愈々畏懼と戒愼とに必要を有して、其遭遇する所の試
惑より益を別るならば、誰か此の奪ひし者等が充ち満てる保證の國に達して、「マ
クニ十一の十二、我等と偕ならずしては、全きを受けざる爲に」エウレイ十一の四十
聖なる天使等にも與へられざる堅固なる者となり得べきものを受け、すべて靈神
上にも肉體上にも反對する所のものを受けて、全く不變不易なる者とならんこと
を欲するか、試惑が彼に其思にも近づかさざらんことを欲するか、然して此世の法は

悉くの聖書に顯はされたる如く、其意左の如し、即もし毎日幾千の打撃を常に受るも畏避退怯するなかれ、塲裡に馳走するを止むるなかれ、何となれば我等は一の些細なる機會に勝利を奪ふて榮冠を受くべきによる。

此の世は競争にして競争の爲の道場なり。此の時は角逐の時なり。然れども角逐の國にも競争の時にも法は置かれざるなり。即王は其戰士の爲に競争を終ふる迄は界限を置かずしてすべての人は主宰たる王の庭にみちびかるべく、而して競争したる者は勝を奏するを許さざりし者も敗北したる者も共に彼處に於て審査せらるべし。けだし不銀鍊によりて何の用にも立たざる人は不斷に撃破せられ打勝たれて、何れの時にも無力にして存すれども、巨人の子の軍隊の手より其軍旗を假に奪ふときは其名は稱揚せらるべくして、彼は奮闘し勝つて著名になりし者等よりも更に讚美せられ、其友に愈りて榮冠と貴重なる賜を受る機會は多く之あるべし。故に一人も失望するなかれ、たゞ祈禱を等閑にせざるのみならず、主に助を求むるに怠らざらん。

我等は此世に於て肉體に置かるゝ間は、たとひ天の穹窿迄昇りたりども、行爲を勞苦となくして居り憂慮なくして存する能はざることを確く己の意中に置かん。是

れぞ我を免せ、即完全にして此より過ぐるものは愚にして考無きなり。

我等が神に光榮及び權柄及び美麗は世々にあるべし、「アミン」

第四十八 説教

道德の各種及び凡の道の完備

凡そ道の完備は悔改と淨潔と己を成全することにあり。悔改とは何ぞや、先非を棄て、之が爲に哀むなり。淨潔とは何ぞや、簡短に言へばすべて造を受けたる萬物を慈むの心なり。己を成全すとは何ぞや、謙遜の深きなり。即すべて見ゆるものと見えざるもの、見ゆるものとはすべて物體に屬するものを言ひ、見えざるものとは思想に屬するものをいふ。其ものゝ爲に慮ることを棄ることなり。

他日再び問はれけるは、悔改とは何ぞやと答て言へり、碎けて謙る心なりと。謙遜とは何ぞやと問はれければ答へて言へり、一切の爲に死者の如くなる性狀を甘んじて己れに受けて之れを倍するなり。慈む心とは何ぞやと問はれければ答て言へり、一切の造物の爲人々の爲、禽鳥の爲、獸類の爲、魔鬼の爲及び如何なる受造物の爲にも人の心の燃ゆるなり。彼等を想起するにより、又は之を看望するにより、人の目は

涙を流さん心を包容する大にして強き憐憫と大なる忍耐とにより人の心は和げられて受造物が受る所の如何なる害をも小なる哀みをも或は聞き或は見るに堪ふる能はざるべし故に無言なる者の爲にも真理の敵の爲にも之に害を爲す者の爲にも毎々涙を以て祈禱をさへげて彼等の守り且憐まれんことを願ひ又爬虫類の爲にも同じ大なる憐憫を以て祈り其憐憫は其心中に無量に喚起せられて神に似るに至らん

又祈禱とは何ぞやと問はれければ次の如く答へりすべて此處にあるものより自由を得て智を閉づるなり即心は未來に望む所のものを願望して其眼を全く之に向はしむるなりしかれども此より遠ざかる者は是れ其田に混合したる種子を種く者にして彼は牛と驢とを共に轆に繋ぐ者と同じかるべし復傳律令廿二の十又如何して人は謙遜を求むべきかと問はれければ下の如く答へり罪を不斷に記憶すると死に近づくの望と貧しき衣服を以て求め得べし之を以て彼は何れの時にも末坐を擇ぶべく如何なる場合にも極めて些細なる賤業を甘んじて己れに任ひ不從順なる者とならず不斷に沈黙を守りて集會に出づるを好まず人に知られずして何事にも選ばれざる者となりて存せんことを願ひ何物をも制へ止めて

自から充分の指揮をなさず多くの人物と交はるを嫌ひ利益を好まざるべし然のみならず其心は何等の人々の非謗讒誣よりも高く上にあり嫉妬よりも上にありて其手は衆人に在りて衆人の手は己れに在る如くなる人とならず獨り寂地に在て己の業を務め自己を慮るの外世の何事をも自から慮らざるべし簡短に之を言へば旅行の生活と赤貧と寂地に止まることに在るなり視よ謙遜は是より生じて心は淨めらるゝなり

完全に達したる者の徴候は左の如し即人々を愛するが爲に日に十回火に付せらるゝとも壓かざらんことモイセイの主に言ひし如くなるべし曰くもしかなは彼等の罪を赦し給へ然らずば汝がしるしたまへる書中より吾名を抹し去りたまへ田埃及記三十二の三十二又福なるパウルの言ふ如くなるべし曰くわが兄弟の爲には自からハリストスより絶たれんことを或は願ふなり「ロー九の三」又言ふあり今我は汝等異邦人の爲に受る所の苦を喜ぶ「コロサイ一の廿四」他の使徒等も人々の生命を愛するが爲に種々の死を受けたりき此の一切の終は之を神と主とに總ぶ彼は人間を愛するにより其子を十字架の死に付し給へり蓋神が世を愛して其獨生の子を賜ひ世の爲に十字架の死に付し給

へるは「イオアン」三の十六他の方法を以て我等を贖ふ能はざるに非ず之を以て其豊富なる愛を我等に教へ其獨生の子の死を以て我等を神に近づけん爲なりしかれどももし彼に更に貴重なるものがありしならば我等諸族を得んが爲に其ものをも我等に與へ給ひしならん彼は其大なる愛により我等の自由を虐ぐるを喜び給はず彼は之を爲し得るにも拘はらず我等自心の愛を以て彼に近づかんことを喜べりさればハリストスは自から我等を愛するにより其父に従順し罵詈雑言を哀みと喜んで己れに受けしこと聖書に言ふ如し曰く其前にある喜びに身へて辱を意とせず十字架を忍び給へり「エウレイ」十二の二「ゆゑに主は其付さるゝ夜に於て言へり曰く是れ我の體世の爲に與へて生を得しむる者なり」ルカ二十二の十九又言へり是れ我の血衆くの人の爲に流さるゝ者罪の赦を得るを致す「マトフイ」二十六の二十八又言ふ我彼等の爲に己を聖にす「イオアン」十七の十九「悉くの聖人も成全なる者となり其愛と仁慈とを衆人に注ぐを以て神に似るときは亦かくの如くにして此完全に達す諸聖人は此徴候を切願す即近者を愛するの完全を以て神に似んことを切願す我等が諸父と修道士等も此完全の爲に我等が主「イイスス」ハリストスの生命に充たされて常に之に似んとするときは亦此の如くに行爲し

たりき傳へ言ふ福なる「アントニイ」は近者の爲よりも彼自身の爲に益あることは決して斷行せずして近者の利益が彼の爲に最良の業務たらんことを希ふと之と同く父「アカフン」の事をも言ふあり曰く余は癡者を尋ね彼より其體を取りて彼に己の體を與へんを願ふと完全なる愛を見るか又彼は自身の外何物をか所有する間は此を以て近者を安んせしめざるに堪ふる能はざりき彼に小刀あり兄弟來りて之を得んことを願ひけるに父は此小刀を彼に持たしめずして其庵より出さざりき其他かくの如き人々の事を書したるものも之と同様なり然れども是れ何ぞ言ふに足らん彼等の多くは近者の爲に己の體を猛獸と劍と火とに付したりきもし自己の希望を窃に感するあらずんば誰も此の愛の階段に昇る能はざるべしゆゑに此世を愛する者は人々に對する愛を得る能はざるべし誰か愛を得るならば神其ものを衣るなり然して神を得たる者は必ず神と共に他の何物をも得んことを肯んせざるのみならず己の體をも衣ざるべしもし誰か世を受するを以て此世と此生命とを衣るならば之を棄てざる間は神を衣ざるべしけだし神は自から此事を證明す曰くもし誰か一切を棄てず己の生命をも憎まずばわが門徒となる能はずと「ルカ」十四の二十六「たゞに之を棄つるのみならず之を憎まむこと肝要なり

之に反して誰か主の門徒となる能はずんば如何して主は彼に寓り給はんや。問 希望はかくの如く美にして希望の生涯と其行爲とは易く且其行爲は速に心中に成就するは何故なるか。

答 此時聖者の心中に天然の欲望起り彼等に此杯を飲ましめて彼等を酔はしむるに由るゆゑに彼等は最早勞苦を感せずして患難の爲に無感覺となりすべし進行を續くる間に於て彼等は思ふなるべし進行は空気に依りて成り人間の足を以てせずとけだし路の艱難は彼等の爲に見えずして彼等の前には丘陵もなく急流もなく路の崎嶇は坦げられん云々イサイヤ四十の四而して毎時毎刻其注意を父の懐に向はしむるに由るされば其希望は彼等に遠く隔たりて見えざるものをも瞬間に指示す如く神秘なる信仰の眼を以て熟視する者に之を察知せしむるに似たりけだし遠達なるものを望む希望の爲に心靈の部分を悉く焼かるゝこと火を以てするが如く在らざる所のものも彼等の爲には現在するものとなるなり彼等は其思念を全く彼處に引伸ばして常に彼處に達するに急なり而して或る道徳を戒すに近づくや彼れ一つの爲に勞せず悉くの道徳を總合して一時に全く之を成す何となれば此等の偉人は其進行を成すに他の人々の如く大路に由らずして自

から捷徑を選ぶによる是れ或る著名なる者等の速に住所に達する所以なり此希望は彼等を焼くこと火の如しされば彼等は急ぎて已まざる進行に休息を與ふる能はずして喜んで之を成すイエレミヤが言ふ所のものは彼等にも之あらん曰く我れ彼の名を想起せず又彼の名によりて言はず然るに我が心にありて燃ゆる火の如く我が骨に透るイエレミヤ二十の九神を忘れざる記憶は神の約束を望む希望の爲に酔はしめらるゝ彼等の心中に此の如く活動す。

道徳の捷徑は近親的徳道なり何となれば甲の徑より乙の徑に至る生涯の多くの徑路の間には大なる距離あらず場所も時間も要せず浪費も許さず直ちに事に着手してこれを成就すればなり。

問 人間の無慾とは何ぞや。

答 無慾とはたゞ慾を感せざるのみにあるに非ず之を己れに受けざるにあり蓋し聖人が得たる所の隠れ現はれたる許多各種の道徳に因り慾は彼等に衰弱して鼻すく起る能はず智は慾に關係して不斷注意するの必要あらざるべし何となれば卓越なる品行の事を思ひ且談するにより自覺と共に理に循ひて惹起せらるゝ思想を以て何れの時も満たさるればなりされば慾の起るや智は或る理會の臨むに

より慾と親しむより直に奪ひ去らるべくして、福なるマルクの言ひし如く慾は閑散にして爲す無きもの、如く存せん。

智は神の恩寵により道徳的練習に満たされつゝ、知識に接近するにより靈魂の陋劣愚鈍なる部分に属するものを感ずること尠少なり。けだし知識は彼を高きに取り去りて、すべて世にある所のものより遠ざくるはよるゆゑに聖者の無垢なるも其の智の幾微なるも移し易きと鋭敏なるも因るも又其苦行に因るも彼等が智は潔められて、其肉體の枯るゝにより清明なるものとなるなり。而して彼等は黙想に練習し、之に久しく止まるに因り、おのゝ内部の直覺を易く且速に與へらるべくして、其直覺する所のものは彼等を驚かさん。之に由り彼等は居常直覺に富みて、其智は理解する所の物に決して不足せざるべく、又靈果を産する所のものも決して無くんばあらざるなり。心中に慾を喚起せらるべき記憶は長き間の習慣を以て、彼等の心中より拭ひ去らるべくして、魔鬼の權力は衰へん。けだし靈魂は慾を思ふて之と親しむを爲さざる時は、他の掛念の爲に占有せらるゝにより、慾の力は靈的感愛を其爪に鉤くこと能はざるべし。

問 謙遜の特質は如何なるか。

答 それ自負は靈魂を其妄想により敗壞し、之を高きに持去りて、之により靈魂が飛で思念の雲に入るを礙へざらん。因りて靈魂はすべての造物に循ひて旋轉するかの如く謙遜も黙想を以て靈魂を一所に纏めて、靈魂は自己に集中するなり。靈魂は肉體の目にては認められず見られざる如く謙遜なる者も人中に認められざるなり。又靈魂は身體の内部に隠れて見えすすべての人と交らざる如く、實に謙遜なる人も衆人より離れ、すべてに缺如するが故に、人々に見らるゝと知らるゝとを願はざるのみならず、其望みは左の如くなるべし。即能くするならば、自己の内部に埋没し、黙想に入りて、之に止り、其従前の思想と感情とをすべて全く棄て、恰も造物の中に居らざる者の如くなる。未だ曾て存在せざる者の如くなる。己が靈魂にさへも全く知られざる者の如くならんを願ふゆゑにか、この如き人は自から密に隠れ、己を閉じて、世と離るゝ間は全く主宰の傍に居らん。

謙遜なる者は不節制の起るべき集會と人々の集合、騷擾、喧嘩、遊歩、周旋又は娛樂等を一見するも決して之に礙へられざるべく、言語談話、喚呼及び排辯には注意を向けざるべし。之に反し、獨居してすべての人に遠ざかり寂寥たる地に在りて、自己の爲に配慮しつゝ、黙想を以て衆人と絶縁するを最愛するなり。すべてを縮少すると無

所求と缺乏と赤貧とは彼の爲に大に欲する所なり彼の爲に願はしきは己れに多くの事を有して間斷なく動作するにあるには非ずして何れの時にも自由にして存して掛念を有せず此世のことに擾されずかくの如くして其思念を外に出さるにありけだし多くの事に立入るならば思念を擾さずして居る能はざるべきを彼は信認す何となれば多くの行爲には多くの掛慮と多くの複雑なる思念の集合するありゆゑに人は最欠く可らざる些少の必要を除くの外思念の平安を以て悉くの世慮の外に在るの事は最早止むべくして極めて善良なる思念を以て只管に配慮する思想をば放下せん然して其要求が人の極めて善良なる思念を遮りて已まざるときは人は且忍び且害する状態にあらん即是時より慾の爲に門は開けて静に思慮することは遠ざかり謙遜は逃亡して平和の門は閉さるゝなり此のすべての故に謙遜なる者はすべての多事より己を不斷保護す其時は彼は何れの時にも寧静と安息と平和と溫柔と恭敬とに居るを認められん

謙遜なる者には性急も粗卒も擾亂も短氣にして輕浮なる思も決してあらずして何れの時にも彼は平安に居るもし天の地に接することありとも謙遜なる者は驚かざるべし凡ての沈黙者は謙遜なる者に非ずされど凡ての謙遜なる者は沈黙者

なり謙遜ならざる者は己を節せず然れども己を節するの不謙遜者を多く見るべし溫柔にして謙遜なる主の言ひ給ひしものは亦此を意味す曰く我は溫柔にして謙遜なれば我に學べ汝等は其靈に安息を獲んマトフイ十一の二十九謙遜なる者は何れの時にも平安に居る何となれば彼の心を揺撼し或は驚かすものあらざればなり何人も山を恐らすこと能はざる如く彼の心も畏れざるなりゆゑにもし言ひ得べくんばけだし此く言ふは不適當にあらざるべし謙遜なる者は斯世に屬せまといふべしイオアン八の二十三何となれば哀みにも恐れず憂せず又樂みにも驚かず驕らずして其のすべての樂と眞の喜びとは主宰の意に適するものなるはよる謙遜には溫柔と自己に集中することを伴ふ即感覺の淨潔と聲音の諧調と疾言と己れに菲薄なると貧しき衣服と倨傲ならざる遊歩と目を下に垂るゝと慈悲に抽んずると涙の直に下ると靜なる靈と碎けたる心と怒を遷さるゝと官能を濫用せざると所有物を少うするとすべての需要を減ずるとすべてを勸忍すると忍耐と恐れざると一時の生活を惜むより生ずる心の堅固と試惑を忍耐すると重くして輕からざる意思と雜念を消すと貞潔の奧密を守ると羞耻と恭敬とを伴ふべし且此のすべての外不斷に沈黙すると常に己れの無知を訴ふるとを伴ふなり

謙遜なる者には彼を援助撓亂せしめんとする切迫なる事は決してあらず謙遜なる者は或時は獨り居りて自から耻づしかれども我が驚嘆する所のものは實に謙遜なる者は神に祈願することをも或は祈禱に着手するや祈禱を賜はることをも或は他の何物をか願ふことをも敢てせずして何を祈禱するをも知らざるにありたゞ彼は其面を地に俯伏するや其崇拜する所の尊嚴者の面より彼の爲に出づる一の憐みと恵みとを待ち悉くの思念を緘黙して其心の内部の眼は至聖所の讚美の門に昇せらるゝなり彼處の里は冥闇にして其の前にはセラフムの目も塞がり其の仁恵は軍隊を勵まし其の祝讃に立たしめて彼等の悉くの品位を黙せしめん而してたゞ左の如く言ふを敢てせん曰く願くは主よ汝の旨の如く我に成らんぞ我等も自己の事を彼と同一言はんアミン。

第四十九 説教

信仰と謙徳の事

小なる人よ汝は生命を得んを願ふか信仰と謙遜を己れに守るべし何となれば之

により憐みと助けと神より心中に告げらるゝ言とを得べく同く亦隱密にも顯然にも汝と共にする守護者を得べければなり此の生命の共與を得んを願ふか正直を以て神の前を行くべし知識を以てするなかれ正直は信仰を伴へども思念の輕薄と顛倒とは自負を伴ひ自負は神より遠ざかることを伴ふ。神の前に祈禱に立つときは其思念は蟻の如くなるべく地に匍匐する者の如くなるべく水蛭の如くなるべく嘔なる小兒の如くなるべし神の前に何か知識により言ふあるなかれ嬰兒の如くなる意思を以て彼に近づき彼の前を行くべし父が其嬰兒たる子の爲に有する父たる照管を汝に賜はらん爲なり言ふあり主は嬰兒を守る聖詠百十四の五、嬰兒は蛇に近づき撫んで之を其頸に掛るも蛇は彼を害せず他の人々が衣服に覆ひ包まるゝも寒氣は其全身に透る全くの冬を彼は裸體にて行き嚴寒氷凍の日に裸體にて坐するも病まざるなりけだし在弱なる肢體を守る測る可らざる照管は彼の正直の體を見えざる衣服を以て覆ひ彼に何の害をも近づかしめざるなり。

今や汝は或る測る可らざる照管のあるを信するか其軟弱と平生病あることにより何等の害をも直に受くべき軟弱なる身は之と反對なる者の間に照管を以て保護

せられて其の勝つ所とならざるなり。主は嬰兒を守る。然れどもたゞ此の身の小さな者を守るのみならず世に智者と稱せらるる者をも守る。故に彼等は己の智識を棄て、彼の全く充分なる睿智に倚頼し、其望を嬰兒に擬して、其後彼の學習の勞を以ては感ずる能はざる智慧を既に學びぬ。神智を得たるパウエルは絶妙に之を言ひ、曰く「此世に於て智なる者と意ふ者あらば智とならんが爲に愚者となるべし」と。リソフ前三の十八とさりながら汝は信仰の尺度に達せしめんことを神に願ふべし。汝は此樂を心中に感ずるならば最早汝をハリストスより背かしむるものあらす。此時予に告るを難んせざるべし。又汝が毎時地に屬するものより遠く捕へ去られて此の劣弱なる世と世にある所のもの、想起とより隠されんことも汝の爲に難からざるべし。此事の爲に懈らすして祈るべく、切に之を願ふべく、之を受くるに至る道は大なる勉勵を以て嘆願すべし。而して又弱らざらんことを祈るべし。もし先づ己を強ひ、信仰により其慮を神に托して其慮る所のものを神の照管に換ふるならば之を賜はらん。神は汝が意思の全く純潔なるを以て自己に信任せずして、神其者に信任し自己の靈魂に倚頼せずして、勉めて神に倚頼するの此自由を汝に於て見るあらば彼の知るべからざる能力は汝に寓るべく、汝は彼の能力の疑なく

汝と共にするを明に感せん。是即多くの者が己れに感じて火に赴くも恐れず、水中を行くも溺れんを懼れて其意に躊躇するを爲さるる能力なり。何となれば信は心の感覺を堅むるによる。故に或る見えざるものが人を勸めて恐るべき事物の現象に注意せざらしむると、感覺の爲に堪ふべからざる現象を看望せざらしむるとを人は自から感ずればなり。蓋し汝は思ふならん、或者は彼の靈的知識を此の心的知識により受けんと、彼の靈的知識は此の心的知識を以て受くるを得ざるのみならず、感覺を以て之に觸るゝことも、或は心的知識を熱心に研究する、或者に之を賜はることも能はざるなり。もし彼等の中靈的知識に近づかんを願ふ者ありとも、此の心的知識と其幾微の種々なる術計と、其多くの複雑なる方法を棄て、嬰兒の如くなる思の狀態に己を立てざる間は、靈的知識に毫も近づく能はざるべし。反て彼等の爲に大なる妨礙となるものは、心的知識の習慣と理解とにして、漸々之を消滅せざる間は、妨礙とならぬ。靈的知識は純然無雜にして、心的思念には照り輝かざるなり。靈智が多くの思念より自由を得て、淨潔の獨一醇正に達せざる間は、靈的知識を感ずる能はざるべし。視よ、此知識の定法は、彼世の彼生命を感ずるにあり、ゆるに彼は多くの思念を排斥

す此の心的知識は多くの思念の外他の智力の醇正を以て受るを得べきものを識る能はざることは、主の言ひ給ひし如し、曰くもし轉じて幼兒の如くならずば神の國に入るを得ず、マトフェイ十八の三しかれども、視よ多くの者は此醇正に達せずして、反つて其善良なる行爲により天國に於て享くべき部分の守られんを希望することは、主が種々に形容し給へる福音の眞福を了會するにより我等之を確知するを得べくして、主は此の眞福を以て各種の生涯に於る多くの變化を我等に示し給ひき、何となれば各人は神に進行する種々の途に於て悉くの方法により天國の門を自己の前に開くべきによる。

さりながらもし轉じて幼兒の如くならずば、誰も彼の靈的知識をうくる能はざるべし、げだしたは是時より彼の天國の樂を感ずるを得るなり、天國のことは人皆言ふ彼は靈的直覺なりと、此直覺は思念の働を以て得らるべきにあらず、たゞ恩寵により之を味ふを得べくして、人は己を潔うせざる間は、之を聞くに充分の力を有せざるべし、何となれば誰も學んで之を得る能はざればなり、子よもし汝は人たよ離れて沉默し、信仰によりて生ぜらるゝ心の淨潔に達し、此世の知識を忘れて之に觸るゝだもあらずんば、靈的知識は求めずして汝に得らるべし、言ふあり塔を建

て、之に油を注げよ、さらば其中に於て實を發見せんとされども、し心的知識の繩を以て縛らるゝならば、此繩を脱するよりも、鐵槌を脱するは汝の爲に更に易しと予が言ふは不適當にあらざるべし、汝は離惑の網より常に遠ざかりざるべし、主の前に於る勇氣と主に對するの希望とを如何にして有すべきを決して了解せざるべし、何れの時も劍の尖を往來し、如何しても憂慮なくして居る能はざるべし、汝は主の前に宜しく生活すると憂慮なくして居らんことを弱きと正直とを以て厭むすべし、げだし影の形に伴ふ如く、憐みも謙遜に伴ふ終りにも、し此を學ぶを願はば、劣弱なる思念に決して手を假すなかれ、もしもろくの害ともろくの惡をすまての危険が汝を圍繞して、汝を嚇すありども、之を念頭に掛るなかれ、之を齒牙にも貫くなかれ。

もし汝は汝を保護する爲に全く充分なる主に、一たび己を托し、其の汝を照管するに信任して、主に隨行するならば、復何事も掛慮するなかれ、己が靈魂に告げて、次の如く言ふべし、予が己の靈魂を一たび付したる者は、我が爲に何等の事に對しても充分なり、予は此處にあらざるも、彼は此を知ると、其時は神の奇蹟を實に看破すべし、如何なる時にも、神は近くして、神を畏るゝ者を救ひ、神の照管は見えずよ、ら、ら、

も彼等を如何に圍繞するを看破せんしかれども汝と共にする守護者は肉體の目には見えざるにより汝は彼を疑つて在らざるもの、如く思ふべからずけだし彼は汝を安んぜしめん爲に肉體の目にも現はるゝこと度々之あればなり。人はすべて有形なる助と人間の希望を自から拋棄し信念と清き心を以て神の跡に隨ふならば直ちに恩寵は彼に伴ひ種々の助を以て其力を彼にあらはさん。先づ此の身體に關する顯然なるものに其力を洩し其照感を以て助けを彼にあらはすは之を以て神の照管の力を大に彼に感得せしめん爲なり。顯然なるものを了解するにより神秘なるものにも信を置くは其の思想の幼稚と其生涯とに如何に適當なるやけだし人は此事に意を致さずんば人の爲に要用なるものを如何にして備ふべけんや人に近づきて屢々危険に充たさるゝ多くの打撃が人の其事を思ふこともせざる際に過去ることありこれ其際に恩寵は冥々に且最不可思議に之を彼より反拒するものにして彼を守ること恰も鳥の其雛を養ひ翼を張りて之に何の害をも近づかしめざる如くするなり。恩寵は人に害の接近したりしことと無害にして存したることとを人に目撃せしむるなり。神秘にして識る可らざるものに關しても恩寵はかくの如く人を救へ解し難く悟り易からざる意思及び思念の狡

猶を其目前にあらはすゆゑに人は彼等の關係と其の互の連合と其の誘惑と其中何の思念に人は緝捕せらるるを彼等は如何に互に相生して靈魂を害することを易く搜索するを得べし。而して又恩寵は魔鬼のすべての奸計と其惡念の潜まる處所を人の目前にあらはして之を辱め、未來を瞭解する才能を人に入れ、其正直の爲に神秘なる光の照しかゝるは幾微なる思念を理解するの能力を充分に覺知せしめんが爲にして、もし之を確知せずんば人は何を忍受すべきか之を示すこと宛も指を以て示す如し。されば其時人は大なるも小なるもすべての事を祈禱に於て造成者に願はざるべからずとの意は此より人に生ずるなり。此のすべてに於て神に依頼せしめん爲に神聖なる恩寵が人の意思を堅むるときは、漸く人は試感に入るを始むべくして恩寵が人に其量に應ずる試感を遣はすを許すは人をして試感の力を忍耐せしめん爲なり。而して此等の試感に於て其の助の切に人に近づくは人が漸く學んで智慧を求め神に依頼して其敵を輕んずるに至る迄勇氣ならん爲なり。けだし人が靈界の戦に智慧を得て自己の照管者を認識し、自己の神を感じて彼を信するに竊に確立せんことは、たゞ其堪ふる所の試験の力に依るにあらずんば能はざるなり。

恩寵は人の念頭に多少自負心が現れて人の己を高く思ふを見るや直ちに人に對する試惑の益烈しく且強まるに放任すべくして人が己の弱きを認識し走りて神の爲に謙遜に捕へらるゝに至る迄は此の如くならん此により人は神の子を信する望むを以て成人の量に達し高められて愛に至らんげだし神の人に對する奇異なる愛は人が其望を破壊せんとする境遇に居る時に認識せらるゝなり此處に神は其力を人の救に於て現はし給ふげだし人は安息と自由の中に在ては神の力を決して認識せざるべくして神もたゞ其沈黙の地と野とに於てする即人々と共に居り共に集まりて喧嘩するを奪はれたる處に於てするの外何處にも其働を現然とあらはさざりき

道徳に着手するや殘忍にして猛烈なる患難の八方より汝に傾注するを怪むなわれ何となれば事の困難を伴はずして成就するものは道徳とも思惟せられざるに由るげだし聖イオアンの言ひし如く彼が名づけて道徳(Deus)と稱せらるゝも之が爲なるなり言へらく道徳は困難を迎ふるを例とすもし安息と連るならば彼は非難に値す福なる修道士マルクは言へ凡て行ふ所の道徳は神の賦命を實行するときは十字架と名づけらるべしと故に主の國に於てイイススハリストスに在

りて生を渡らんと欲する者は皆窘透せられん(テイモスニ後三の十二)げだし主は言へり我に従はんと欲する者は己を捨て其十字架を負ひて我に従へ(マルコ八の三十四)安息に生さんことを欲せざる者は我が爲に己の生命を喪ひて之を得ん(マテフイ十六の二十五)彼が汝に先だちて汝の爲に十字架を供へたるは汝自己の爲に死を定め其後己の生命をさゝげて彼に従はん爲なり

強きこと失望の如きはあらず誰か之を征服するに右の手を以てせんか或は左の手を以てせんか彼は頓着せざるなり人が其意中に希望の生命を奪ふときは之より狂妄なるものはあらざるべし何等の敵も彼には抵抗する能はざるべく如何なる患難のことを聞かしむるも彼の念を弱らしめず何となればすべて遇ふ所の患難は死より軽くして彼は其死を己れに受けんが爲に其首を垂るればなりもし汝は如何なる場所に於て如何なる行爲を以て如何なる時に何事をか成さんと欲するも其意思にて目的と行爲と哀みとを予想するならば汝の前に顯はるゝすべての不便不利に抵抗するが爲に何れの時にも勇氣にして怠らざる者となるのみならず彼の安息に突進する思念の爲に常に生じて汝を嚇し且恐れしむる意思は汝の此等の思慮により汝より逃走せんさればすべて汝と遭遇する困難なるものと

不便なるものは汝の爲に便利にして容易なるものとならん。汝の所期に反對なるものは度々汝と偶會するあらん。然れどもかくの如きものゝ絶て全く汝と偶會せざることも亦往々之あるべし。安息の望は如何なる時にも人々をして大なるものと善なるものと又は道徳をも忘却せしむるは汝の知る所なり。しかれども此世に肉體の爲に生活する者等ももし不快を忍耐するを其心に決せずんば、其願意を全く遂行するを得る能はざるべし。實驗は此を證明するにより、言を以て此事を勧むるの要あらず。何となれば昔より今に至る迄人々の衰弱するは、他の何の爲にもあらず。即此が爲にして、たゞに勝を奏せざるのみならず、最良なるものをも奪はるゝなり。故に簡短に之を言はんにも、人は天國のことを輕んずるならば、是れたゞ些細なる此世の安樂の望によるなり。而して人にはたゞ此の一の望のみあるに非ずして、烈しき打撃と恐るべき試惑とはすべて其望に専心注意する人の爲に頗りに備へらるゝも、人の思想は此と相適するなり。何となれば肉慾が之を制取するによる。鳥は止まる所を狙ひつゝ、網に近づぐを誰か知らざらん。境遇と場所と或は他の何事を以てか隠し掩はるゝものに於る我等の知識も小なる鳥の知識に比して往々

及ばざる所ありて、たゞ之により魔鬼は最初より安息の約と其事の思念を以て我等を捉ふるなり。予は意の如く言を進行せしめんと欲して、此説教の爲に最初予想したる目的より離れたり。何ぞや、我等は主の爲に首途をなさんことを欲するすべての行動に於て、其意に患難を予想して目的となし、行路の終を其始に子細に確定するは何れの時にも肝要なること是なり。人は主の爲に或事を始めんと欲するや、如何して度々左の如く問ふか。此事に安息ありや。此行路を勞なくして便利に過ぎ得べき方法あらざるか。或は此行路には身體を疲らすべき患難あらざるかと。視よ、我等は何處にもあらゆる方法を講じて安息を強て求むるを、人よ、汝は何を言ふか。天に昇り彼處の國をうけ、神と體合し、彼處の福樂に安んじ、諸天使と交り、永久不死の生命を受けんを願ふて、此行路に勞苦の有りや無しやを問ふか。奇怪の事かな。此の暫時の世に屬するものを願ふ者は、恐るべき海浪を涉り、過ぎ易からざる路を過ぐるを敢てして、其爲さんと欲する所の事に勞苦或は悲哀の有無のことは絶て言はざるにあらずや。之に反して、我等は何れの處にも安息を探問す。なりながらもし如何なる時にも十字架の行路を心に想像するならば、如何なる悲哀は此行路より易からざるか。思

ふべきなり。
もし人は最初より患難勞苦を輕んずる者とならずんば決して戦に勝利を得る者
あらざるべく朽つ可き榮冠をさへ受けずして其願の讚美すべきに拘はらず之を
遂るに至らざるべし何を以ても神の事を務めず賞讃すべき善行の一にも進歩せ
ず安息に引誘するの思を許して自から之を親み等閑怠慢及び怯懦を生じ之に由
りて全く衰弱するに至らん此事を全く信用せざる人ありや恐くはあらざらん
心が道徳に奮熱し始むる其時は視覚聴覚鼻覺味覺觸覺の如き外部の感覺も彼の
天然の力に超ゆる稀有非常なる困難に勝を譲らざるべし而して天然の刺激が適
時に其働を顯すならば身體の生命は糞土より輕からんけだし心が精神を以て奮
熱し始むるときは身は患難の爲に憂へざるべく畏れざるべく恐れて縮まらざる
べく心は堅く金剛石の如くなりてあらゆる試惑に抵抗せん我等もイエスの旨
を奉ずる精神の奮熱を以て熱中せんさらば我等が意中に怠慢を生ずべき何等の
不注意も我等より逐拂はれん何となれば熱心は勇氣と心算の能力と身體の勉勵
とを生ずればなり靈魂は魔鬼に向つて天賦の強き熱心を動かすならば魔鬼に何
等の力ありや然して憤心は亦熱心の所産と名つけらるもし憤心は其力を働かし

心中に於て恐れざるものとなれるすべての力に強きを加ふるときは「苦行者及び
致命者等が忍耐を以て受くる殉教の榮冠も天然の刺激によりて生ずる此熱心と
憤心の二の働を以て得らるゝなり」人々は猛烈なる苦難の中に在りて怖れざる大
膽なる者とならん神は我等にもかくの如き憤心を與へて神を悦ばしめんアミン。

第五十 説教

遁世の益

生活上の事に於て我等が眼前に臨む戦は實に頑固に且困難にして容易にはあら
ざるなり人は幾ばく堅固にして勝たれざる者となり得るとも格闘と苦行の險因
となるべきものが人に近づくならば恐怖は人を去らすして魔鬼と顯然なる戦を
爲す時よりも滅亡は更に速ならん故人が其心に恐るゝ所のものより遠ざから
ざる間は敵には常に人を襲ふの便ありもし僅に坐睡し始むるならば敵は容易に
人を滅さんけだし靈魂が世と有害の交際を爲して之に繋がるときは此交際は敵
の爲に鋭鋒利刃となるべしさればもし之を迎ふるならば自然に自から勝利を讓

るものといふべし。故に古來此路を經過せる我等が諸神父も我等の智が何れの時にも一所に固く止まりて警衛看守する能はず、又其力あるにもあらずして、或時には之を害せんとするものを看破するさへ能はざるを知り、容智を以て之を慮りて、無慾を衣ること武器の如くし、録して言へる如く多くの格闘より免れて、かくの如くなれば其缺乏を以て人は多くの陷罪より救はるゝを得ん、慾の源因となるべき生活上の憧擾を免るゝ野に避けたり、是れ彼等が弱るとき滅亡の因たる忿怒、慾望、怨恨、名譽を迎へざらんが爲にして、野は此の凡てを容易ならしむるに由る、けだし彼等は野を以て己を堅め且衛ること勝たれざる城樓の如くせり、其時彼等はおのゝ黙想により其苦行を成すを得たりき、けだし彼處に於ては五感も自から成る有害なるものを迎へて我等の敵に加勢する爲に助を得るあらざればなり、我等墮落に生さんよりは寧ろ苦行に於て死を迎へん。

第五十一 説教

人は何に由りて生命の外部の状態の變ずること共に
神秘なる思想にも變化を來すか。

人が無慾に居る間は此生命より移ることの考は不斷に生ずるあり、ゆゑに人は其配慮を常に復活の後の生命に適用し、彼處に於るすべての準備をなさんことを何れの時にも考へて忍耐を得べく、其思念に種付けらるゝすべての榮譽と肉體の安きを避けて、世を輕んずるの念慮は毎時其心中に活潑せん、されば人は其心に勇氣を得て、死を致すべきすべての危きとすべての恐れを迎へん、爲に何れの時にも剛毅なる心を得べく、死をだに恐れざらん、何となれば毎時毎刻死に注目すること、或る接近するものに注目して之を待つ如くし、其配慮を以て全く疑はざる希望と共に神に托するによる、さればもし患難の彼と遭遇するあらば、患難は人に榮冠を送る所以のものなるを保證して、確に之を知るものゝ如く、すべての歡喜を以て之を忍耐し、樂み且愉快にして之を受けん、けだし神が自から有益なる理由により、我

等の爲に冥々にして知るべからざる攝理を以て人に之を預定するを知ればり。しかれども若し人は彼の智者のすべのて害惡に對する行動と謀計とにより何に因てか或る暫時なるものを求め得べき機會に遇ふあらば之と同時に肉體に對する愛は其心中に惹起されて人は長生のことを思ふべく肉體の安きを思ふ念慮は毎時彼に起りて勢力を得て肉體に屬するものは彼を制服せんさればすべて彼の爲に此安きを成す所のものを如何にして己れに有するを得べきかと自から之を搜索すべくして畏懼の念の屬下たらざる此自由を失はん此により如何なる場合にも人を恐れしむる念慮に礙へられて其畏懼の爲に源因を考へんとす何となれば彼は無慾を以て高く世の上にあらしむとき求め得て其求め得たる量に隨ひ世の相續者として其靈中に宿まされたる心の堅固を奪はるゝによる而して彼は神の定めたる法と攝理とにより畏懼に服せん我等が肢體の使用の爲に備へらるゝ其者に役せられて使徒の言ふ如く種々の畏懼を以て奴役に服するに罰せられん(エウレイの二の十五)。

自愛はすべての慾に先だち安息を輕んずるは悉くの德行に先だつ其身を安息に付する者は平安の地に於て身に苦厄を招致せん少壯の時に樂む者は老て僕となり末後の日に悲歎せん其首を水中に没する者は此の虚しき胸中に注ぐ所の稀薄なる空氣を自から吸收する能はざる如く思を此世の忙裏に埋むる者も彼の新なる世界の感を自から吸收する能はざるべし死の氣は身體の組織を亂す如く不適當なる觀玩も心の平安を亂さん一身に健康と病とあらば一は他の爲に亂されざる能はざる如く一家に多くの財と愛とあらば一は他を害せざらんこと能はざるなり玻璃は近きにある石と衝突するならば完全にして存する能はざる如く聖人も婦人と共に居り彼と久く留りて共に談話するならば其淨潔を守りて汚されざる能はざるなり樹は強くして已まざる水の流の爲に根こそげ曳抜かるゝ如く世に對するの愛も身體に突入する試惑の流れの爲に心中より根を絶たるゝなり藥物は惡液の不潔を體中に盡す如く患難の強きも心を惡慾より潔めん死者は生者より感ずる所の香氣を發する能はざる如く沈黙に没すること墓に葬むらるゝ如くなる修道士の靈魂も人々の間に使用せらるゝ者の如何を問はず之に觸るゝときは通常烟の如くあらはるゝ簾淨の氣を吞はるゝなり戰場に敵を救す者は害なくして存する能はざる如く苦行者も其體を宥すならば其靈を亡びより救ふあたはざるなり少女は恐ろしき觀物の爲に驚かざるゝや逃走して父母の衣裾を握

み其助を呼ぶ如く靈魂も試惑の恐れのために迫られ且碎かる程は急ぎて神に就き断えざる祈禱を以て彼を呼ばん試惑が彼此相續て靈魂を襲ふ間は祈願を増せども再び自由を受くるや早くも意思の高超に従はん。

悪行の罰の爲に裁判者の手に付さるゝ者は鞫問に近づくや謙遜して直ちに己の不義を承認するならば罰は軽減せられて小なる苦厄の後速に裁判を免れんしかれどももし或犯人は頑として承服せずんば彼を新なる鞫問に服せしむべくして終に多くの拷問の後其體が疵の爲に掩はるゝときに至り彼等は心ならずも自白すといへども之が爲に何の益をも受けざらん我等も此の如く不謹慎にして犯したる罪の爲に仁慈は我等をあらゆる者を審判する所の義なる裁判者の手に付してわれらを試惑の杖の下に引伸すを命ずるは我等彼處に於て受くべき罰を軽減せられん爲なりされば裁判者の杖の我等に近づくや我等は謙遜して自己の不義を想起し我等を責むる者に自白するならば暫時の試惑の後速に救はれんしかれどももし無情にして其厄を感せずかくの如きの罪に實に罪ありて之よりも更に大なる厄を受けることの相當なるを承認せず反つて人々を咎め或時は魔鬼を咎め又或時は神の義をも咎め我等はかくの如きの事に罪あらずと主張して之を思ひ

且之を言ふと雖も神がわれら自己よりも善く我等を知りて我等を管轄するをば思はず其裁判は全地に及び其命令なくんば人は罰せられざるを思はずんばすべて我等と遭遇するものは連続として絶えざる哀みを我等に被らしむべく我等の厄難は増や加はるべくして我等自己を認識し謙遜にして自分の不法を感ずるに至る迄は此厄難は彼此相次で我等を縛ること細の如くならんけだし之を感せずんば我等革新を得る能はず而して終に厄難の多きを以て苦められたる我等は最早通常の如く慰藉のあらざるに懺悔を爲すとも己の爲に益あらざらんしかれども此く己の罪惡を感じ始むるは是ぞ神が我等種々の試惑の爲に疲るゝを見るや神を以て我等に與へらるゝ賜にして其時我等は己の爲に何の益をも受けずして悉くの不幸及び患難と共に此世を去るを免れざらんと考を生せん己の罪を曉らざるは難きが爲に非ずして無知による或者は之と同様の境遇に居りて罪あれども其罪を悔いす却て之を否定し他を罪するを以て此世を去ること稀なりとせずしかれども仁慈なる神はもし彼等自から謙遜にならば彼等を赦して之を軽減せんことを期したるに其試惑を軽減するのみならず小なる中心の懺悔にも憐れ垂れて其の大なる罪をも赦さん。

人あり大なる禮物を王に献げ之が爲に愛眼を以て賞せらる、かくの如く祈禱に涙を有する者をも世々の大なる王神は其罪の大なる鼠を赦して慈眼を以て彼を賞せん、羊は其園より脱し、牧場の外にさまよひつゝ、狼穴の爲に礙へらる、かくの如く黙想を守るに托して、其友の集會より離るゝ、修道士も常に演劇に適き、其友を避けて彼に近づき、觀物の巷を過ぎん。

高價なる眞珠を己の肩に擔ひ、賊の居る所の路を行きて、悪しき風聞さへも傳はるを聞く人は、毎時戰慄す、恐くは襲撃に遇はんと、かくの如く眞潔の眞珠を擔ひて、世に此敵路に向つて進行する者も、墓の住所に即希望の邦に達するに至る迄は、賊より免るの望あらざるなり、貴重なる眞珠を自から擔ふ者は、懼れざるを得るか、かくの如く此者も敵が如何なる地に於て何處より何時彼を窺ひて、俄に其希望を彼より奪ふを知らず、而して彼は自家の門に於て、即其衰老の時に於て奪掠せられん。哀みの日に酒を飲む人は、爛醉して自己の艱難なる位置に於る如何なる哀みをも忘る、かくの如く神の愛に酔はしめらるゝ者も、此世に於て、即驕淫の家に於てあらゆる勞と哀みとを忘れ、其酩酊の故にあらゆる罪愆の爲に無感覺なる者とならん。彼の心は神を望むを以て堅めらるべく、彼の靈は輕きこと、羽禽の如くなるべく、彼

の智は毎時地より擧げられ、其思は凡て人間に屬するものより高く翔りて、至上者と共に不死を以て樂まひ、彼に光榮と權柄は世々に歸す、アミン。

第五十二 説教

夜間の徹醒及び其行爲の種々なる方法

醒の勤に立たんと欲する時は、汝に告ぐる如く、神の助により行ふべし、例の如く汝の膝を屈めて、而して起つべし、而して汝の奉事を直に始むるなかれ、先づ少しく祈願して、祈禱を行ひ、生活を施す十字架の記號を其胸と其肢體に畫するや、汝の感覺の安んじて、汝の思慮の靜まるに至る迄は、暫時默然として立つべし、其後内部の眼を主に擧げて、汝の弱きを堅め、給はんことを哀んで、主に願ふべし、汝の聖詠を歌ふと、汝の心の思は主の聖なる旨に適ふものとならん、爲なり、而して心中に默然して、次の如く言ふべし。

汝主イエス、我が神、其造物を眷々として顧みる者よ、我が慾念と我等が性の弱きと、我等が敵の力とは、汝に明なり、汝自ら彼の憎惡より我を匿し給へ、何となれば、彼

の力は強けれど我等が性は頼み我等が力は弱ければなりぬるに汝善なる者よ我が無力を知りて我等が衰弱の重きを己れに負ふ者よ我を思の動亂と慾の洪水とより守りて我を此の聖なる勤行に堪ふる者と爲し給へ我れ己の慾を以て勤行の美を敗壞せず汝の前に無耻狂妄なる者とならざらん爲なり

我等勤行を爲す時はすべて小兒の如き擾亂せる思を絶ちて全く自由に己を導かんこと肝要なりしかれども時間が多からずして勤行の終らざる先に曉の迫るを認るときは自願と認識とに依り通常の規則の中より一二の讚美を殘さん擾亂に餘地を與へて之により我等が勤行の爲に趣意を失はざらん爲なり及び第一時の聖詠を當然の順序に依らずして讀まざらん爲なり

もし勤行を爲す時思念は汝に話掛け汝に耳語きて少しく急げけだし汝の爲に用事は多端なり疾く自由なるべしと言はば汝は此思念に同するなかれされどもし更に烈しく此を以て汝を安んせしめざるときは直ちに一讚榮丈後に戻り又は欲するだけ戻りて祈禱の旨趣を含有する句々を熟思と共に數回反復すべししかるにもし思念は更に汝を亂し且妨ぐるならば聖詠を歌ふを止めて言ふべし余が願は言を計算するにあるにあらず住所に達せんとするにありけだし何等の捷徑に

より如何に予を導くも予は速に行かんと彼の嶺を野に放てる民は山岳丘陵を跋え或は登り或は下りて四十年の間野に彷徨したれども遠くよりさへ約地を見るあらざりき

もし徹醒に従事するとき久しく立つは汝をして時の長きに堪へざらしめ無力の爲に弱るあらんに思念は汝に告げ確言すれば奸黠者は思念によりて言始むること蛇によりて言ふ如く終れよ立ち續くる能はざればなりと言はば答へて言ふべし否らず予は一のカフスマの間坐せん是れ睡眠より勝れりもし予が舌は黙して聖詠を朗唱せざるも予が心は祈禱に於て神と談話し神によりて教へらるゝならば不眠は何等の睡眠よりも有益なりと立つこともたゞ聖詠を誦するのみなることも至き徹醒にはあらず之に反して或者は全夜を聖詠に於て送り他者は痛悔と感動せる祈禱と地の伏拜とに於て送り又或者は其陷罪の爲に涙と嘆息とに於て送らん我等が神の一人のことを言ふあり彼が四十年の間祈禱を成せるは左の一言なりと曰く我は人なるにより罪を行へり汝は神なるにより救し給へと彼が此句を哀んで復習するを他の神父等も聴きしが其間彼は泣て止まざりしとぞ彼は此の一の祈禱を以て晝夜の勤行に換へたりき又或者は晩の小部分を以て聖

詠を誦し、残る夜分は「トロバリ」を歌ふを以て送りたれども、他者は讃詩と誦經を以て送り、然して或者は膝を屈めざるを己の規則となし、こと放蕩なる思念を攻撃する者の如くなりき。我等が神に光榮と權柄は世々に「アミン」。

第五十三 説教

謙遜は如何なる尊敬を受るか、其階級は如何に高尚なるか。

兄弟よ、予は口を開きて高尚なる目的、即謙遜のことを言はんと欲す、しかれども予は恐れに満たさるゝこと、猶自己の思慮に依り神のことを議せんとするを知る者の如し、謙遜は神性の衣服なり、人となりし言は此服を服して之により我等の體を以て我等と談話せり、されば凡て此服を服する者は實に彼の高きより降りて辱威の大なるを隠し、受造物が仰ぎ望んで焼かるゝを免れん爲に謙遜を以て其光榮を掩ふたる者に似たるあり、げだし彼が受造物より部分を取り、かくの如くして受造物と談話せざりしならば受造物は彼を熱視する能はざりしならん、彼が口づから

言ふを面り聞くを得ざりしならん、何となれば彼が雲中よりイズライリの諸子に語りしとき、彼等も其聲をきく能はず、モイセイにつけて、神は汝と言ひ、汝は其言を我等に傳ふべし、神が我等と言ひて、我等死せざらん爲なり、「出埃及記二十の十九」といひたればなり。

此によりて見るに受造物は彼と公然對面を爲すを如何して得べきや、神の顯現の畏るべきは、代求者も左の如く言ふに至れり、曰く「恐懼戰慄せり」と、「エウレイ十二の二十」何となれば西乃の山に現れし光榮は、其力最大にして、山は烟を發し、山の山より示されたる示現の恐るべきに搖撼し、山の麓に近づきし猛獸は死せり、然してイズライリの諸子はモイセイの命に循ひ己を淨めて、神の聲を聞き、神の示現を見るに堪ふる者とならんが爲に三日の間準備整裝せり、しかれども時至るや其光の顯現と其轟く聲の強きとを受る能はざりき。

今は然らず、其來臨を以て世界に其恩寵を注ぎ給ふや、彼は降るに天變地異に於てせず、火中に於てせず、恐るべき強き聲に於てせず、却りて羊毛にそゞく雨の如く、靜に地上に落ち、點滴の如くして、他の方法により我等と談話しつゝ、現はれ給へり、何ぞや、彼は其尊威を肉體の帷幕の中に隠すこと寶庫に藏めたる如くして、其指揮に

より童貞生神女マリヤの懐に於て己を建造し我等の間において我等と談話し給へり是れ我等看望するとき彼は我等が族中の一人にして我等と談話するを見つゝ驚かざらん爲なり。

故に凡て造物主が其體に衣て現はれ給ひし衣服を服する者はハリストス其ものを衣るなり何となればハリストスは其受造物に現はれ給ひし此同形を以て全人間と共に居りて全人間も其内部の人に之を衣んを願ひ此同形を以て其同俣に現れ尊敬と外部の光榮を服するに代へて之を以て飾らるればなり故に有言無言の受造物はすべて此同形を衣たる人を見て之に伏拜すること主人の如くし以て此同形を衣て消光し給ひし自己の主宰を榮せんとすけだし如何なる受造物は謙徳ある者を尊敬せざらんやさりながら謙徳の光榮の衆人に現はるゝに至る迄は此の聖徳を滿るの觀は輕視せられたりき然れども今や此謙遜の大徳は世の目前に照り輝きてすべての人は何れの處に於ても見るを得る此同形を尊ばざるはなし此に依りて受造物は己の創造者と造成者の現象に接するを賜はりぬ故に此同形は真理の敵の爲にも輕んせられざるなり之を得たる者はすべての人間より貧しといへども之を學びたる者は之を以て飾らるゝこと榮冠と紫袞衣とを以て飾ら

るゝ如し。人は決して謙徳ある者を嫉妬を以て苦めず言を以て傷つけずして彼を輕んせざるべしけだし彼の主宰が彼を愛するにより彼は衆人に愛せらるゝなり彼は衆人を愛して衆人も亦彼を愛す人皆彼を慕ふゆゑに何の處に近づくも到る所彼を見ること光の天使を見る如くして彼に尊敬を加ふもし智者或は教師は言はんことするも彼等は黙止す何となれば彼等は言ふの權利を謙徳ある者に譲ればなり衆人の目は彼の口に注ぎて如何なる言の其口より出づるを待つすべての人は彼の言を待つこと神の言を待つ如し彼の簡短なる言は智的想像を説明する賢哲の格言と同じ彼の言は智者の耳に甘きこと砂糖と蜜の咽に甘きより甚し彼は言語に厭はずして其狀貌は卑しく且微なりと雖彼の裁決は人々の爲に神の裁決の如し謙徳ある者を侮蔑して言ひ彼を視て活潑の人と爲さざる者は神に向つて其口を開く如ししかれども謙遜なる者が彼の眼中に輕んせらるゝと同時に謙遜なる者の尊敬はすべての受造物に於て守らるゝなり謙徳ある者は有害なる野獸に近づくかにか僅に眼を擧げて彼に向ふや彼等が猛烈は鎮まりて彼に近づくこと其主人に近づく如くし其首を偪伏して彼の手と足を舐る何となればアダムが罪を犯

す以前に野獸を集め、樂園に於て彼等に名を命せしとき、アダムより發したる香氣を謙徳ある者より感ずればなり。此香氣は我等より奪はれたりしかれども、イオヌスは來りて之を新にして再び之を我等に賜へり。人間の馨香は之を以て油せられたり。又謙徳ある者は死を致すべき飛蟲に近づくか、僅に接近して其手を彼等の體に觸るゝや、彼等が腐蝕性と死を致すべき毒氣の烈しきは、息み其手を以て彼等を潰すこと、蝗の如くせん。彼は人々に近づくか、人々は彼に注目すること、主人に注目する如し、我れ何ぞ人々を言はんや、魔鬼だも其の全く無耻なると煩悶すると思念の全く高慢なるに拘はらず、彼に來るときは、塵の如くなる可し、其憎惡は力を失ひ、其奸計は破れ、其狡黠は爲す無くして存せん。

今や我等は神に依る謙遜の光榮の大なる謙遜に隠るゝ力をあらはしたるにより、謙遜の如何なる人如何なる完全により、何時之を受るを賜はることをあらはさん。又外見上謙遜なる者と眞の謙徳を賜はりし者との間の區別を爲さん。謙遜は或る奥密なる力にして、完全なる聖者がすべての行爲を成就せし後受る所のものなり。此力は他にあらず、獨り德行に完全なる者に恩寵を以て與へらるゝものにして、天性此を受るの能ありて之に堪ふるによる、何となれば此德行は自から

一切を含有すればなり。故に如何なる者たりとも、すべての人を謙徳ある者と看做し得べきに非ずして、たと我等が述べたる定式に相應したる者のみを謙徳ある者と爲すべし。

天性謙抑にして沈黙なる者、或は善智なる者、或は溫柔なる者は、皆既に謙遜の階段に達したるに非ず。反つて誇るに足るべきものを奥密に有すれども、誇らずして、其意に之を塵芥視する者は、眞に謙徳ある者なり。然れども誰か罪と過とを想起し、高ぶらずして之を記憶するも、其心は碎けずして、其智は此等のことを想起するるとき、驕傲なる思の高處より降る迄に至らざる間は、たとひこは賞讃すべしと雖も、其者を謙徳ある者とは名づけざるなり。何となれば、彼には驕傲なる思の猶存するありて、彼は未だ謙遜を得ず、反つて狡猾に之を自己に近づくるによる。ゆゑに我が言ひし如く賞讃すべしと雖も、謙遜は未だ彼に屬せず、彼はたゞ謙遜を願ふのみにして、謙遜は彼に有る無し。誰か己の思慮を以て謙徳の爲に原因を案じ出すの要あらざれども、すべてに全く且自然に勞せずして謙遜を得たる者は、全く謙徳ある者なり。彼はすべての人間と天性とに越ゆる或る大なる賜を自己に受けたれども、己を視ること罪人の如くし、何等の價値もあらずして、自分の目にて自分を輕んずる人の

如くす然れどもあらゆる靈性の與義に悟入し、至人間の能くし難き事をすべて確實に成就すると同時に、自から己を認めて何の價値もあらざる者と爲すなり。而して此事は狡猾を以てするにあらず、又強ふるに非ずして、其心中に於て此の如きなり。此の如き者となりて、かくの如く己を變化すること天性の如くなるは人に能ふべきか或は能はざるか。

終りに人が受る所の與義の力は人に此事を成就せしむるにすべての德行に於てして、人の勞を待たざるに疑を容るゝなけれ。是れ即福なる使徒等が火の形狀に於て受けたる能力なり。此能力の爲に救世主は彼等に誠命して言へり、上より能力を受るに至る迄は、イエエルサリムより離るゝなけれ。行實一の四と、此のイエエルサリムは是即德行にして、能力は即謙遜なり、而して上よりの能力は即撫恤者なり、別に之を解釋すれば、撫恤の神なり。此事につきては神の書に與義は謙遜なる者に啓示せらるると言へるも、亦此義を示す謙徳ある者は與義を表顯する此の啓示の神を其内部に受るを賜はる故に或る聖人は言へり、謙遜は神聖なる直覺を以て靈魂を成全すと。

終りに人は自分にて謙徳の尺度に達せりと其心に思ふを敢てするなけれ時として人に起る痛悔の一念により、或は人に流るゝ少許の涙により、或は人が天性に有じ又は盡力を以て占有したる一の或る善行によりて凡ての與義の充滿を成すものと悉くの德行の寶藏となるべきものを得るあらば、我言ふ是れ皆此の賜と共に少許の練習を以て得たりと思ふなけれ之に反して人は悉くの反對の靈に勝り、諸の道德の行爲中、顯然に行はざるものと未だ得ざるものとを、一も殘すあらずして敵の悉くの城砦に勝ち、之を従はしめて、其後此賜を受けたるを自から精神にて感じ、使徒の言ふ如く、神は我等の神と共に證す、ローマ八の十六といひ得るならば、是ぞ即謙遜の完全なる之を求め得たる者は福なり、何となれば彼はイエスキスの轍を毎時接吻して之を抱けばなり。

己がれどももし人は質問して、予は何を爲すべきか、如何して謙遜を得べきか、如何なる方法を以て謙遜を受るに堪ふる者となるべきか、視よ、予は自から己を強ひ之を得たりと窃に思ふや、視よ、之と反對なる思は予の心中に廻轉するを見る之によりて、今は失望に陥ると言ふならば、

此の質問者には左の答を與へらるべし、門徒は其師の如くなり、僕は其主人の如く

なりて足れりと言ふ是なり(マトフイ十の二十五)之を誠命して此の賜を授くる者の謙遜を得たる所以を見て彼に法るべし然らば之を得ん彼は言へり蓋此世の君來る彼は我に何をも有するなし(イオアン十四の三十)悉くの徳行の完全により謙遜を受くべきを見るか此の誠命を興へたる者に效はん彼は言へり(孤には穴あふ)天空の鳥には巢あり唯人の子には首を枕する處なし(マトフイ八の二十)然れども此を言ふはすべて萬姓諸族の中に成全成聖せられて充滿に達したる者等より榮せらるゝ者にして彼は彼を遣はしたる父及び聖神と共に今も何時も世々に至らん(マテ二)

第五十四 説教

問答各種

問 すべて慾を刺激する所のものに遠ざかるは宜しきか靈魂は戦を逃れて自ら安息を選ぶときは如此の逃避を以て靈魂の勝利と爲すべきか將た敗走なるか
答 簡短に之を答へん修道士には凡て惡慾を刺激する所のものに百方遠ざかる

こと肝要なり特に慾の源因を斷割し、維ひ最小の慾なりとも之を動作にみちびきて慾を成長せしむるものを自から斷割すること肝要なりもし我等の爲に心神の直覺に綱を立てらるゝや慾に抵抗して之と戦ふべき時期の到るあるときは笑談を以てせずして速に此を成すべし魔鬼が眞理其ものを惡なる誘惑に倒用するに拘はらず人は常に其意思を慾より背けて造作者が性中に賦與し給へる天然の善に之を向はしめざるべからずもし適當に之を言はば人はたゞ慾の煩瑣を避くべきのみならず其感覺をも避けて自から内部の人に没し彼處に靜止して心の葡萄園を耕し私にも又公にも稱する修道士の名と其行爲を一致せしめんこと肝要なり思ふに此の内部の人の近きに止まるを以て我等が中に居るハリストスに依頼する我等の希望を知識と全く合一せしむるに至らんげだし我等が智力は彼處に獨り閉靜に止まる時は慾と戦ふものは最早智力にはあらずして恩寵なるべくたゞ其時は慾其ものも彼に於て發動せざるべし

問 もし人が靈魂の潔淨の爲に爲す所あらんに他の人々は之を了解せずして其人の靈的行爲の爲に誘はるゝあらば他の人々の誘はるゝが爲に人は其神聖なる行爲より自から遠ざかるべきか或はこは見る者の爲には害ありといへども其目

的の爲に有益なるものを爲すべきか。

答 此事につきて言はんもし人は其智を淨むるが爲に有益なるものは何なりとも先の神父等より受けし如く正しく之を爲して此目的に達する即潔淨に達するを自から假定したれども他の之を知らざる者等は彼の此目的の爲に誘はるゝならば責は彼にあらすして誘はるゝ者にあり彼が節制し或は禁食し或は嚴重なる閉居を守りて其目的の爲に有益なる所のものを爲すは他の人々の誘はれんが爲にあらすして其智を淨めんが爲なりしかれども誘はるゝ者は彼の行爲の目的を知らざるにより彼を非難するならば是れ其者は自から怠慢に委して彼が己の爲に假定したる靈界の目的即其靈魂の潔淨を瞭解するに堪へざるにより實に責を受けん神聖なるパウロは彼等の事を記して言へり蓋十字架の教は滅ぶる者の爲には愚なり「コリント前一の十八」然らば今は如何に爲すべきや十字架の言は其言の能力を覺知せざる此等の人々の爲に愚とせらるゝによりパウロは黙して傳教せざるべきかさりながら視よ今も十字架の教はイウデヤ人の爲又エルリン人の爲に厭きとなり又誘ふなる之により彼等の誘はれざらんが爲に我等も眞理を黙すべきかしかれどもパウロはたゞに之を黙せざるのみならず大聲に呼で言へり

「我等に在りては我等の主イエスキリストの十字架の外に誇る所なし」ガラテヤ六の十四」十字架に於る此讚美を聖者の宣べられたるは他を誘はんが爲にあらずして傳ふる所の十字架の力の偉大なるによるゆゑに聖なる者よ汝も己の爲に神の前に假定して汝の良心が咎めざる目的と相照して其行爲を成すべし而して其の行爲は神の書と聖なる諸神父より受けし誠命とに依り之を試査すべしもし此等のものは汝を罪せずんば他の誘はるゝを恐るゝなかれけだし衆人を等しく信せしめ或は衆人の意に適合して奥密に神の爲に勞するを得る者は一人も之をあらざるべし。

嗚呼福なる者よ自己の全力を用ひ我が諸神父の進行したる正しき路により彼等が次第順序を経て漸々に昇りたる階級にしたがひて靈魂の潔淨に實に進行する修道士は福なるかな彼は睿智と患難を忍耐することにより高められて潔淨に近くに至るべく他の狡猾なる次第順序に依るにあらざるなり。靈魂の潔淨は我等が性の元始の賜なり怒より淨めらるゝなくんば靈魂は罪なる病より愈されずして犯罪の爲に失ひたる榮を得ざるなりもし誰か淨潔を賜はらば即心の健全を賜はらば其の智は實に靈的感覺を以て樂むを實際己れに受けん

とすけだし彼は神の子となり、ハリストスの兄弟となりて、其遭遇する善なるものをも悪なるものをも感ずるに暇あらざればなり。

願くは神は其旨を我等に認識せしめ給はんことを我等常に其旨を行ひて我等が主イエススハリストスの恩寵と仁慈に依り永遠の安息に達せんが爲なり悉くの光榮と尊敬と叩拜は彼に歸して今より永遠無窮の世に至らんアミン。

第五十五 説教

克肖なる父奇蹟者シメオンに與ふる書

聖なる者よ汝の書は單に形容せし文字には非ずして反て之により汝の我に對する愛を顯はし且證すること鏡を以てするが如し汝は予を想像せし如く自から之を書にもあらはして非常に予を愛する所以を實際に表し隨て其強き愛により予の爲に其量をも忘れたりけだし予が汝の成徳に書すべき所のものと我れ自己の救の爲に慮るや汝に問ひて其眞理を汝より確知すべかりしものを汝は大なる愛により先んじて予に書せり思ふに是れ哲學の工夫により成せるものにて此の精

微なる問題を予が前に提出して予の靈魂を深く沈没せる怠慢より覺醒するが爲ならん然れども汝が予の爲に量を忘れたる此愛により予も己の乏しきを忘る故に予が注意する所のものは予の之に堪へ得るや否やにあるに非ずして汝の祈禱の如何して遂げらるべきかにあひけだし予は己の爲に量を忘れて汝も其願の成らんことを祈禱により神に願ふ時は汝の祈禱により願ひしものは神を以て汝に與へらるゝこと其思なる役者に與へらるゝ如くならんことを疑なし

審中第一の問題は次の如し

問 主の誠命は盡く守らざるべからざるか或は此等の誠命を守らざる者の爲にも救はるべき方法ありや

答 此事は意ふに何人も問ふの必要あらざるべしけだし誠命は多しと雖も必ず守らざるべからざればなり然らずんば救世主は之を與ふるにも及ばざりしならん何となれば予は思ふ主宰は理由もなく又必要もあらざる餘計の事は二も言はざるべく又爲さるべきによる主宰が來りて生命を施す誠命を吾人に與へ之を以て吾人が愆に溺るゝ状態を洗滌する療法せなし給ふや其目的は靈魂を最初の犯罪の爲に生じたる敗壞より淨めて元始の状態に興復するにあり病める身體の

爲に療方ある如く慾に溺るゝ靈魂の爲に誠命あり誠命は罪なる靈魂を醫すが爲に慾に對して立定せられしものなることの明白なるは主が其門徒に明に告ぐる所の如し曰く我が誠を有ちて之を守る者は是れ即我を愛する者なり我を受する者は我が父に愛せられ我も彼を愛し且己を彼に顯さん且彼に來りて彼に同居を爲さんイオアン十四の二十一二十三又曰く爾等若し相愛せば世は之によりて爾等の我が門徒たるを知らんイオアン十三の三十五愛は心靈の康健の時求め得らるべくして誠命を守らざる靈魂は康健にあらざること明けし

誠命を守るは靈的なる愛に比すれば更に下しけだし長により或は未來の應報の爲に誠命を守れども愛に依るにあらざる者の多きが爲に主は愛に依り誠命を守らんことを多く勸誘し給ふはこれにより靈魂に光を與へん爲なり主は又更に言へり人々爾等の善き行を見て天に在す爾等の父を讚榮せん爲なりイオアン五の十六といへりしかれどもし誠命にして守らざるときは主の救へ給ひし善き行は必中に顯はるゝあたはざるべし主は又誠命は眞理を受する者の爲に重擔にあらざることを告げ給へりけだし言ふ凡そ勞苦する者及び重を任ぶ者は我は洗れ我爾等を安んせしめん蓋我が腕は易く我が任は輕ければなりイオアン十一

の二十八三十三又主は自から悉くの誠命を我等勉勵して守らざるべからざることをも誠命し給へり曰く此の至小なき誠の一を毀ち且是の如く人に救へし者は天國に於て至小なき者と稱へられんイオアン五の十九我等が救の爲に立定せられたる此のすべての誠命の後に於て悉くの誠命を守るを要せずは言ふに能はざるなりもし之を守らざるは靈魂其ものは潔淨なるものとなる能はざるべし主が誠命を與へ給ひしは慾と罪とに陥りしより淨めん爲に療法として與へ給ひしなり

誠命を破りしにより吾人に敗壞を輸入したることは汝の知る所なりされは誠命を守るにより健康の再び回復せらるゝことも最早此により分明なり之に反して誠命を行ふなくんば先づ彼の心靈の淨潔に引入るゝ路に由り行くに至る迄は心靈の洗淨を願ふことも望むことも我等は爲すべきにあらず誠命を行ふなきも神は恩寵により心靈の洗淨を吾人に賜はんと言ふなかれ是れ主の制裁にして教會もかくの如きを願ふべきを我等に命せざるなりイウデア人はバビロンよりイエルサレムに歸るに當り天然に開通せる路を進行し此の如くして己が聖域に達し主の奇蹟を見たりされどイエゼキイアは天然以上なる黙示の勸により攝取せ

られてイエザサリムに到着し神妙なる黙示により將來復興の親見者とはなりぬ。心霊の淨潔のことに關しても此と同きものあり。或者等は其踏破せる正しき路に由り多難なる生活の間に於て誠命を守りしにより其血を以て心霊の淨潔に達するも之と相反して他者は恩賜に依りても之を與へらる。恩寵により吾人に賜はるべき淨潔を祈禱により願ふことも又誠命を行ひて送るべき生涯を辭すること許されざるは奇といふべし。けだし如何にして永生を嗣ぐべきか。ルカ十の二十五と問ひたる富者に主は明に告げて言へり誠を守るべしと然るに富者が重ねて何の誠なるかと問ふや先づ彼に悪行を止むべきを命じて其後天然の誠命を記憶せしめたり。然るに更にいよく之を確知せんことを求むるや告げて曰く完全ならんと欲せば汝の所有を售りて貧者に施し己の十字架を執り來りて我に従へ。マテ九の二十一といへり是れ言意はすべて己れに所有するもの爲に死して其後我に於て生きよ。慾の舊世界を脱して其後靈の新世界に入れ人間の方略を擧謀とに出づる知識を脱ぎ棄て、其後眞理の單純なる知識を衣よとなり。けだし主は己の十字架を擔ふと言ひて之によりすべて世にあるもの爲に死すべきを人に教へ給へり。マテ九の十六の二十四而して人が自から舊人を殺し或は慾を殺す

時は告げて曰へり來りて我に従へ。舊人がハリストスの路により行く能はざることは福なるパウルの言ひし如し。曰く血肉は神の國を嗣ぐ能はず朽つる者は朽もざる者を嗣かざらん。コリント前十五の五十一又言ふ慾の中に朽つる舊き人を脱げ其時は人を造りし者に似たる知識を以て新しき者を衣るを得ん。エフス四の十二二十三又言ふ肉の事を念ふは神に對して仇なり。神の律法に服せず且服する能はず。けだし肉に居る者は肉に屬するものを念ひ靈に屬する念を以て神の悦を爲す能はず。マロ八の七八聖なる者よ汝は心の潔淨と汝の所謂靈に屬する念を愛するならば主宰の誠命に就くこと我等の主宰が命じ給ひし如くすべし。曰く生命に入るを愛せば誠を守れ。マテ九の十九の十七之を守るは之を與へし者を愛するによるべく畏懼により或は報賞の爲には非ざるべし。けだし義中に隠る樂を味ふは義を行ふ時にあるに非ずして義を愛する情の我等が心を蝕する時にあり。又罪人となるは罪を犯す時にあるに非ずして罪を嫌はずして悔いざる時にあり。されば昔も今も人中誰か誠命を守らずして心の淨潔に達し靈的直覺を賜はりし者ありとは予は言はざるべし。之に反して予は思ふ誠命を守らず福なる使徒等の跡を追ふて行かざる者は聖なる者と稱せらるゝにも當らずと。

汝が論及する所の福なるツシリイと福なるグリゴリイが野を愛する者となり、教會の柱石となり、光となりて黙想を讚美し、黙想に達したるは、誠命を行ふを練習せざる時にありしに非ずして、彼等は最初より世に居りて社會に住する者の守らざるべからざる誠命を守り、其後靈魂の潔淨に達して、靈的直覺を賜はりぬ、彼等が城中に居りし時は、旅者を受け、病者を養ひ、裸者に衣せ、勞する者の足を洗ひ、人が彼等を強て一里を行かしめば、之と偕に二里を行きしを、マトフイ五の四十一手は實に保證するなり、而して社會の生活に要用なる誠命を守りて、其智は元始の堅固と神聖にして、奥妙なる直覺を感じ、始むるや、其時彼等はいそぎ出で、野間の黙想に達きて、此時より其内部の人と共に止まりぬ、ゆゑに彼等は恩寵により召され、マツトスの教會の牧者となるに至るまでは、思辨者となりて、靈的直覺を守りぬ、汝が論述せる大ツシリイは、時により共住生活を讚美したれど、時により遁世を讚美せしことに關しては、予按ずるに、眞實勉勵する者はおのづから其力に應じ、目から豫想したる差別と目的とにより、二の方法を以て己れに益を求むるを得べし、付たし、衆人と共住するは、時により有力者の爲に益あれども、時により劣弱者の爲にも益あり、野に於るも、之と同様なるべし、衆人共住は、心靈の健全に達せし者と、智が靈

を以て、鑿解せられし者及び人間の生計の爲に己を殺せし者の爲には、もし其行を節制するならば、害とならざるなり、而して彼は神を以て此事に召されたるにより、たゞに自から益をうくるのみならず、他の神父等の名により、他の人々をも益せん、しかれども、誠命の乳に養はれていよ、成長せんを要する劣弱者の爲にも、衆人共住は、同く有益にして、學習し、啓發し、試惑の爲に苦み、倒れて又往々起き、心靈の健康を得るに至る迄は、有益なるなり、乳汁の流れに養はれざる嬰兒あるなく、誠命の乳に養はれずして、上達し、慾に克ちて、潔淨を賜はる一の修道士も、あらざりき、野も之と同じ、我等が己に言ひし如く、或時は弱くして、遁逃により、救はるゝ者の爲に、益あれども、或時は有力なる者の爲にも、益あり、前者の爲に益あるは、彼等慾念を燃し、而之を成長せしむる爲に、烟となるべきもの、備はらざるが爲にして、有力なる者の爲に益あるは、彼等慾を養ふ所のものに、圍まれて、悪者の戰を逆へんとする時にあり、實に汝の言ひし如く、野は慾を眠らしむるなり、しかれども、人に要求する所のものは、たゞ此の一つにあるに非ず、即慾を眠らしむるのみにあるに非ずして、之を根絶するにあり、即我等に向つて、頑固に逆ふべき之を克服するにあるなり、眠れる慾は、もし之を働かしむる原因に會ふならば、直に惹起せられん、

然れども汝は言はん慾を眠らしむるは獨り野のみにあらざるを汝は如何して知るが記せよ病中或は大なる不快の時には慾は我等を攻撃するの力あらざることをして而してたゞに此のみにあらず彼等は互に地位を譲るときは互に眠らしむることとも稀なりとせずけだし虚榮の慾は其地位を放蕩の慾に譲り放蕩の慾は又好名の慾を鎮むるなりと野を願ふはたゞに慾を眠らしむるが爲のみにあらず外誘に屬するもの、缺乏してあらゆるものより遠ざかるにより我等に智を増さん爲にも、ハリストスに於る靈的内部の人の我等に於て新にせられん爲にも何れの時にも我等は自から己を省察する者とならん爲にも我等の智が毎時儼醒して己を保護し其希望の記憶を奪はれざらん爲にも之を願ふなり。

汝の第一問に對してはもし此事の爲に必要なの起るあらんも意ふに之を以て充分なるべし此後我等は第二問につきて述ぶべし。

其問は左の如し

問 我等が主は我等を天の父の大徳に肖せしめん爲に我等に憐憫を命せり然るに修道士は憐憫よりも黙想を尙ふは何故か。

答 視よ此に對する答は次の如し汝が此の大なる生涯即黙想のことを研究する

に例に標準とを福音經により顯はせるは善し我等は憐憫の事を論究せん然れども或る餘計なるもの、如く之を無視することを力めざらん主が我等を天の父に肖せしめん爲に憐憫を命じたるは憐憫は其者を神に近づかしむるによるゆゑに我等修道士たる者は憐憫を除外せずして然も出來るだけ配慮と擾亂とより遠ざかることを盡力しつゝ黙想を尊奉するは其時我等と遭遇する緊要の事に反對せんことを欲するにはあらず反つて黙想に意を致すは神を思ふに専心し之により潔淨を擾亂の後大に自から回復して神に近づくを得んが爲なりもし時として兄弟に何か欠くべからざる緊要の事の起るありて我等に請求するときは此を等閑にすべからずゆゑに不斷己を強ひすべし靈智ある性に對して何の時も内部に於て憐憫なる者となるべしけだし主の教は我等をかくの如く勸誘し我等が黙想の特質も此に在りて或る空虚なるものにあるに非るなり我等はたゞに此の内部の憐憫を守るを要するのみならず事情と必要が助を請ふある時は其愛を公然とあらはすことをも等閑にすべからざるなり況や黙想者は己を完全なる黙想に一定して何人にも遇はざらんことをさへ定めたるには非ずして己の爲に黙想を二週間或は七週間指定する者の規則に従ふ時に於てをやけだしかくの如き者は規則を

以て指定せられたる時の間にも、近者に対する憐憫の行爲を止めて此の時の充つるを待つべからず、たゞ極めて無情なる者と無慈悲なる者は虚飾的及び外見的に黙想を守らん、我等は知る近者に對して愛なくんば、智は神聖なる談話と愛とを以て照さるゝ能はざるぞ。

今日賢明なる修道士にして食と衣とを己れに所有するも、近者の飢及且裸體なるを見て其有する所のものを彼に與へず、幾分か貯ふる者之ありや、或は誰か同一の肉體を有する人が病に疲れ、瀕弱の爲に苦みて看護に必要を有するを見るも、黙想を愛するにより、閉戸の規則を近者を愛するよりも更に重んずる者之ありや、若しかるの如き事のあらざる時は、我等は近者に對するの愛と慈悲とを心に守らん、但し、たゞ事の切近せる場合に於て神は我等より其愛を實地に行ひて之を表はさんことを要求す、故にもし己れに何物をも有せざれば、貧者の爲に己を憂慮し、擲亂に投ずるを我等に許されずして、何物をか有するならば、此事を我等より要求せらるゝこと明なり、且我等が受る所の生活の種類により、人々と共に住するに其集會は關係するに遠ざかるならば、我等は己の庵と修道的隱遁の居所とを棄て、世に徘徊し病者を訪問して、此の如き事に時を送るに己を委すべからず、けだ

しかくの如くならば、高きより卑きに遷るの嫌あること明なり、然れども誰か多人の社會に居り、其近きに人々ありて、彼等と共に止る所の其地に於て健康或は疾病の時に當り、他の人々の勞により安んせしめらるゝならば、自らも同く之を爲さるべからずして、其假僞なる黙想を外貌にあらはすべからず、是れ自己にはすべて慰安を他より要求すれども、自己と同一の形貌を有する肉體の子の困迫なる境遇にあるを見るに、確言すれば棄てられて苦む所のハリストスを見るとき、之に遠ざかり且は之より隠るゝことを爲さざらん爲なり、凡てかくの如き者は無慈悲なりとす。

アライダのイオアンとアルセニイとを予に記憶せしむるなかれ、彼等の中己をかくの如き務めに適用せし者ありやといふなかれ、汝はかくの如き人々の何の行爲にも近寄らざるなり、げだし汝は如何なる慰安よりも遠ざかり、人々と交るよりも遠ざかること、彼等が遠ざかりし如くならば、主はかくの如き務めを願みざるべきを汝にも命せん、しかれどももし汝は彼等の完全より遠ざかりて、如何なる時にも肉體の勞に居り、人々と與に交るならば、何故汝は誠命己の力に準じて、汝が守らざるべからざるを、等閑にし、聖者の大なる生涯を送ると詐稱して、其に近づくことを

もなきやうか。
 じかれども予は兄弟を等閑視する者の爲に證責となるべき聖大マカリイの行狀を記憶せざる程等閑には非ざるなりマカリイ一日行きて病める一兄弟を訪ひけるが大人は病者に何か欲するなきや否やを問ひけるに病者は答へて言へり軟かなる餅少許を欲すと當時すべての修道士は大抵一年に一度自から餅を焼けり是れ其土地の風なりき福なる此大人は最早齡九十歳なりしも直ちに起ちてスキトよりアレキサンドリヤに至り其囊中に携へたる乾餅を以て軟なる餅に換へ之を以て兄弟に供したりき。

然るにすべて當時の修道者中最老練にして沈黙と冥想とを大に重んじたる人あり父アカフンといひけるが彼は大マカリイの如くにして更に大なる事を爲しぬ此の奇異なる人は大なる難賣の時に當り自己の製作品を賣らん爲に市場に至りけるが一の病臥せる旅人を見たり彼は其病者の爲に家を賃して彼と共に居り手づから作工し得たる所のものを以て彼の爲に費し病者の健康を復するに至る迄六ヶ月間看護を爲したりしとぞさて此のアガフンは彼の事を傳ふる如し言へり「余は癩者を見て彼に自己の體を與へ己れに彼の體を取らんことを願ふ」と是れぞ

即完全の愛なる。

至愛者よ神を畏るゝ者は誠命を守らんことを好願して之が爲に配慮すゆゑに其求むる所のものを己の手に得らるべきを實際に認むるときは之が爲に危難にも服せん生命の施與者は誠命の全きを他の悉くの誠命を包容する二の誠命に聯結して其中に籠めたり即神を愛すると又神の造物を愛する即神の像を愛するとの二誠に籠めたり而して第一者は靈的直覺の目的を充たしむれども第二者は直覺と實行とを共に充たしむるなりげだし神の性は純然蕪雜不可見にして何物にも必要を有せざるは固よりにして自覺も其深思冥想に際しては身體上の働にも如何なる協力にも想像の粗きにも必要を有せず其働は單純にして崇拜せらるべき源因者の純然にして肉體上の感覺に超越するに準じ智力の唯一の部分に顯はるゝなり之に反して第二の誠命即愛人なるものは性の二様なるに依り智の作用に於る慮りも二倍ならんを要す即自覺により見えすして行はるゝものは肉體を以ても同様之を行はんことを願ひ實行により遂ぐる所の誠命は自覺を以ても遂げんことを要するなり。

人は二の部分より成る即靈魂と肉體とより成るかくの如く人に於るすべてのも

のも其成分の二重なるに準じ、二様の虚を要求するなり。けだし實行は何處に於ても直覺に先だつにより、卑下なるものを先づ實地に行はずんば、何人も此の高上なるものゝ範圍に昇り達する能はざるべし。されば今日近者に對する愛を求め得ることに關しても、もし其行爲に機會を興ふる時と處とに應じ力に従ひて身體を以て行ふを得べき部分の殘るあるときは、靈魂を以て之に進歩せんと敢て言ふ者は一人もあらざらん。けだし之を實行するにより直覺的なる愛の人に存することとは確信すべきものとなりて之を知ることを得べし。ゆゑに此事に於て出來る丈信誠にして眞實なるを得る時は何物とも比する能はざる純然なる概念により高尚神聖なる直覺の大なる範圍に到り達すべき力を靈魂に興へらるゝなり。之と相反して人は近者に對する愛を見ゆる行爲により身體を以て遂ぐるを得べきなき處に於ては、近者に對する我等が愛は、たゞ意思にて行はるゝものを以て神の前に充分なり。矧や閉戸的默想の行爲と之に進歩することは其の練習に於て充分なるものとて存するに於てをや。

しかれどももし我等は默想のすべての部分に於て缺る所あらば、之に誠命を合併して、其不足を補はん。即官能的實行を合併して之を補はん。而して此は我等が生命の平安を補ふものなるにより、我等の身體を苦しめて以て之を遂行せん。もし我等は遁世の名に依り徒らに勞するならば、我等の自由は己を肉に従はしむる爲の口實と認められん。けだしすべて人々と交際をなさずして思を全く神に没する者は、もし一切の爲に死して之に遠ざかるならば、人々に事へて其意を悦ばすべきことを彼に命せられざるは明なり。さりながら七週間或は一週間默想の規則を守るも其規則を行ひし後は、人々と相會し共に相交り彼等と共に己を慰安して愛に居る兄弟を眷みず却て之を以て週間の規則を嚴守すと思ふならば、其者は無慈悲にして且殘忍なり。彼は慈悲の缺乏により、自尊により、又謬想により己を屈下して此の如きの行爲に關係するをなさざることは自から明白なり。

病者を輕んずる者は光を見ざらん。哀む者より己が面を背ける者の爲に日は暗黒ならん。而して苦む者の聲を輕んずる者は子は盲目にして己の家を手鏡にて捜さん。

己の無智を以て默想の大なる名を辱めざらん。けだしすべての行爲に時と處と差別とあるべし。其時はすべて爲す所の事の神意に適するや否やは神に知られん。然れども之無くんばすべて完全の尺度を心懸る者の爲す所は無益なり。己の弱さを

他の慰問せんことを待つ者は己を謙るべく、近者が誘惑にかゝる時は彼と偕に勞すべし、何等の自尊にも邪なる奸計にも遠ざかりて默想的行爲を喜んで遂げん爲なり、練達なる聖者の一人の言へるあり、修道士を驕傲の魔鬼より救ひ淫慾の燃ゆるに際して貞潔を守るに助くるを得るは彼の病床に横たはりて肉體の患に胃さるゝ者を訪問するに如くはなし。

謙遜の必要の爲に如此の思慮あることを合するならば、天使的默想の行爲は大なり、けだし何時窃去られ又は奪ひ去らるゝは自からも知らざればなり、兄弟よ、予が此事を言ふは我等默想の行爲を等閑にして之を輕んせんが爲にはあらず、けだし我等は何處にも默想を勸説し、今も其言に矛盾すとは自から認めざるなり、何人も予が言ふ所の中より或ものを分ち取るなかれ、又引抜くなかれ、他のすべてのものを側に置き、たゞ此一事をのみ愚にして、其手中に留むるなかれ、多くの場所にて予は左の勸諭を興へたりしことを記憶す、即何人にか己の庵中に於て全く閑散なる者となる場合があるならば、之により不意に吾人を捉ふる劣弱の奈何ともすべし、きなきにより庵中より全く出でんことを思ひ、外界の爲す所のものを庵中の爲す所のものより愈れりと思惟すべからずといひしことありき、然れども予が全く出

づといひしは左の事には非ず、たとへば我等は時として幾週間の間か外に出づるありて、其間に近者の安然と活業とを求めざるを得ざる緊要の事に際會するならば、汝も此を以て無用と名づけ無益と認むるべし、之に反しもし誰か己を以て完全なる者と思ひ、神の前に止まるとすべし、見ゆるものより遠ざかることを以て此世に居る悉くの者より上なりと思ふならば、此の誠らしき口實に依るも、汝は之をも肯はざるならん、神の教導の下に行はるゝ思慮ある行爲は大なり、神は其恵みにより我等に神の言を遂行するを賜はらん、曰く、人の汝等に行はんと欲する事は爾等も是の如く之を人に行へ、ルカ六の三十二、彼に光榮と尊敬は歸す、アミン。

又汝は其書にあらはして言へり、神を萬物の上に愛さんと願ふ、修道士は己が靈魂の潔淨のこころを慮らざるを得ずとも、し之が爲に充分の力を有するならば、汝の言ふ所、太た好ししかれども、汝は又いふ、靈魂は未だ慾に克たざるにより、祈禱に於て勇氣を有せずと、これにより予は無知と雖、彼と此との矛盾は予の目前に顯はるゝなり、けだし靈魂は慾に克たずんば、如何して潔淨のこころを慮るを得ん、けだし神靈なる眞實の規則は、靈魂が未だ慾に克たざるときは、此事を彼に命ぜざるにより、是れ汝は眞實より上なるものを切願するを示す、けだし人の願ふ所のものにより愛

する所のものを認知し得べきには非ずして愛する所のものにより願ふ所のものを推知し得るなり(人が愛さざる所のものは願ふこともせざるなり)慾は潔淨の面前に閉ざられし門なりもし人は此の閉ざられし門を開かずんば心の無垢潔白なる範圍に入らざるべし靈魂は祈禱の時に勇氣を有せずと汝の言ふは正しけだし勇氣は慾より上なるのみならず潔淨よりも上なり此の接續の順序の如何なるを予は汝に告げん忍耐と己を強るを以て潔淨の爲に慾と戦ふことは是なりゆゑにもし靈魂は慾に克つならば潔淨は求め得らるべくして眞の潔淨は祈禱の時心に勇氣を得しむるなり

今此の論及する心靈の潔淨を祈禱に於て願ひつゝ神の書と我等の諸神父が我等に命ずる所のものを神に願ふならば我等が願は驕傲自尊の行となるべくして何故修道士は通世的生活に入るかとの責を免れざるべしさりながら聖者よ予は思ふ子は其父を疑ひ左の如き言を以て父に願ひ我に術を教へ給へ或は我に或物を與へ給へと言はざらんかくの如く推量計較して神に願ひ我に是是のものを與へ給へと言ふは修道士に不適當なりけだし神の照管の我等に於るは父の子に於るより超越することは汝の知る所なり故に或は思を以て犯せると或は實事を以て

犯せるとに論なく我等の意志以外に犯せる罪の源因の爲には謙遜して之が爲に涕泣し傷める心情により税吏の言を以て言ふは要するに我等に適當なり曰く神よ我れ罪人を矜み給へ(ルカ十八の十三)而して主の教へ給ひし所を陰にも陽にも行ひて言ふべし曰く凡そ汝等命せられし事を行ひし時には謂へ我等は無益の僕なり行ふべき事を行ひしのみ(ルカ十七の十)是れ汝は無益のものにして憐愍に必要を有するを汝の良心も汝の爲に證せんが爲なり慾に克つに謙遜を以てして輕侮を以てせざるべきは其閉ざられし心の門を開くものは行にあるに非ずして碎けたる心情と靈魂の謙遜となることは汝自からも之を知らんけだし病者は先づ謙遜して其病の本復の心を慮るべくして其後最早王となることを切に願はん何となれば淨潔と心靈の康健は靈魂の國なるによる此の靈魂の國は如何なるか病者は父に告て我を王と爲し給へといはず却て先づ其病の爲に慮るべくして全く健康になりし後は其父の國は自然に自己の國となるらん罪人もかくの如く悔改をさすべし己が靈魂の健康をうけつゝ父と共に潔淨なる性の範圍に入りて其父の榮により王たらん我等は想起す聖使徒パウロは自己の罪を書して己の靈魂を最下劣等の位置に立

つることを言ふあり曰くハリストスイイスは罪人を救はん爲に世に來れり罪人の中我第一なり然れども我が矜恤を蒙りしは先づ其全き寛忍を我にあらはしたる爲なり「テイモフイ前一の十五十六」けだし我は昔勝る者窘逐する者侮る者たりしも知らずして信せざるに由り之を行ひし故矜恤を蒙りたり「同上十三」パウルの此事を言ひしは何の時なりしか如何なる時に於てしたるか大なる苦行と能力を充ち満てる行動の後なりきハリストスの福音に依り全世界に宣傳する傳道の後なりきイウヂヤ人及び異教人より種々なる患難をうけて屢々死に瀕したる後なりき而して彼は又其昔日の行動をすべて回顧し己を潔淨に達したる者と爲さざるのみならず當然に己を認めて門徒と爲すことをさへ思はざりきけだし「ヘリ」我は使徒と名づけらるゝに堪へずハリストスの教會を窺せし故なり「コリント前十五の九」而してすべての人に愈り愆に對して勝を奏せし時は言へり曰く「我の體を制して之に服せしむ他人を教へて自から棄てらるゝ者とならざらん爲なり」コリント前九の二十七「さりながら他の處に於て使徒は己の大なることをも記すと言ふならば此事に關しては使徒は自から汝を説得せんけだし言はん此を爲せるは好んで爲したるにあらず自己の爲にあらずして傳道の爲なりといはん而

して信者を益する爲に此事を告白するときは此の如き自誇の爲に何等の理智も奪はれたる者の如くに己を想像し呼んで證言して言へり「汝等我に此を爲さしめたり」とコリント後十二の十一「又言ふ主に循ひて言ふに非ず乃ち無智者の如く誇りて言ふなり」とコリント後十一の十七「視よ聖パウルは此の至當信實なる模範を我等に與へたるを我等終に之を守りて此事の爲に熱心せんもし神が遣はさず又賜はざる時は高尚なるものを神に求むるを辭せん何となれば神に事ふるが爲に選ばるゝ器を神は知り給へばなりけだし願なるパウルは其後も靈魂の爲に國を願はずして言へり「ハリストスより絶たれんことをも或は願ふなり」と「ロマ九の三」されば如何して我等は誠命を守らず慾に克たず負を償はずして神に知らるゝに先だち靈魂の爲に國を願ふを敢てすべけんや
 ゆるに聖なる者よ汝に願ふ此事を汝の思にも入るゝなかれ汝の爲に何事の起るありともすべての爲に先づ忍耐を求めよ而して我等に起るものゝ爲にも我等が思の爲にも大なる謙遜と心の傷みを以て己の罪の赦されんことゝ心の謙遜とを願はん
 一の聖者あり書して言へり己を罪人と思はざる者の祈禱は主に受けられずとも

し或る神父等は心靈の潔淨の如何なるも健康の如何なるも無慾の如何なるもを記せりと言はんか之を記せるは我等をして時に先だち要望して強て之を求めしめんが爲にあらすけだし録して言へり神の國は顯に來らずとルカ十七の二十もし何人にか此の如き望願のあらはるゝあらばこれ彼等は最早己の爲に驕傲と墜を待たるなり之に反して我等は悔改の行爲と神に悦ばるゝ生涯とを以て心の範圍を齊整せんもし心の國が潔淨にして汚されずんば主に屬する者はおのづから來らん神の高上なる賜を顯然として求むるは神の教會の喜みせざる所にして此事を許容したる者は己の爲に驕傲と墜を待たりき其然りパウエルと雖も患難を以て誇りハリストスの苦みに與かるを以て神の高上なる賜と思ふならば如何ぞ我等は神の高上なる賜を強て求むべけんや

又汝は其書に記して言へり汝の靈魂は神を愛するを愛し始めたり然れども愛するこの大願を有するに拘はらず汝は愛に達せずといふ然のみならず汝の爲に野の遁世生活は大に願はしといふ此を以て汝は心の潔淨の始を置けるを證し神を念ふ記憶が奮熱して汝の心中に燃え始めたるを示せりもし眞實ならば是れ大事件なりしかれども汝が此を書せんことを予は願はざるべし何となれば是れ一

の階級に屬するにあらざればなりもし疑問の爲に此事を言ひしならば其疑問は亦他の秩序を要求せりけだし其靈魂が慾に克たざるにより祈禱に於て勇氣を有せずと言ふ者は其靈魂が神を愛するを愛し始めたりと敢て言ふべきかもし靈魂は慾に克たずんば神聖なる愛の靈中に起り之に従ひ奧密に進行して遁世生活に至るの方法ある無し汝は言へり汝の靈は慾に克たずして神を愛するを愛し始めたりと是れ秩序無きなり慾に克たずして神を愛するを愛し始めたりと言ふ者は我れ其何を言ふを知らず

しかれども汝は言はん余は愛すとは言はざりき愛を愛し始めたりといへりどもし靈魂が潔淨に達せずんば此は位置を有せざるなりもしたゞ言論の爲に之を言はんを欲するならば汝獨り言ふに非ずすべての人も神を愛するを願ふと言はんたゞハリステイアイン等のみならず不正に神を拜する者等も之を言ふべくしてすべての人は此言を發すること自己固有の言の如くせん然れども此の如きの言を發するに當てはたゞ舌の動くのみにて心は何を言ふを覺知せざるなり病者にして己が病めることをさへ知らざる者多し惡習は靈魂の病にして迷謬は眞實を失ふなり人類中此病に罹るも己を布告して健全なる者と爲し多くの人々より賞

識を博する者甚だ多し。もし靈魂は悪習を愈されずして靈的健康により生るゝ爲に會て造られたる天然の健康に導かれずんば、人は超性的なる屬神の賜を願ふあたはざるべし。何となれば靈魂は慾の病に苦む間は其の感覺を以て靈的健康なるものを覺知せざるべく、又之を願ふことを能せざるべくして、たゞ耳に聞くにより且は書によりて之を願ふのみなればなり。終に予は上文にも當然に言へり、完全を願ふ者はすべて之の誠命を守らざるべからずと、何となれば誠命の神秘なる作用は心霊の力を醫せばなり。而して其作用は如何しても單純にあらざらん、けだし録して言へり、血を流すに非れば救なし、エウレイ九の二十三さりながら我等の性は先づハリストスの人となれるにより改新を受け、ハリストスの苦と死とに分を有し、而して其後血を流して之を新にしたるに依り、我等が性は新にせられ、神聖なるものとせられて、新なる完全の誠命を受けるに堪ふるものとなりぬ。之に反しても、此誠命を人類に與へられしは血を流す以前にあり、我等が性の新にせられ、神聖なるものさせらるゝ以前にありしならば、恐らくは此の新なる誠命も昔の誠命の如く、たゞ心中に悪習を截断するのみにて、悪習の根を心中に殄滅することは能はざりしならん。今は然らず、靈魂が守る所の神秘なる作用と新にして靈的健康なる誠命に隨行

せし者等は敬神に目にしつゝ、靈魂を新にし且之を聖にして、其悉くの部分を奥密に醫するなり。けだし各誠命が慾を心中に隠然として愈すことの如何なるは衆人の爲に明にして、其効力は愈す者にも愈さるゝ者にも切に感ずること血漏の跡に之ありし如くなればなり。

至愛者よ、もし靈魂の慾に染みたる部分が愈されず、新にせられず、奥密に聖にせられずして、靈的健康を以て結付けられずんば、靈魂は健康を得ざるべく、受造物に起る所のものゝ哀ましむるを免れて之より自由を得る能はざるは汝の知る所なり。而して此治療は恩寵により成るを得るは福なる使徒等に之ありし如くなるべし。何となれば彼等は信仰を以てハリストスの愛により全うせられたるによりてなり。しかれども時として靈魂は律法に依り健全を求め得ることあり、けだし誠命の作用と眞實なる生涯の難業苦行によりて慾に克ちし者は、知るべし、彼は律法に依り心霊の健康を求め得たることゝ、此世が具體化するものゝ外に斷乳されしことゝ、其従前の品性を己れに斷絶して靈的健康に再生せらるゝこと、元始の如くなりしことゝ、恩寵により内部の人を理解し得たる者の如くなれることゝ、靈の範圍にあらはれて純然無雜なる新なる世界が彼を受けたりしことを知るべし。

しかれども智が新にせられて心も聖にせらるゝ時はすべて彼に起る所の概念は其入る所の世界の性に準じて喚起せられん先づ神聖なるものに對する愛を喚起せらるべくして彼は天使と親與すると靈的知識の奧秘を發見することを渴望せん而して其智は受造物を識る靈的知識を覺感すべく聖三者の奧義を洞觀すると我等の爲に崇拜せらるゝ攝理の奧義を洞觀する直覺力は彼に照り始めて其後未來の望は知識と全く合一するに至らん

終に予が汝に書したるものにより自己の性狀を理會すべしもし靈魂は慾の範圍に閉さるゝも神を眞實に愛し始むるを得るならば更に靈界の奧義を質問して之を探知するの必要あらざるべし之に反して慾の管下にあるときは學習と知識とは益を生せずして潔淨の面前を閉されたる門を開くが爲には不充分なること明なりされどもし靈魂より慾を除き去るならば智は光り輝き性の潔淨なる位置に立てられて疑問に必用を有せざるべし何となれば其位置に於て發見せらるゝ幸福を明に見んとすればなりけだし我等の外部の官能が觸るゝ所の自然と事物とを感ずるは學習と疑問とによるに非ずして各官能は其遇ふ所のものを疑問の助を借らず自然に感ずるなりけだし感ずる者と感せらるゝ者との間を媒介する效

はあらず盲者には日月の榮光の事や星の集合の事や貴重なる寶玉の晃々光り輝くことを幾ばく言ふといへども其の有る所の美を受けて之を判断し之を想像するはたゞ其名稱に依るのみにて其知識と断定とは直視して得る所の愉快を去ること遠しかくの如く靈的直覺のことに於ても之と同様に想ふべしけだし靈の神妙なる奧秘を洞觀する智力はもし其性の康健によりハリストスの光榮を充分に直覺するならば質問せず學習せずしてたゞハリストスを信じ且望むの切なるに準じ意志の自由を超えて新世界の奧秘を樂まん福なるパウルの書する如し曰く人もし之を見ば豈猶望まんや忍耐して待つべしと(ローマ八の二十四二十五)終に我等は之を待望し獨り濼泊にして我等が内部の人と共に居り思念の印すること何等の複雑なるものを看望することもあらざる處に居らんこと肝要なり何となれば智は其看望する所のものより形象をうくればなり世を看望する時は其流轉する形象の變化と合し其數中に於て彼等より形象と同形とを己れにうくるなりけだし此等の形象は其許多なるに準じ其變化の異なるに隨ひ思念を喚起すべくして思念が喚起せらるゝときは之を智力に印せらるゝなりしかれどもし智は内部の人に透徹して彼處には形狀の變化となるべき何等のものも無

しかれども智が新にせられて心も聖にせらるゝ時はすべて彼に起る所の概念は其入る所の世界の性に準じて喚起せられん先づ神聖なるものに對する愛を喚起せらるべくして彼は天使と親與すると靈的知識の奧秘を發見することを渴望せん而して其智は受造物を識る靈的知識を覺感すべく聖三者の奧義を洞觀すると我等の爲に崇拜せらるゝ攝理の奧義を洞觀する直覺力は彼に照り始めて其後未來の望は知識と全く合一するに至らん。

終に予が汝に書したるものにより自己の性状を理會すべしもし靈魂は慾の範圍に閉ざるゝも神を眞實に愛し始むるを得るならば更に靈界の奧義を質問して之を探知するの必要あらざるべし之に反して慾の管下にあるときは學習と知識とは益を生せずして潔淨の面前を閉ざれたる門を開くが爲には不充分なること明なりされどもし靈魂より慾を除き去るならば智は光り輝き性の潔淨なる位置に立てられて疑問に必用を有せざるべし何となれば其位置に於て發見せらるゝ幸福を明に見んとすればなりけだし我等の外部の官能が觸るゝ所の自然と事物とを感ずるは學習と疑問とによるに非ずして各官能は其遇ふ所のものを疑問の助けを借らず自然に感ずるなりけだし感ずる者と感せらるゝ者との間を媒介する教

はあらず智者には日月の榮光の事や星の集合の事や貴重なる寶玉の異々光り輝くことを幾ばく言ふといへども其の有る所の美を受けて之を判斷し之を想像するはたゞ其名稱に依るのみにて其知識と斷定とは直視して得る所の愉快を去ること遠しかくの如く靈的直覺のことに於ても之と同様に想ふべしけだし靈の神妙なる奧秘を洞觀する智力はもし其性の康健によりハリストスの光榮を充分に直覺するならば質問せず學習せずしてたゞハリストスを信じ且望むの切なるに準じ意志の自由を超えて新世界の奧秘を樂まん福なるパウルの書する如し白く人もし之を見ば豈猶望まんや忍耐して待つべしと羅馬八の二十四二十五節終に我等は之を待望し獨り滄泊にして我等が内部の人と共に居り思念の印すること何等の複雑なるものを看望することもあらざる處に居らんこと肝要なり何となれば智は其看望する所のものより形象をうくればなり世を看望する時は其流轉する形象の變化と合し其數中に於て彼等より形象と同形とを己れにうくるなりけだし此等の形象は其許多なるに準じ其變化の異なるに隨ひ思念を喚起すべくして思念が喚起せらるゝときは之を智力に印せらるゝなりしかれどもし智は内部の人に透徹して彼處には形狀の變化となるべき何等のものもあ

く、又其合成せられたるものが他の之と異なるものを以て合成せられたる形象により別たる、ことあるなくしてすべては獨一のハリストスのみなる時は、智は純然たる直覺をうくべくして、もし此直覺なくんば他の何物も心靈の喉を蓋せずして、靈魂は祈禱の時に勇氣を受けざることを明なり、何となれば直覺は靈魂の糧なればなり、智が眞理の知識の範圍に居る時は疑問に要あらざるべし、けだし肉體の眼は先づ質問して其後太陽を熱視するには非ざる如く、心靈の目も先づ研究穿鑿して後に靈的管轄を直視するに非ざるなり、聖なる者よ、此の如くなれば汝が渴望する奧妙なる直覺も、心靈の康健を求め得たる後に、智にあらはるゝなり、されど研究と審問とに頼り此の如きの奧義を確知せんと欲するならば、是れ靈魂の無智なり、けだし福なるパウエルも奧秘と言ひ難き言人の語る能はざる者、コリント後十二の四を見聞せりと言ひしは、學問或は何等の物體的方法によりしにはあらずして、靈的範圍に奔ひ去られて奧秘の顯現を見たるによる。

終に聖なる者よ、汝は潔淨を愛するならば、すべての爲に費す所の愛を絶ち、其心の葡萄園に入りて、彼に於て働き、慾を其靈中に滅して、人世の怨惡を知らざらんことを力むべし、潔淨が神を熱視し、光り輝きて、靈中に花を開くは、願に由るにあらずし

て、何等の人の怨惡も識らざるによる。もし汝は其心が新世界の奧秘の收藏所たらんことを願はば、先づ身體の行作と、禁食と、徹醒と、奉事と、苦行と、忍耐及び思念を、黜する等の事を以て己を富ますべし、聖書を讀み之を深く考ふるを以て、其智を結つくべし、誠命を自己の目前に書すべし、勝たれて勝つときは、慾の負を返すべし、而して祈禱上不斷の對談と祈禱の言に思を沈むるを以て、汝が預め感受したる何等の形象をも何等の同形をも、其心に根絶すべし、其智を常に救世主の攝理の奧義を深く考ふるに習はすべく、處に於ても時に於ても言語にあらはすものよりは、極めて高上なる知識と直覺とを己に願ふを棄て、誠命と潔淨を求むるの勞とを續行すべし、而してすべての爲に燃起せられたる哀みの火を以て、自から主に祈願すべし、これ主が使徒致命者及び神父等の心に入れたる哀みなり、さらば哀みは汝の心に消滅して、聰明なる生涯を賜はらん、ハリストスに合一するを以て一切を絶つは、此生涯の始中終を成すなり、もし汝は奧秘を直覺せんを願はば、誠命を自から實地に耕すべく、たい之を識るに進行するのみにあらざるべし、靈的奧義の範圍に如何にして入るべきを先づ確知するを切に願ふて、其後これに着手すべし、誠命の能によりて達し得らるゝ潔淨は、奧義の第一と稱せらるゝなり、然して直覺

は智の靈的看望にして既に有るもの又は有らんとするものを悟りて全く愕然たるに至るなり直覺は智力の觀察にして萬姓諸族に於る神の攝理に驚嘆し神の光榮と新なる世界の不可解とを悟りて之が爲に心は碎かれ且新にせらるゝなりたごへばハリストスに於る嬰兒の如し新にして神なる誠命の乳に養はれて無玷なる者となり靈界の奧義と知識の開發の爲に慣練せられて知識より知識に昇り直覺より直覺に、理會より理會に昇りて、奧密に教導せられ、且堅められて愛にて高められ望にて合せられて喜を感じせらるゝに至らんされば彼は神を以て高められ、其造成せられたる創造の天然の榮を以て褒賞せらるゝなり、知識の開發により智は此等の靈界の牧地に昇り、仆れて又起き、勝ちて又勝たれて、精舎の爐中に分金られ、かくの如くして淨められん、されば恵は彼に下りて汝が願ふ所の聖三者を直視する直覺力を實驗上に賜はらん、けだし性を直視する直覺に三有り、之によりて智は高められ、其精力をあらはして練習せらるゝなり、即創造せられたる靈智ある者と靈智なき者と靈に屬する者と肉に屬する者との性を直視する二の直覺と、又聖三者を直覺することは是なり、故に智は先づ存在するもろくの受造物に注目して知識の看破により之を點檢せん、然れども感覺に屬せざる者

の爲には思想上の看望を以てするなり、智は自己を直覺する爲にも看望するを爲す、故に外部的哲學者は受造物を想考するに際し其智を以て誇りぬ、故に信仰の機密を受けたる子等の直覺は信念と結合し、聖書の草場にて牧せらるべくして、其直覺は智をすべて外部に深ふより纏めて一に集中し、ハリストスと體合するを以て之を結付くること大ワシリイとゴリイの如くなるべし、而して其の注意は聖書に記されし奧妙なる言に在り、ゆゑに知識を以て理會する能はざる所の言は信仰の助により我等が爲に容易に明白なるべくして、此に關する知識は潔淨によりて生ずる所の直覺によりて受るを得べし、知識より上にじて肉體の感覺にも智の聰明なる力にも觸れざる靈的奧義の爲に神は我等に信仰を與へ給へり、たゞ此信仰により我等は此奧義の存するを認識すべくして、又此信仰により奧義に關する希望は我等に生ずるなり、神は萬物の主なる主、主宰なる主、創造者にして且造成者なるとは信仰を以て承認むべし、然れども我等主の誠命を守らざるべからざる、奮き誠命は主の自から言ひし如く、畏を守れども、ハリストスの生活に施す誠命は録して言ふ所の如く、愛を守る所以を會得せざるべからざることは知識を以て之を決するなり、曰く我もわが父の誠を守りて其愛に居る、イオアン十

五の十故に子が其父の誠命を守るは畏れによるに非ずして愛よりすること明白にして随て我等にも其誠命を愛により守るを命すること左の如し曰く若し我を愛せば我が誠を守れ我父に求めん彼は別に撫恤者を遣はす云々イオアン十四の十五十六靈的奥義の顯現を賜はるを名づけて撫恤者の來臨とはいふ故に使徒等が受けたる聖神を受くるは是れ即靈的知識のすべての完全なり主が其父に求めて彼等に撫恤者と與ふるを告げ且之を約したるは彼等が誠命を行ひて己を淨むる時彼等と共に世々に居らん爲なり誠命を守るにより智は靈的智識の奥妙なる直覺と顯現との恩寵を賜はる所以を見るか然れども汝の賢明が豫想したる如く誠命を守るの行爲は默想により成就せらるべき神聖なる奥義の直覺を妨ぐるには非るなり。

故に汝に願ふもし汝は愛の範圍に達したるを心に感ずるならば新なる誠命を與へし者を受するにより之を守るべく畏を以てするなけれ福なるパウエルが神聖なる愛を以て焼かるゝとき言ひし如し曰く誰か我をハリストスの愛より離さん愛患なるか或は牢獄或は窘逐なるか云々と而して之に加へて言へり曰く蓋我篤く信ず死も生も現在も未來も我が主ハリストスイイスに頼る神の愛より我を離

すこと能はず(ロマ八の三十五三十八三十九)彼は大きな報酬或は尊敬或は靈賜を豊に授けらるゝを渴望すること汝の聖徳が渴望する如くなりしと何人にも思はしめざらんが爲に次の如く言へり「ハリストスより絶たれんとをも或は願ふ(ロマ九の三)遠ざかる者を主に歸せしめんが爲なりと又彼は汝が奥密なる遁世的直覺を尋ぬること其生國を尋ぬる如くなりしには非ずして他の人々も恩寵により屢々賜はる所のものを單に渴望するを汝知らんを欲するか彼が他の處に於て言ふを聞くべし曰く我れ諸人の方言及び天使の言を語ることももし愛なくんば我れ囁る銅或は響く鉄の如し我れ預言の能あり凡の奥義と凡の智識とを明にするあり且凡の信能く山を移すありと雖ももし愛なくんば我無きが如し(コリント前十三の二三)何と云れば此に引入るゝ正しき門戸は愛なればなりもし愛を得るならば愛は我等を此に引入れんされどももし愛無くして恩寵により之を賜はるならば何時か我等は必ず之を失はん何となれば高上なる聖徳と神妙なる生涯を求め得て之を守るものは愛なればなりもし修道士は愛を奪はるゝならば其心は神の住所たる平安を直ちに奪はれて我等の主が出入する恩寵の門は彼の爲に閉ざらん主の言ふ所によるに曰く我は生命の門なり我によりて人は生命に入りて牧地を

獲ん。イオアン十の九これ其靈的生命を養はんが爲にして彼處には怨惡も誘惑も彼に妨ぐるあたはずして神聖なる愛は知識の開發と奧妙なる直覺のすべての高處に彼を出入せしむることハリストスの自由を有する者の如くならんされば汝は此の眞理を知らんを欲するか即靈的生命は實に智の神聖なる直覺なるを知らんと欲するか大なるパウエルに聽從せよ。けだし彼は呼て言へり愛なくんば此事は我に益なしもし正しき門に由りて入らずんば即直覺に入らずんば我は之を願はずもし恩寵により之を與へらるゝも予は愛を得ざるときは之を強て願はざるべし何となれば愛なる天然の門に由りて入りしにはあらざるによる此により先づ聖三者を直視する第一の直覺なる愛を得んこと肝要にして其後は靈的直覺は與へられずしておのづから我に成らんと願なるパウエルの賢明を瞭解せよ彼は恩寵を以て與へらるゝ賜を悉くすて至要なるものを願ひ或人の言ふ如く賜を受けて之を守る所以のものを願へり受造物を直視する賜はモイセイにも與へられ多くの人々も之を賜はりぬされど恒久にして易はらざるものを賜はりしに非ずしてたゞ默示に於て之を賜はりしのみなりしかれども聖神を以て洗を受けて恩寵に充たされたる我は我の中に居るハリストスを感ずるを己の内部にうけんこと

を欲するなり。けだしハリストスは其實在を以て我等が性の革新を成し我等は水と聖神とを以て彼を衣て言ひ難き機密により彼は我等を自己と合して其體の諸肢と爲し給へり然れども此處に於てはたゞ聘質の形式を以てするのみにして新なる世界に於て彼は他の諸肢に生命を當然に與へ給はん此によるに神聖なるパウエルは愛なくんば之を嘉せざりしに何故汝は愛に先だちて之を願ひ且求むるかしかれども誠命を行ふは我が直覺の爲に妨とならんと言ひて近者に對する愛を汝は明に非謗し愛よりも直覺を重んじ見る可らざる處に於て之を見んことを願ふ賢なる者よ我等が未だ直覺を見る能はざる間に直覺其ものは其所に於て己を我等に示さん。それ靈魂は自然の成長に循ひて新なるものと新なる知識を己れに受け世に存在する所のものに接觸して日に日に之を學習すかくの如く靈神上の事に於ても人は智の聰明なる生涯に成長して前進擴充するに循ひ靈的直覺と神聖なる感覺とを己れに受けて之を學習するなり。而して愛の範圍に到り達する時は神に屬するものを其所に於て直視せん然れども神に屬するもの人界の事に眼を擧げ時ならずして之に通曉せん。とすらならば其視力は直に鈍り眞

實なるものに代へて妄想と幻像は人にあらはれんもし思慮ある才智を以て此事を全く悟るならば時ならずして直覺を強て求めざらんもし汝は今も直覺を見る如く思ふならば此直覺は幻影にして直覺には非ざるなり何となれば凡て想像に屬するものには類似と空想的形象のあるありて之と同一真實なる直覺もあればなりけだし視よ錯雜なる性中にも妄想の生ずるあれども時として真實なる直覺も有り得べしもし直覺は真實ならば光は顯はれて其直覺せらるゝものは殆ど現實なるものゝ如く見らるべししかれども之に反するときは目は現實に代へて影を見るべく水なき處に水を見るべく地に在る樓閣が上方に擧がりて空中に懸るを見ん有形なるものゝかくの如き現象により想像に屬するものゝ事をもこれと同一想ふべし。

もし智の視覺は誠命を行ふと默想的生涯の行爲とにより淨められずして愛の光を完全に受けずカリストスの革新に成長進歩せず靈界の天使的行爲を尋ねる階段に立ら知識の卓越を以て靈性に近づかずんば神聖なる直覺を眞に見る者となる能はざるべし而してすべて自から智なりと思ふ所の類似は妄想と名づけらるべくして真實とは名づけられざるなり智が彼に代へて此を見るは是れ智の淨め

られざるより生ずけだし眞實の性は常に不易にして存すべく決して變じて類似とならざるべしされば形像を妄想するの原因となるものは智の病にして其淨潔にはあらざるなり。

客觀的哲學者にも是ありき何となれば神より眞實なる教をうけざる所のものを以て神的思想惟したるによる彼等に聰明なる方の減じて又起るに依り其思想の概念に依り彼等は即或物なりと己が自負心を以て歸結すると共に彼等が存在する所以を斷定して其生出の開發と形像の變化とは彼等の爲に彼となり此となれりといふ而して不適當なる自負心を以て此事を談論し獨一の神を分ちて多神となし思想を弄して互に相論じ相和して其思念の無智なる妄想を性理論とは名づけたり。

故に感覺に屬する性と感覺以上なる性と聖三者其ものを直視する眞實の直覺はカリネトスの啓示により分與せらるゝなりハリネトスは首として其實在を以て人性の改新を遂げ第一の自由を挽回して之を其性に與へ其生活を施す誠命を以て眞理に昇るの途を我等の爲に自から啓き給ひしや人々に此直覺を教へて之を指示せりされば人性はたゞ人が第一に苦を忍耐すると練習と愛患とを以て慈に

沈める舊人を脱すること恰も新に生れし赤子の母腹より持來れる衣を脱する如くなる其時にのみ眞實にして妄想にあらざる直覺を見るを賜はらん其時智は靈的に更生し靈の世界にあらはれて其生國を直視するを得るなり

故に今日受造物の直覺はたとひ美なりといへども是れたゞ知識の影にして其美は夢中の妄想と異なるなきなり此により啓示の靈を以て新なる世界を直視して、智が之を精神上に樂むは是れ即恩寵の働にして知識の影にあらず而して其美は使徒の書せるものと擇ぶなきなり言ふあり神が彼を愛する者の爲に備ひし事は目未だ見ず耳未だ聞かず人の心に未だ入らずと唯我等には神己の神を以て之を顯せり蓋神は察せざる所なし神の深きをも察するなりコリント前二の九十二而して此直覺は第一の直覺よりは極めて高尚なる直覺を受るを得るに至るまでは、智の極とならん何となれば智が完全なる愛の範圍に引入れるに至るまでは、一の直覺は他の直覺を人に遞傳すればなり愛は靈に屬するもの、收斂所にして心の潔淨に居を占むるなり智は愛の範圍にある時は恩寵働きて靈的直覺をうけ、神秘なるもの、親見者とならんけだし予は言へり聰明なる直覺の啓示の賜は二の方法にて與へられん

けだし或時には信の熱切なるが爲に恩寵により與へらるれど或時には誠命を行ひしが爲及び潔淨の爲に與へらるるなり恩寵により與へらるるものはたとへば福なる使徒等に與へられしもの、如く彼等が智を淨めて直覺の啓示を賜はりしは誠命を行ひしによるにあらずして信の熱切による何となれば正直にしてハリストスを信じ燃ゆるが如くなる心を以てハリストスに従ひ疑ふ所なければなりさればハリストスが其崇拜せらるべき撫育を行ひて撫恤者たる神を彼等に遣はすや彼等の智を淨め且完うして舊き慾に沈める人を彼等の内部に有効的に殺死し新なる神に屬する人を彼等に有効的に復活して彼等は彼と此とを感知したり

此の如く福なるパウエルも奥密に改新せられて其後奥義の啓示を直覺せり然れ共此際にもパウエルは之に依頼せざりき彼は恩寵と賜とを有効的にうけたり然れども其生命の全時進行して己まざりしは是れ主が彼と共にすること其忠なる者と共にする如くし途上談話して彼をダマスコに遣はすとき賜はりし恩寵に出來るだけ報ひ奉らんが爲なりきイエススの彼と顯然談話したることは書さるるあらず然れどもアナニヤが彼に告げしことは録して言へり兄弟サウルよ途にあらはれたる我等の主イエスス(ハリストス)は我を汝に遣はせり汝の目見るを得て聖

神に満てられんが爲なり」と行實九の十七、而して彼を洗するや、彼は聖神に満てられて啓示の神秘なる奧義を感じたること、イエスが聖使徒等と共にせしとき成りしもの、如くなりき。イエス言へり、「我尙多く汝等に言ふべき事あれども、汝等今容るゝ能はず、然れども眞實の神來らん時、彼は汝等を凡の眞實に導き且將來の事を汝等に示さん」イオアン十六の十二、十三。

福なるパウエルは聖神を受け、聖神を以て新にせられて、啓示の奧義をも賜はりしや、其時彼は啓示の神を以て直視して直覺を樂み、言ひ難き言を聴き、性に超越する直覺を見天の能力を直覺して無限の歡喜に入り、神に屬するものを樂めりき。されば「エウクライト」と稱する異端者等が無智により主張して、パウエルは自己の願により此上昇を得たりといふ如きことはあらざるべきなり。智が彼處に上昇することは全く能はざるものとす。之に反してパウエルが啓示の神を以て攝取せられたることは、コリンフ人に達する書に於て誇れる人々に對し自から書する所の如し、けだし彼等は己を以て聖使徒等に擬し、其思念の妄想を表白して、之を靈的直覺とは名づけたり。此事は多くの異端者等にも關係す、即近くはオリゲンにも、ワレンティオンにも、デイスサノフの子にも、マルキオンにも、マネスにも、其他使徒時代より始まりて今

も處々方々に現はるゝもろゝ異端の首領等にも關係するなり。終に魔鬼の妄想の爲に智力を害はれたる人々あり、福なる使徒等の教を敗壞せんと欲せしかば、神の使徒パウエルは其現出せる魔鬼の影に誇れる異端者の高慢を無に歸せしめざるべからざるを餘儀なくせられき。故に謙遜と大なる恐れにより自己の神聖なる直覺を記し、之を他人に歸して書しぬ。けだし言ふ「我ハリストスに在る一人を知る此の人は十四年前に肉體に在りて知らず、肉體の外に在りて知らず、神之を知る樂園に擧げられて道ひ難き言人の語る能はざるものを聞きしを知る」とコリンフ後十二の二、四、彼は攝取せられて心ならず其智を以て直覺により第三重の天に至れりと言ふ。彼は直覺を感じりと言ふ、語るを聞けりと言へり、然れども直覺の言或は其有様の如何なりしをば書すること能はざりき。けだし智が啓示の神により此を其位地に於て見るや、其時之が爲の位地にあらずして此を言ふの命をうけざりき。然れどもたとひ此を語らんと欲するも能はざりしならん、何となれば此を見たるは肉體の官能を以てしたるに非ざればなり。智が肉體の官能により受くる所のものは肉體の範圍に於て再び之を説明するを得べし。然れども己の内部に靈的範圍に於て明白に直視し、或は聞き或は感ずる所のものは、肉

體に歸るときは、之を復説する能はずたゞ、此を見たるを想起するのみにて如何様に見たるかは明に轉達する能はざるべし。魔鬼の妄想に敗壞せられたる異端の首領等が著したる默示と名づけらるる偽書は此を以て證責せらるべしたとへば穹蒼の上に第宅あり、之に智を引入れて任意に學ばしむといふ如き智が天上に見るといふ如き審判により除名せられし者等が居る所の住所のこの如き上なる能力の多様な状態と其能力の有勢なることの如き是なり。是れ皆自負心に酔はしめられ魔鬼の働の爲に麻痺せしめられたる智の影なり。是を以て福なるパウエルは一言を以てすべての直覺の面前に門を閉して其門を沈黙の内部に持去りぬ。即智は此を説明するを得るも之が許しをうけざる處に持去れり。けだし言へらくすべて肉體の範圍に於て舌が言ひ顯すを得る直覺は心中の思の妄想にして恩寵の作用にあらずと。終に汝の成徳は此を記憶して深き思念の妄想に注目すべし。鋭才なる修道士は常に此戰に遭遇すること屢々にして、彼等は浮誇の養成せらるべきものを推究穿鑿して新設を願ひ、之を表示するが爲に爲さるる所なきなり。エデツサの産にマルバスと名づくる者あり、高き生涯を送りて最重き勞苦と患難

とを忍耐したるに拘はらず一朝にしてエウクタイトと稱する異端の創設者とはなりぬ。けだし言ふあり、彼はサワといへる福なるイウリアンの門徒となり、暫時の間彼と共にシナイ又はエキベトに往來したりけるが、當時の大なる神父等に遇ひ、又福なるアントニイにも遇ふて、彼より靈魂の淨潔の事及び救の事を語れる奥妙なる談話を聞き、情慾のことに關する幾微なる問題をも開けり。アントニイ説明していへらく、智は潔淨の後に靈界の奧義を曉る直覺力を有せん而して靈魂は誠命を行ひて舊き慾を脱ぎ、原始の性の康健に達するならば、恩寵により無慾を賜はるを得んと。マルバス年少氣銳の時に當り、此等の言を聴取するや、火の如く熱心して己の邑に歸りけるが、好名の慾の燃ゆるに乘じ、自から通世者の室を擇びて、戰闘と甚しき愛患と不斷の祈禱とに己を捧げたりき。然るに好名の慾の燃ゆる、即聞きし所の高上なる賜を得んとする望の起るや、彼は眞理の敵と對戦する熱練を學ばず、強者又は有力者を滅亡に誘引する敵の姦計欺瞞及び狡獪を曉らすたゞ、戰闘と愛患と無所求と苦行と節制とに依頼するのみにて、自卑と謙遜と中心の悔悟とを求めず、即悪者と對抗するに此等の勝たれざる武器を求めず、事を遂げ、誠命を守り、患難を忍耐するときには己を無益の僕と思ふべしといへる聖書の言をさへ記憶せずし

て、たゞ其平生爲す所に據り己を高しとする自負心のみ熾になりて、聞きし所の高上なる賜を得んと欲する思に焦がれたりしが、多時を経過したる後、魔鬼は彼に謙遜の行なくして、たゞ其聞きし所の奥義を知らんが爲に直覺を渴望するのみなるを認むるや、彼に無限の光の中に現はれて言へり、我は即撫恤者なり、父より汝に遣はされたるは其行爲の爲に願ふ所の直覺を見るを汝に賜ひ無慾を汝に與へて將來汝を行爲より安んせしめんが爲なりと。然して之が代りとして悪者は不幸なる者より叩拜を要求せり、然るに此愚者は悪者の戦を感せざるにより直に喜んで彼を受け、彼に叩拜して、之と同時に彼の權下に立てり、されば敵は神聖なる直覺に代へて邪なる妄想を彼に満たし、真理の爲に勞するを廢せしめ、彼を稱揚して、無慾の空望を彼の前に囿り、告げて言へり、今や汝は戦闘にも身體を苦しむるにも慾念又は嗜好と戦ふにも必要あらす。而して彼はエウクレイトなる異端の首領とはなれり、彼等はますます、蔓延して憎むべき不正なる教を始むるや、當時の主教の爲に逐はれたりき。

又他に同じエデッサの邑にアシナスと名づくる者あり、今に至る迄歌はるゝ多くの三曲を著作し、高き生涯を送りけるが、名の顯はるゝに至るまでは難業苦行を以て無分別に己を束縛せり、魔鬼は彼を誘惑し、其庵より引出して、ストロイと名づくる山の巔に立て、彼に車輪と馬の状を示し、約して言ひけるは、神はイリヤの如く汝を樂園に攝取せん爲に我を遣はせりと。然るに彼は小兒の如くなる智慧を以て欺瞞に陥り、車輪に乗るや、此妄想は全く破れて、彼は高處より自から身を投じ、彼處より地に落ちて、笑ふべき死を遂げたりき。

予が茲に此事を述ぶるは徒然なるに非ず、聖者の滅亡に渴する魔鬼の罵詈雑言を我等認識して、智的生涯の高きを非時に願はざらん爲なり、然らずんば我等は悪敵の爲に笑はれん、けだし慾に満たさるゝ青年が忌憚なく空論して無慾の奥義を決定するは、今も我が見る所なり。

慾に満たされて有形なるものと無形なるものとの關係を推究する人々は、健康を守る規則を教授する病者と擇ぶなきに關し、聖者の一人は次の如く書せり、白く福なるパウエルは門徒等の誠命を輕んじ、慾に克たざりしも、潔淨に依りて能ふべき奥義の直覺に於る幸福を渴望するを知るや、彼等に告げて言ひけるは、先づ慾の舊人を脱すべし、其時は造物主に似たる奥義の知識を以て新にせられし新人を衣るを願ふべし、實に恩寵を以て成れる我及び他の使徒等の幸福を願ふなかれ、何となれ